

吹田市

目俵遺跡・吹田操車場遺跡 17

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

目俵遺跡・吹田操車場遺跡 17

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

目俵遺跡・吹田操車場遺跡 17

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 第3面（南東部）検出状況（北東から）



1. 第3面（北西部）検出状況（南西から）



2. 173・240・241 溝検出状況（南西から）

序 文

遺跡が位置する吹田市目俵町は山城と難波を結ぶ三嶋路に近接し、古くから交通の要衝でした。北西側には北摂山地の南麓から広がる千里丘陵があり、丘陵周辺では古墳時代から奈良時代に操業された吹田須恵器窯跡群や、後期難波宮に瓦を供給していた七尾瓦窯跡や平安宮に瓦を供給していた吉志部瓦窯跡がみつかっています。

調査地周辺はながらく吹田総合車両所の用地として利用されてきました。吹田総合車両所では昨今の車両改造や車両整備技術の進歩に対応する施設を刷新するためリニューアル工事が進められており、この工事に伴い当センターで発掘調査を実施しました。

今回の調査対象となった範囲は目俵遺跡と吹田操車場遺跡に跨っています。今回の発掘調査では平安時代後期から室町時代にかけての溝・井戸・土坑が検出されるとともに、大量の土器が出土しています。

今回新たに発見された中世を中心とした遺構・遺物は、当地における人々の生活や生産活動の歴史の変遷を考える上で重要な手がかりとなるもので、吹田市の歴史を繙く一助となれば幸いです。

最後になりましたが、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所をはじめ、御指導と御協力を賜った大阪府教育庁、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層の御理解と御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和5年3月31日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は、吹田市目俵町1-1に所在する目俵遺跡・吹田操車場遺跡の発掘調査報告書である。公益財団法人大阪府文化財センターの調査名は、「目俵遺跡・吹田操車場遺跡21-1」である。
2. 発掘調査は、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。遺物整理及び本書の編集は、公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和5年3月31日をもって一連の事業を完了した。

【発掘調査の委託事業名称】

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う目俵遺跡・吹田操車場遺跡の埋蔵文化財発掘調査

【委託契約期間】 令和4年3月1日～令和4年8月25日

【現地調査期間】 令和4年3月1日～令和4年7月31日

【遺物整理の委託事業名称】

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う目俵遺跡・吹田操車場遺跡の埋蔵文化財発掘調査遺物整理

【委託契約期間】 令和4年8月1日～令和5年3月31日

【遺物整理期間】 令和4年8月1日～令和4年12月31日

【印刷製本期間】 令和5年1月1日～令和5年3月31日

【保存処理の委託事業名称】

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う目俵遺跡・吹田操車場遺跡の埋蔵文化財発掘調査遺物整理（その2）

【委託契約期間】 令和4年11月24日～令和5年9月25日

3. 現地調査及び遺物整理作業は以下の体制で実施した。

【現地調査】 令和3年度

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井聡、調査課長 岡戸哲紀
調査課長補佐 佐伯博光、主査 伊藤武、副主査 後川恵太郎

令和4年度

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井聡、調査課長 佐伯博光
調査課長補佐 後藤信義、主査 伊藤武（令和4年6月まで）、副主査 後川恵太郎

【遺物整理】 事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井聡、調査課長 佐伯博光

調査課長補佐 後藤信義、副主査 後川恵太郎

4. 本書で使用した写真の内、遺物写真は中部調査事務所写真室が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は後川が行った。
6. 現地調査・遺物整理に際し、個人より御指導、御教示をいただいた（50音順、敬称略）。
青山愛、植村昌子、上原真人、久保直子、早野浩二、藤田恒春

凡 例

1. 基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用する。単位はm（メートル）で表記する。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、T.P.+は省略する。
2. 平面図の使用測地系は、世界測地系（測地成果2011）に準拠する平面直角座標系第VI系を使用する。単位はすべてm（メートル）であり、図中の表記は省略する。
3. 遺構図の方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北とする。
4. 発掘調査及び整理作業は、財団法人大阪府文化財センター2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して実施した。
5. 土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に基づく。
6. 遺構名は、アラビア数字の通し番号を付け、遺構の種類を加えた（例：1溝）。掘立柱建物は遺構名とは別に通し番号を付けた（例：掘立柱建物1）。
7. 遺構図縮尺は、40分の1を基本とし、内容に合わせて適宜変更した。
8. 遺構図における断面図の計測位置は、平面図上に直線で示した。
9. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とする。実測図の断面は須恵器・陶磁器を黒塗りした。灯明皿は煤付着範囲をアミフセで表現した。また、遺物番号の横に白色土器は「白」、黒色土器は「黒」の文字を入れた。
10. 各遺物の詳細は観察表に記載した。なお、瓦質に焼成した土器は瓦器に呼称を統一した。
11. 本書を作成するに当たって使用した土器編年は、以下の文献を引用及び参照した。

大川清・鈴木公雄・工楽善通編 1996『日本土器事典』

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさしー陶邑の須恵器ー』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』

田辺昭三 1981『須恵器大成』

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』

日本中世土器研究会編 2022『新版概説中世の土器・陶磁器』

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』

橋本久和 2018『概論瓦器椀と中世社会』

平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号

平安学園考古学クラブ 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』

目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の経過	2
第2章 遺跡周辺の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査成果	6
第3章 調査・整理の方法	7
第4章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構・遺物	10
第5章 総括	57
目依遺跡・吹田操車場遺跡遺物観察表	67

写真図版

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

図1 調査地位置	1	図28 393 土坑平・断面、出土遺物	32
図2 周辺地形	3	図29 72 柱穴他平・断面	33
図3 遺跡分布	5	図30 248 柱穴他平・断面	35
図4 地区割	8	図31 270 柱穴他出土遺物	36
図5 柱状断面	9	図32 第3面平面(2)	37
図6 第3面全体平面	10	図33 118 溝平・断面、出土遺物	38
図7 第3面平面(1)	11	図34 469 井戸平・断面	39
図8 1 溝他平面	12	図35 469 井戸出土遺物(1)	40
図9 1 溝他断面、出土遺物	13	図36 469 井戸出土遺物(2)	41
図10 155 溝他断面、出土遺物	14	図37 472 井戸平・断面	42
図11 3 溝他平・断面	15	図38 472 井戸出土遺物(1)	43
図12 3 溝他出土遺物	16	図39 472 井戸出土遺物(2)	44
図13 7 溝出土遺物(1)	17	図40 474 井戸平・断面、出土遺物	45
図14 7 溝出土遺物(2)	18	図41 掘立柱建物2平・断面	46
図15 5 溝他平・断面、出土遺物	19	図42 掘立柱建物4平・断面	47
図16 173 溝他平・断面	20	図43 掘立柱建物5平・断面	48
図17 173 溝他出土遺物	21	図44 524 土坑平・断面、出土遺物	49
図18 11 井戸他平・断面、出土遺物	22	図45 471 土坑他平・断面、出土遺物	50
図19 162 井戸他平・断面	23	図46 120 落込み平・断面	51
図20 162 井戸他出土遺物	24	図47 161 溝他出土遺物	52
図21 160 土坑他平・断面、出土遺物	25	図48 268 柱穴他出土遺物	53
図22 311 井戸他平・断面、出土遺物	26	図49 358 ピット他出土遺物	55
図23 掘立柱建物1平・断面	27	図50 出土遺物割合	58
図24 322 土坑他平・断面、出土遺物	28	図51 土器法量分布	60
図25 掘立柱建物3平・断面	29	図52 遺構変遷	62
図26 307 土坑他平・断面、出土遺物	30	図53 屋敷地の溝	63
図27 329 土坑平・断面、出土遺物	31	図54 周辺の既往調査区合成	65

表 目 次

表1 吹田工場・吹田総合車両所の歴史	2	表3 遺構と土器変遷	61
表2 現地調査期間・大阪府教育庁立会	2		

巻頭図版目次

巻頭図版1

1. 第3面(南東部)検出状況(北東から)

巻頭図版2

1. 第3面(北西部)検出状況(南西から)
2. 173・240・241 溝検出状況(南西から)

図 版 目 次

扉 第3面(北東部)全景(南西から)

図版1 遺構

1. 1・602 溝断面(南東から)
2. 3 溝断面(南東から)
3. 7 溝断面(南西から)
4. 118 溝断面(北西から)
5. 173 溝断面(南西から)
6. 240 溝断面(南東から)
7. 241 溝断面(南西から)
8. 416 溝断面(北西から)

図版2 遺構

1. 11 井戸曲物検出状況(南東から)
2. 162 井戸曲物検出状況(北西から)

図版3 遺構

1. 469・472・474 井戸検出状況(北から)
2. 469 井戸遺物出土状況(南東から)
3. 469 井戸完掘状況(南西から)

4. 393 土坑遺物出土状況(南西から)

5. 488 土坑遺物出土状況(南東から)

図版4 遺構

1. 472 井戸遺物出土状況(南から)
 2. 472 井戸曲物検出状況(南東から)
- ### 図版5 遺構
1. 掘立柱建物1検出状況(南西から)
 2. 掘立柱建物2検出状況(北東から)
 3. 掘立柱建物3検出状況(南東から)
 4. 掘立柱建物4検出状況(南西から)
 5. 掘立柱建物5検出状況(南西から)
 6. 77 柱穴検出状況(南西から)
 7. 79 柱穴検出状況(南東から)
 8. 269 柱穴検出状況(南西から)

図版6 遺物

図版7 遺物

図版8 遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 (図1、表1)

目俵遺跡・吹田操車場遺跡における今回の発掘調査は、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所が吹田総合車両所内で進めている吹田総合車両所近代化改良他工事に先立つものである。

吹田総合車両所は、前身となる吹田工場の時代から車両基地・車両の整備施設の前線として施設の改築や増築を繰り返しながら使用されてきた。近年、車両軽量化等にみられる次世代型の車両が開発されたことや、連結した車両を一括して整備する車両整備技術等が向上したことから、それに対応する施設への建て替えと各施設の効率的な配置を計画した近代化改良他工事が計画されている。

今回の調査地は吹田市目俵町1-1に所在し、JR吹田駅に近接する吹田総合車両所内の北東側に位置する。調査区は車両入場検修場として機能した職場79号棟の跡地に大半が重なるような位置関係にあり、調査区の範囲は目俵遺跡と吹田操車場遺跡に跨っている。

令和3年5月、今回の調査に先立ち、大阪府教育庁文化財保護課は職場79号棟基礎撤去に伴う3か所の立会調査を実施した。立会調査では、各トレンチで古代から中世の遺構・遺物が確認されている。



図1 調査地位置

この結果を受けて、令和3年9月1日付で大阪府教育庁文化財保護課と西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所、公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センター）の3者は発掘調査の覚書を結んだ。

その後、令和4年2月24日付で西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所とセンターは発掘調査の委託契約を締結し、センターは大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと今回の発掘調査を実施した。

発掘調査は、令和4年3月1日から令和4年7月31日まで実施した。記録保存としては、平面図や土層断面図の作成、各遺構の平面・断面図の作成、写真撮影等を行った。また、全体の平面図の作成については、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。

現地の調査中には遺物洗浄・注記、図面整理、遺物台帳の作成などの基礎整理も併せて行っている。なお、発掘調査では調査区を北西部、北東部、南東部に3分割して作業を進めており、各調査区の調査終了時には大阪府教育庁文化財保護課の現地立会を受けて、発掘調査を完了している。

遺物整理は、令和4年8月1日から令和4年12月31日まで実施した。今回出土した遺物の内、木製品の藪戸と鉄刀は大阪府教育庁文化財保護課から保存処理の指示があり、令和4年11月24日付で西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所とセンターは保存処理の委託契約を締結し保存処理を実施している。令和5年3月31日、本書の刊行をもって整理作業を終了した。

表1 吹田工場・吹田総合車両所の歴史

年代	吹田工場・吹田総合車両所の歴史
明治 9 (1876) 年	大阪から向日町の区間に鉄道が開通する。同年、吹田駅、高槻駅が開業。
大正 10 (1921) 年	湊町駅（現：JR 難波駅）に併設する鉄道省湊町駅工場が吹田に移転。神戸鉄道局吹田工場（吹田総合車両所の前身）が発足する。
昭和 4 (1929) 年	木機職場を廃止する。貨車職場と台車職場が新設される。
昭和 18 (1943) 年頃	戦時の輸送力強化を目的とした車両の改造工事を施工。
昭和 20 (1945) 年	米軍の空襲により、吹田工場内の施設・車両を喪失する。
昭和 21 (1946) 年	占領下、進駐軍の列車整備を行う。
昭和 22 (1947) 年	車体修繕場を新設する。
昭和 45 (1970) 年	万国博覧会に向け、増発される車両整備に対応する。
昭和 58 (1983) 年	貨車職場と輸送職場が廃止される。
昭和 62 (1987) 年	西日本旅客鉄道株式会社が発足する。
平成 24 (2012) 年	吹田工場（本所）と支所が統合する。 吹田総合車両所が発足する。

※西日本旅客鉄道株式会社・吹田工場百年史編集委員会編 1996『吹田工場百年史』、日本国有鉄道大阪鉄道管理局吹田工場 1976『写真で見る 80 年』を参照して作成。

第2節 現地調査の経過（表2）

各調査区の現地調査期間、大阪府教育庁文化財保護課の立会日は、以下の表のとおりである。

表2 現地調査期間・大阪府教育庁立会

	現地調査期間	大阪府教育庁立会
北西部	令和4年3月1日～令和4年5月10日	令和4年4月21日
北東部	令和4年4月22日～令和4年6月15日	令和4年6月10日
南東部	令和4年6月4日～令和4年7月31日	令和4年7月22日

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境 (図2)

目俵遺跡・吹田操車場遺跡は、低位段丘ないし安威川右岸に形成された標高5～7mの低地に分類される地形に立地する。目俵遺跡・吹田操車場遺跡の北西側には千里丘陵があり、丘陵上では古墳時代から奈良時代にかけての須恵器の窯跡が多数確認されている。今回の調査区周辺の基盤層は大阪層群上部の粘土層ないし砂礫層で形成されており、粘土層上面では吹田操車場遺跡の既往調査で須恵器製作に用いるために粘土を採掘した可能性がある土坑が多数検出されている。



図2 周辺地形

第2節 歴史的環境 (図2・3)

吹田市域を中心とした、旧石器時代から中世の遺跡について以下で概観する。

旧石器時代

千里丘陵の縁辺と周辺に広がる低地では、旧石器が出土した遺跡が少数確認されている。ナイフ形石器を出土した遺跡には吉志部遺跡・目俵遺跡・吹田操車場遺跡・高城遺跡等がある。

縄文時代

旧石器時代に続いて人々の活動痕跡は希薄で、縄文時代の遺物が少数確認されている。草創期の有舌尖頭器が出土した遺跡には中ノ坪遺跡と吉志部遺跡がある。中期前半の船元式の縄文土器が出土した遺跡には高浜遺跡がある。晩期の突帯文土器は七尾瓦窯跡の下層から出土したものや、目俵遺跡・吹田操車場遺跡から出土したものがある。

弥生時代

縄文時代と比較して遺構・遺物が多数確認されており、遺跡数が飛躍的に増加する。弥生時代前期の土器が出土した遺跡には五反島遺跡・中ノ坪遺跡がある。弥生時代中期から後期の集落には垂水遺跡がある。垂水遺跡に近い垂水南遺跡では、垂水遺跡と同時代の弥生土器がまとまって出土している。中期の集落には上記以外に、七尾東遺跡・中ノ坪遺跡が確認されており、中ノ坪遺跡の集落は後期初頭頃まで存続する。

古墳時代

千里丘陵上では古墳時代中期から須恵器生産が開始され、吹田須恵器窯跡群として周知される多数の窯跡が確認されている。この内の1基である吹田32号窯は国内で須恵器生産が開始された初期段階に操業された窯で、鋸歯文や斜格子文を施した器台等が出土した。この後、千里丘陵上での須恵器の生産は奈良時代前期までおおよそ300年間続く。また、須恵器生産に用いる粘土を採掘した可能性がある群集土坑が吹田操車場遺跡や片山荒池遺跡で検出されている。

この時代の集落としては、吹田須恵器窯跡群の南側に位置する垂水南遺跡で竪穴建物や掘立柱建物が確認されている。垂水南遺跡では初期須恵器や韓式系土器が出土しており、近在する垂水遺跡・五反島遺跡でも同様の遺物が出土している。

吹田市域の古墳は吉志部1～3号墳・新芦屋古墳等が確認されている。千里丘陵上は須恵器窯があつて生産域として利用されており、古墳の数は総じて少ない。片山荒池遺跡では円筒埴輪等の埴輪片がまとまって出土しており、現代の開発に伴って削平された古墳の存在も想定される。

古代・中世

千里丘陵上での須恵器生産は8世紀前葉頃に操業を終えるが、丘陵縁辺では後期難波宮に瓦を供給した七尾瓦窯、平安京に瓦を供給した吉志部瓦窯が確認されている。

河内と山城を結ぶ幹線道の三嶋路は千里丘陵周辺を通過したと考えられており、交通の要衝であったことから、近接する目俵遺跡・吹田操車場遺跡周辺では古代以降の集落が多数確認されている。

西の庄東遺跡では、平安時代後期の遺物がまとまって出土した井戸・土坑が複数検出された。高城遺跡や高畑遺跡では、平安時代の遺構・遺物が確認されている。吹田操車場遺跡では、飛鳥時代から中世の掘立柱建物が多数検出されており、平安時代の掘立柱建物には大型の四面庇付掘立柱建物が含まれる。遺物は円面硯・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁等が出土している。



- | | | | |
|---------------|----------------|----------------|--------------|
| 1. 目依遺跡 | 16. 元町遺跡 | 31. 七尾瓦窯跡 | 46. 片山荒池遺跡 |
| 2. 吹田操車場遺跡 | 17. 浜の堂遺跡 | 32. 地徳寺遺跡 | 47. 片山前遺跡 |
| 3. 明和池遺跡 | 18. 都呂須遺跡 | 33. 吉志部2・3号墳 | 48. 片山遺跡 |
| 4. 中ノ坪遺跡 | 19. 高浜遺跡 | 34. 吉志部1号墳 | 49. 西の庄東遺跡 |
| 5. 吹田須惠器窯跡群 | 20. 宮之前遺跡 | 35. 吉志部瓦窯跡 | 50. 吹田城跡 |
| 6. 正雀1丁目遺跡 | 21. 宮之前遺跡B地点 | 36. 吉志部遺跡 | 51. 片山公園遺跡 |
| 7. 吹田操車場遺跡C地点 | 22. 神境町遺跡 | 37. 原東遺跡 | 52. 出口古墳 |
| 8. 吹田操車場遺跡B地点 | 23. 神境町遺跡B地点 | 38. 千里丘7丁目所在遺跡 | 53. 泉遺跡 |
| 9. 高畑遺跡 | 24. 相川遺跡 | 39. 岸部東遺跡 | 54. 西の庄遺跡 |
| 10. 昭和町遺跡B地点 | 25. 相川遺跡B地点 | 40. 岸部中遺跡 | 55. 西の庄遺跡B地点 |
| 11. 高城遺跡 | 26. 井高野遺跡B地点 | 41. 片山東屋敷廻遺跡 | 56. 豊嶋部条里遺跡 |
| 12. 昭和町遺跡 | 27. 井高野遺跡 | 42. 片山芝田遺跡B地点 | 57. 須惠器出土地 |
| 13. 朝日町遺跡 | 28. 蜂前寺跡 | 43. 片山芝田遺跡 | |
| 14. 吹田城跡推定地 | 29. 千里丘6丁目所在遺跡 | 44. 円塚古墳 | |
| 15. 高城B遺跡 | 30. 七尾東遺跡 | 45. 天道遺跡 | |

図3 遺跡分布

第3節 既往の調査成果

目俵遺跡は、平成5年に吹田市教育委員会が目俵市民体育館建設に先立ち実施した試掘調査で新たに発見された遺跡である。この発掘調査では、弥生時代から古墳時代の集落や中世の耕作地が検出された。また、平成30年にはセンターが吹田総合車両所近代化計画に伴って吹田総合車両所内で試掘調査を実施しており、中世の遺構・遺物が確認された。

吹田操車場遺跡は、昭和42年に水路整備工事時に中世の遺物が出土したことで、新たに発見された遺跡である。平成12・18～29年には吹田（信）基盤整備事業と北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業等に伴って、吹田市教育委員会とセンターが継続的に発掘調査を実施し、縄文時代から中世に至る多種多様な遺構・遺物が確認されている。

目俵遺跡参考文献

吹田市教育委員会 1999 『目俵遺跡』

吹田操車場遺跡参考文献

(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999 『吹田操車場遺跡』

(財) 大阪府文化財調査研究センター 2001 『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』

(財) 大阪府文化財センター 2008 『吹田操車場遺跡Ⅲ』

(財) 大阪府文化財センター 2010 『吹田操車場遺跡Ⅳ』

(財) 大阪府文化財センター 2011 『吹田操車場遺跡Ⅴ』

(財) 大阪府文化財センター 2011 『吹田操車場遺跡Ⅵ』

(公財) 大阪府文化財センター 2011 『吹田操車場遺跡Ⅶ』

(公財) 大阪府文化財センター 2012 『明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』

(公財) 大阪府文化財センター 2013 『吹田操車場遺跡9』

(公財) 大阪府文化財センター 2014 『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』

(公財) 大阪府文化財センター 2015 『吹田操車場遺跡11』

(公財) 大阪府文化財センター 2016 『吹田操車場遺跡12』

(公財) 大阪府文化財センター 2016 『吹田操車場遺跡13』

(公財) 大阪府文化財センター 2017 『吹田操車場遺跡14』

(公財) 大阪府文化財センター 2018 『吹田操車場遺跡15』

(公財) 大阪府文化財センター 2018 『吹田操車場遺跡16』

吹田市教育委員会・吹田市都市整備部 2004 『吹田操車場遺跡』

吹田市教育委員会 2008 『吹田操車場遺跡確認調査報告書』

吹田市教育委員会 2010 『平成21(2009)年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

吹田市教育委員会 2010 『吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集1』

吹田市教育委員会 2011 『平成22(2010)年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

※図54、表3は上記の参考文献を参照して作成した。

第3章 調査・整理の方法

発掘調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。

調査名・調査区名

調査名は「目俵遺跡・吹田操車場遺跡 21 - 1」である。発掘調査は調査区を北西部、北東部、南東部に3分割して行った。

地区割 (図4)

世界測地系 (測地成果 2011) の平面直角座標系第VI系を、第I～IV区画に区画した。第I区画は「J 5」、第II区画は「7」、第III区画は 100 m、第IV区画は第III区画を 10 m単位に区画した。遺物は、第IV区画を基準として取り上げた。

遺構名

通し番号を使用し、属性は遺構番号の後ろに付けた (例：1 溝)。掘立柱建物は、遺構番号とは別の通し番号を使用し、属性は番号の前に付けた (例：掘立柱建物 1)。

地層と遺構面

地層は基盤層と現代造成土の間に堆積する近世作土を第1層、中世作土を第2層、基盤層を第3層とした。遺構面は第1層上面を第1面、第2層上面を第2面、第3層 (基盤層) 上面を第3面として調査を行った。

掘削方法

現代の造成土と第1層を機械掘削によって除去した後、人力によって遺物包含層の掘削作業及び遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構図

現地での平面図と断面図の作成は、縮尺 10 分の 1、20 分の 1 を基準に作成した。全体図は空中写真測量を実施して作成した。調査区の壁断面は、断面図を縮尺 20 分の 1 で作成した。報告書の挿図は、Adobe 社製 Illustrator を用いて、原図に加工を施した。

現場の写真撮影は、6×7フィルムカメラ (白黒・カラーリバーサル)、デジタル一眼レフカメラ (APS-C) を用いた。デジタル一眼レフカメラの画像データは、JPEG と RAW の2種類を作成した。写真のフィルム及びデータは、現場作業と併行して、収納・台帳の作成を行った。

整理作業と発掘調査報告書の作成

出土遺物は、遺物登録を行って台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。注記の記載内容は「メタワラ 21 - 1 - 登録番号」である。

整理作業では、出土遺物の抽出・接合作業を行った後、実測・拓本作業等を実施した。発掘調査報告書用の遺物挿図は、遺物実測図のデジタルトレースを行って作成した。発掘調査報告書は Adobe 社製 Indesign を用いて本文と挿図を編集し完成させた。

遺物整理を終了した後、出土遺物は掲載遺物と未掲載の遺物に分けて収納を行い、それぞれの収納台帳を作成した。

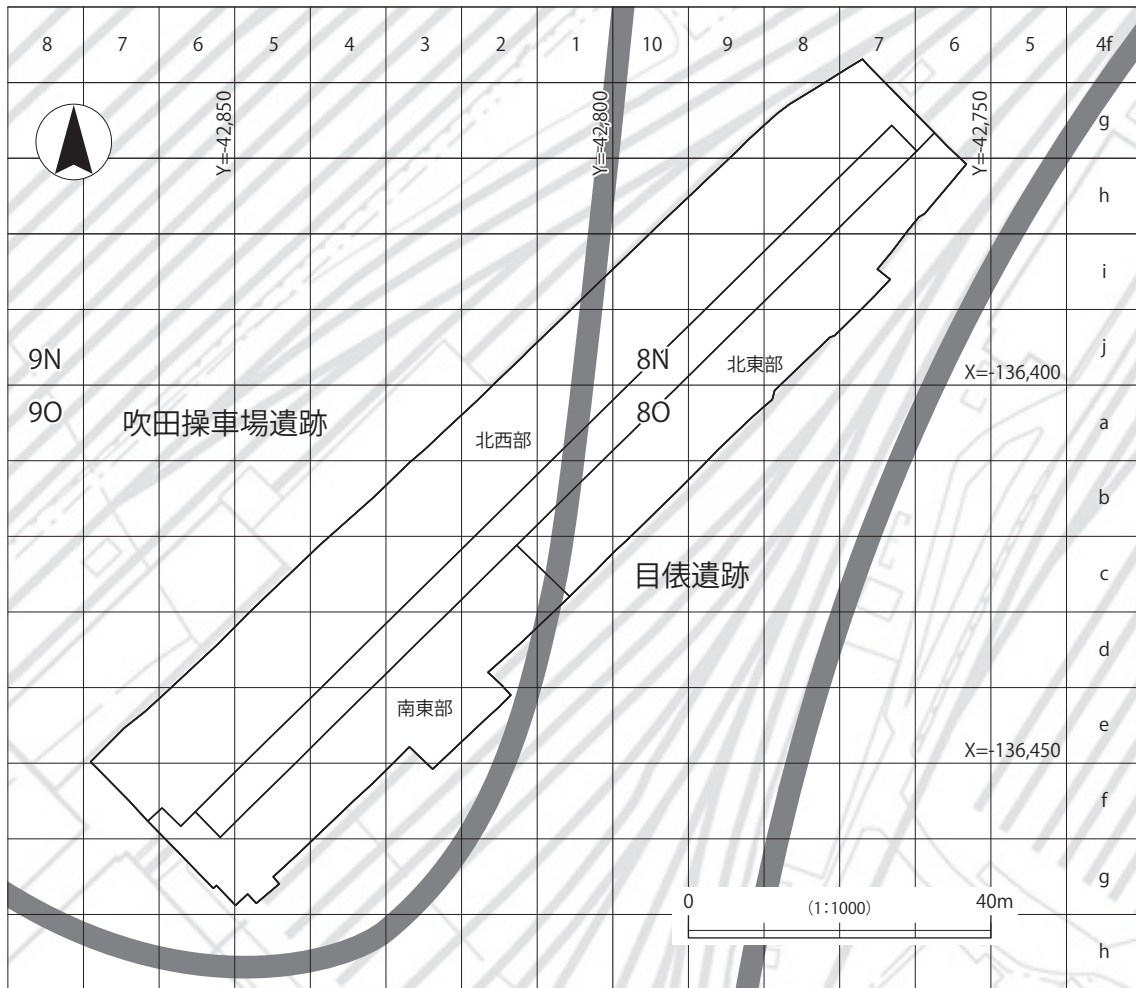
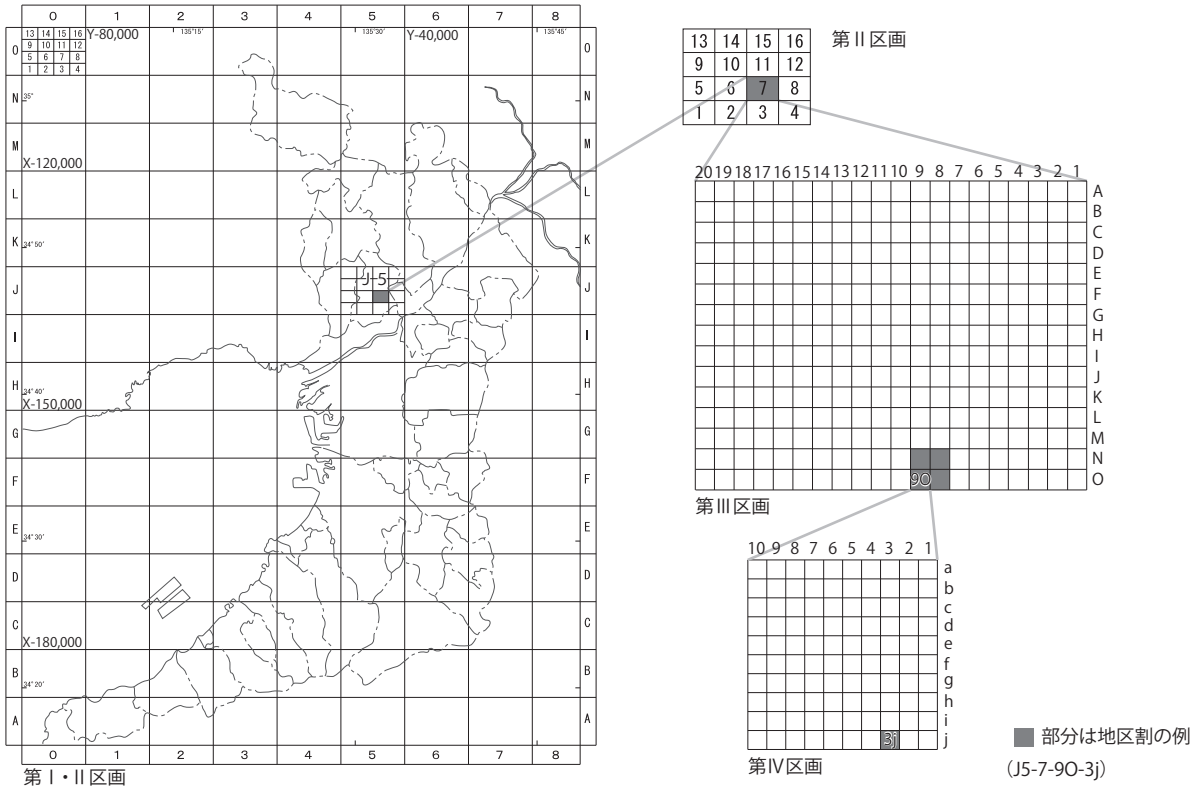


図4 地区割

第4章 調査成果

第1節 基本層序 (図5)

基本層序は、近世作土を第1層、中世作土を第2層、第2層より下位の無遺物層を第3層（基盤層）とした。今回の調査区は、吹田総合車両所の関連施設の基礎が残されていたほか、基礎周辺の攪乱を伴う大規模な整地が行われている。また、今回の発掘調査前に土壤汚染調査があり、汚染が確認された範囲は汚染土壌の除去が行われており、除去の掘削が深い場所もあった。上記の理由により地層の連続性を把握することが困難で、中世作土と近世作土に分かれることが認識できたのは南東部の調査中からで、それまでの調査では第1-1層・第1-2層として土層の掘り分けを行っている。厳密ではないが、第1-1層が第1層、第1-2層が第2層に対比できる。なお、発掘調査では第3面（基盤層上面）で主として遺構面の検出を行った。各土層の概要は以下のとおりである。

第1層：

2.5Y6/1黄灰色の粗砂を含むシルト。近世の作土。陶器細片（京・信楽焼系の碗か）が出土。16～18世紀以降の溜池や溝の埋没後に形成されており、時期の下限は近代まで下る可能性がある。

第2層：

10Y7/1灰白色の細砂～極細砂を含むシルト。中世の作土。場所によって2～3層以上に分かれる。土師器・須恵器・瓦器等、中世の遺物が出土した。基盤層上面で検出した遺構の埋没後に形成されており、中世後半以降の作土と考えられる。第2面では近世の耕作痕が部分的に認められた。

第3層（基盤層）：

5Y8/4淡黄色シルトないし細砂～粗砂。大阪層群上部を構成する土層と考えている。基盤層上面では蛇行する埋没した流路を検出した（図6）。

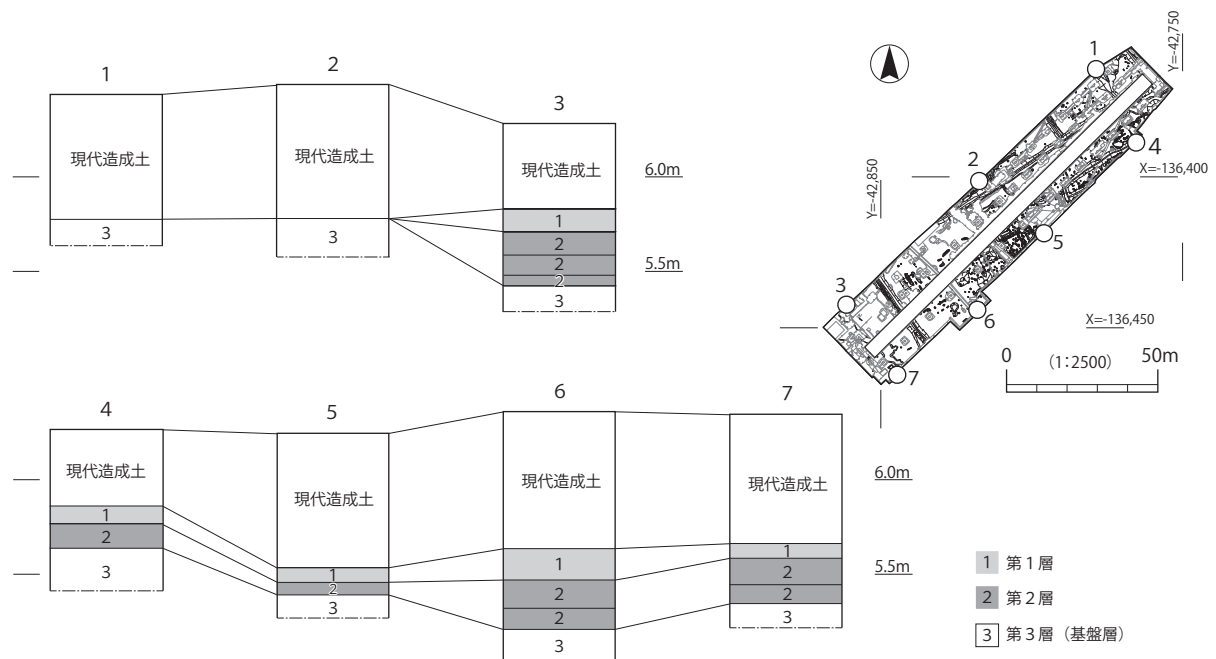


図5 柱状断面

第2節 遺構・遺物

1. 概要 (図6)

第3面では11世紀後葉から14世紀前葉の溝、井戸、掘立柱建物、土坑、柱穴、ピットを検出しており、屋敷地として土地利用されていたと考えられる。遺構は調査範囲の中央東寄りに集中し、北東隅と南西隅は少数である。以下の調査成果は、便宜上、北東側と南西側に分けて報告を行う。

2. 遺構と遺物

(1) 北東側の調査 (図7、巻頭図版2)

1・602溝 (図8・9、図版1)

1溝と602溝は切り合い関係があり、1溝が新しい。1溝は、幅2.65m、深さ0.7mである。埋土は粘土質シルト偽礫主体である。埋土の状況から短期間に埋め戻された可能性がある。溝底面に泥質堆積物や水成層は認められない。

遺物は土師器皿・鍋、須恵器甕、瓦器羽釜、灰釉碗、古瀬戸卸皿、白磁四耳壺、陶器（常滑焼か）、丸瓦・平瓦、陶棺片が出土した。土師器皿1はへそ皿の口縁部と考えられる。1溝の時期は上限は不明、下限は14世紀前葉頃を想定している。なお、1溝と7溝に切り合い関係が無いことを1溝南東側で確かめており、1溝と7溝は同時期に機能したものと考えられる。

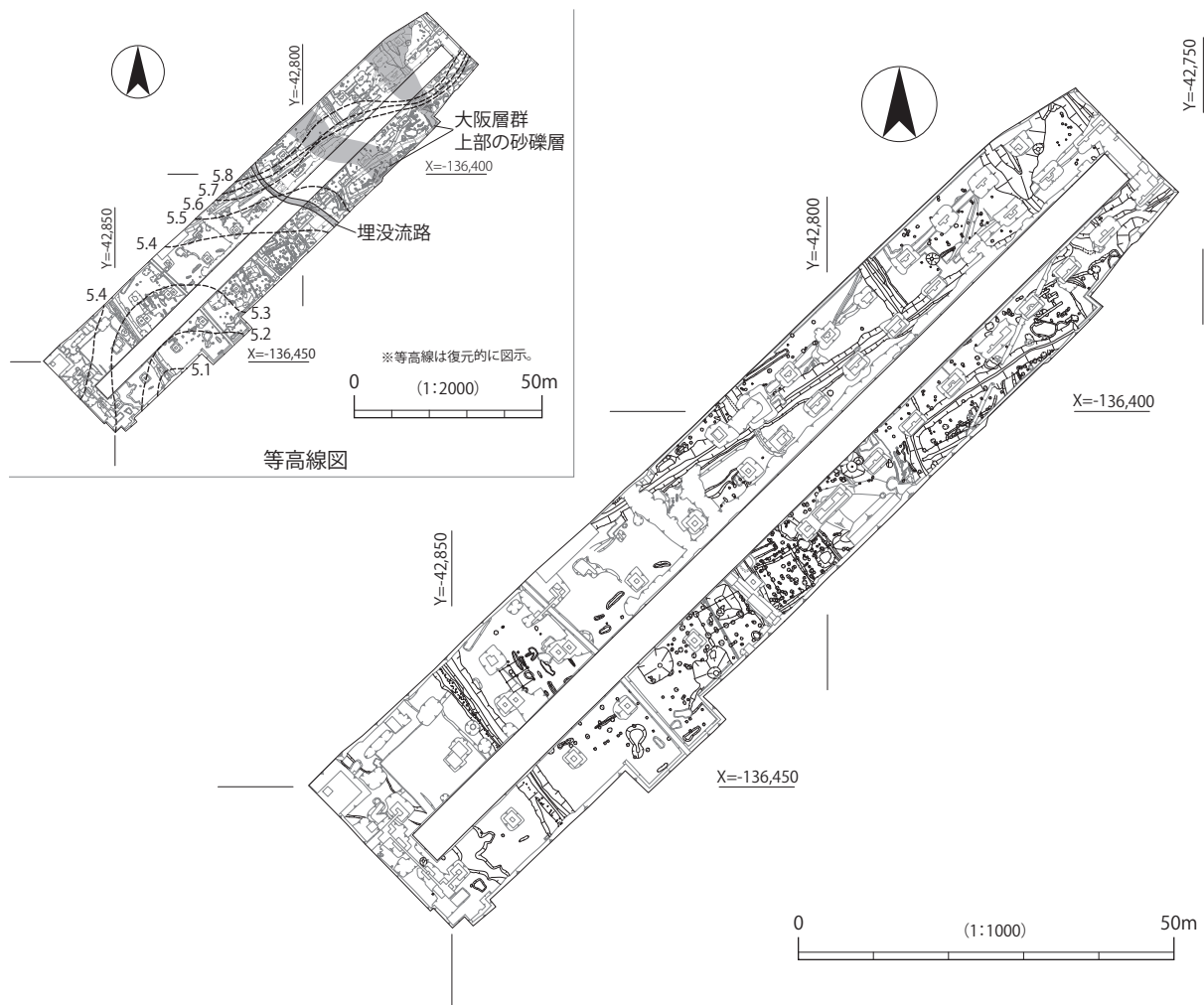


図6 第3面全体平面

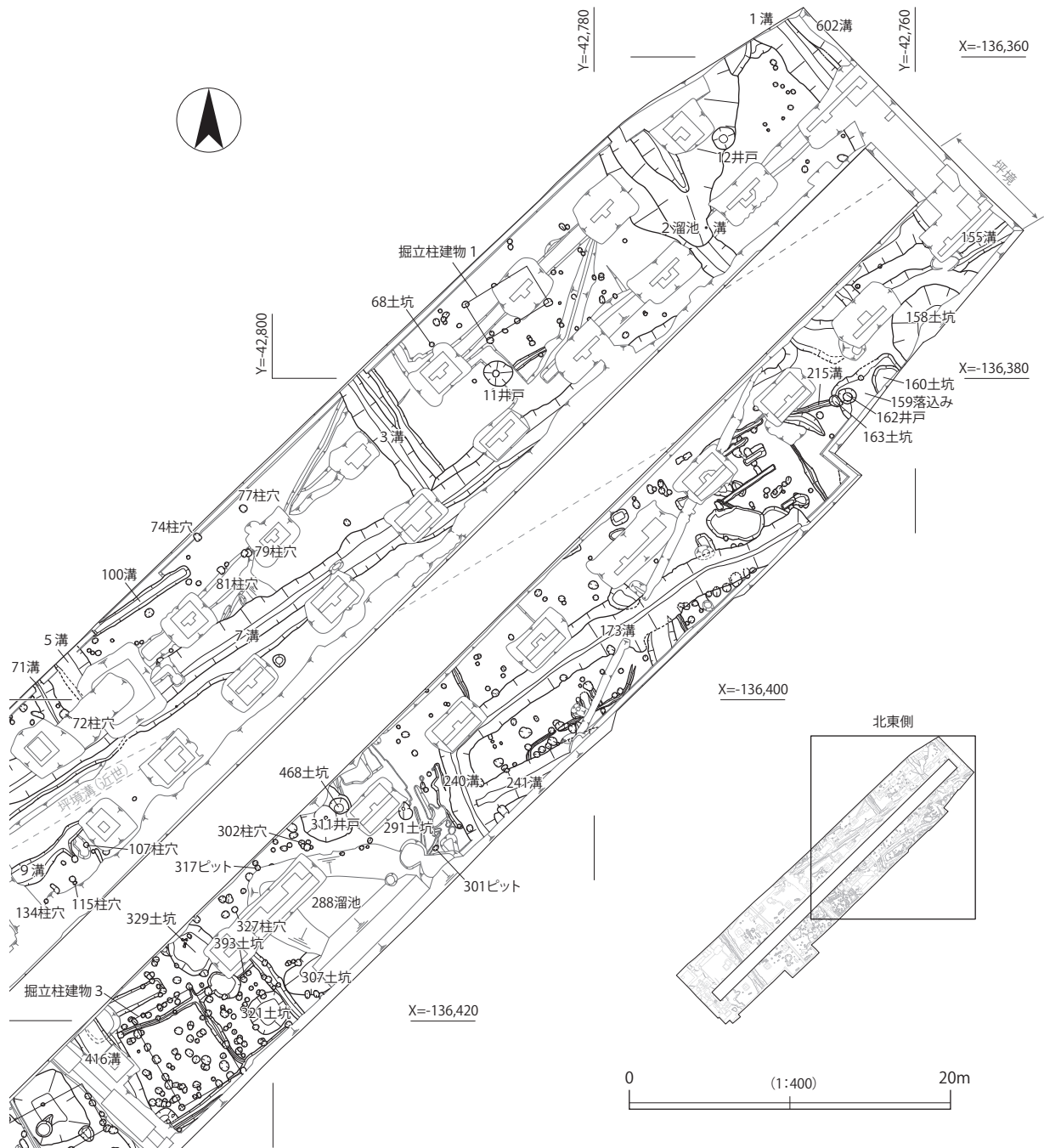


図7 第3面平面(1)

602溝は、北東側は調査区外にあり、北東側の溝肩部は検出できなかった。幅1.21m以上、深さ0.76m、埋土は上層が埋め戻し土、下層が水成層の細砂～中砂である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

2溜池・溝(図8・9)

2溜池は検出長9.8m、検出幅4.3～9.5m、深さ0.7～1.4m、埋土下層には湿性の粘土質シルトが認められる。

南東側で接続する溝は2溝として調査した。2溝は幅2.1m、深さ0.35m、2溜池と同様に埋土下層は湿性の粘土質シルトである。既設構造物を挟んだ北東部の調査区では2溝の延長部になる可能性が

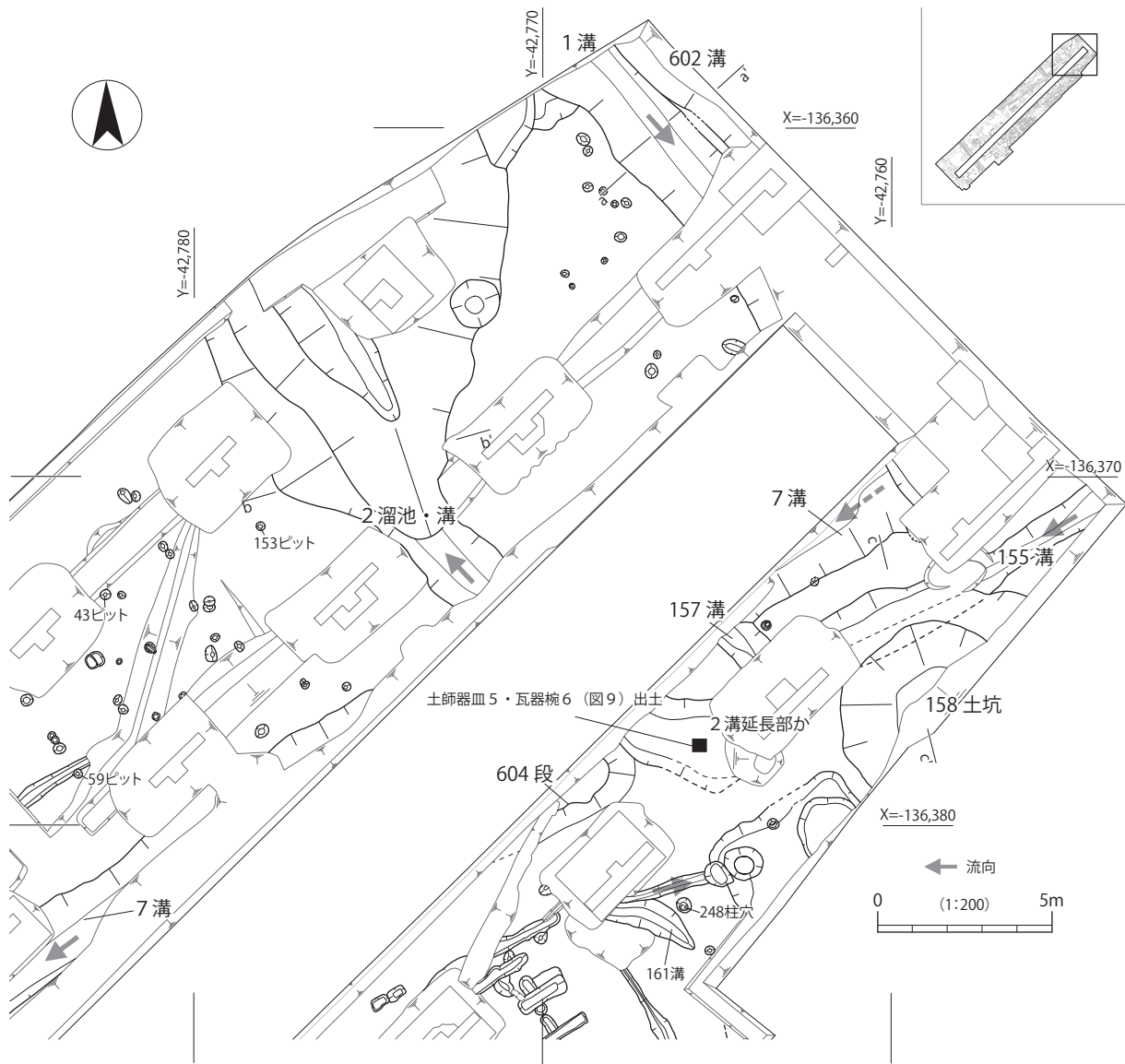


図8 1溝他平面

ある凹みを検出した。604段より南東側では掘方は不明確なものとなり、2溜池・溝と比較して出土遺物は古いものが出土している（土師器皿5、瓦器椀6）。なお、604段は近世以前の坪境に関係しており、耕作に伴う段か、坪境に掘削された溝肩部になる可能性が高いと考えている。

2溜池・溝の遺物は、土師器皿、須恵器鉢（東幡系）、瓦器椀・鍋・甕、備前焼摺鉢、唐津焼碗、肥前系磁器、伊賀・信楽焼系甕、丸瓦・平瓦、陶棺片が出土した。唐津焼碗7は高台の内側に墨書（「卅」か）があり、見込みに胎土目を残しており、16世紀後葉頃に位置付けられる。2溜池・溝には中世前半の遺物が混じるが、時期は溜池埋土の出土遺物により16世紀後葉から近世と考えられる。

155・157溝（図8・10）

155溝は幅0.95～1.84m、深さ0.2～0.4m、埋土下層には泥質堆積物が認められる。当初、周辺に堆積する第1層及び第2層と同時に掘り下げたため、158土坑周辺の溝肩部は断面で確認したのみで検出できなかった。南西側は攪乱があり、溝の連続性を確認することはできなかった。遺物は瓦器椀、馬歯が出土した。瓦器椀9は12世紀中葉から後葉のものと考えられる。155溝は2溝ないし157溝と連続していた可能性がある。

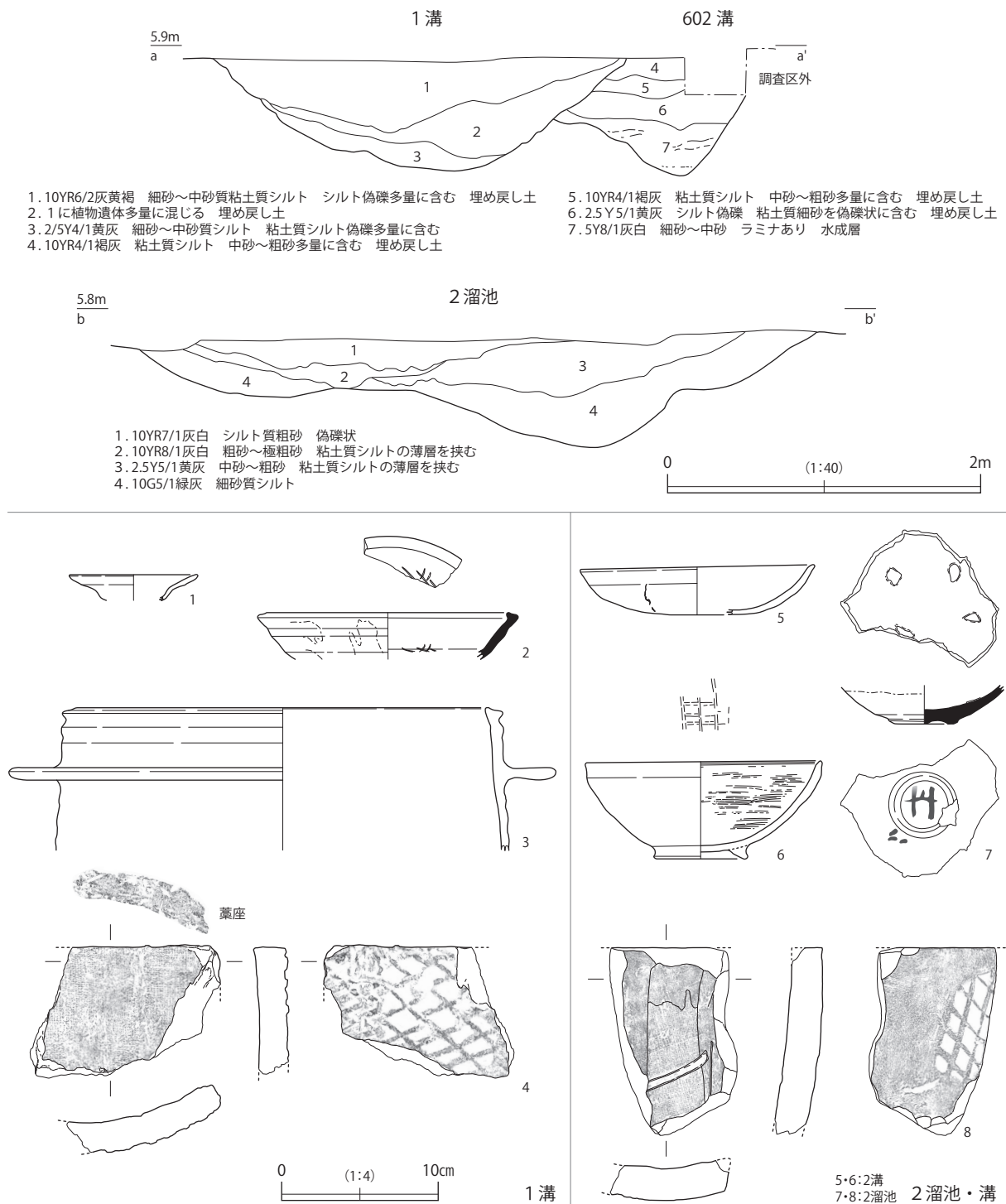


図9 1 溝他断面、出土遺物

157溝は幅1.1m、深さ0.3m、埋土は粘土質シルトである。7溝との切り合い関係は攪乱により不明である。遺物は土師器皿、須恵器甕、瓦器碗・羽釜が出土した。遺物の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられるが、検出範囲は部分的で詳細は不明である。

158土坑 (図8・10)

南東側が調査区外にあるため、全容は不明である。検出した範囲で、平面形は半円形、直径5.3m、深さ1.62m、埋土下位には水成層と泥質堆積物が認められる。図10の11層を除去した段階で底面が平坦になることを確認しており、後述する469・472井戸の検出状況や断面形状が類似することから井戸

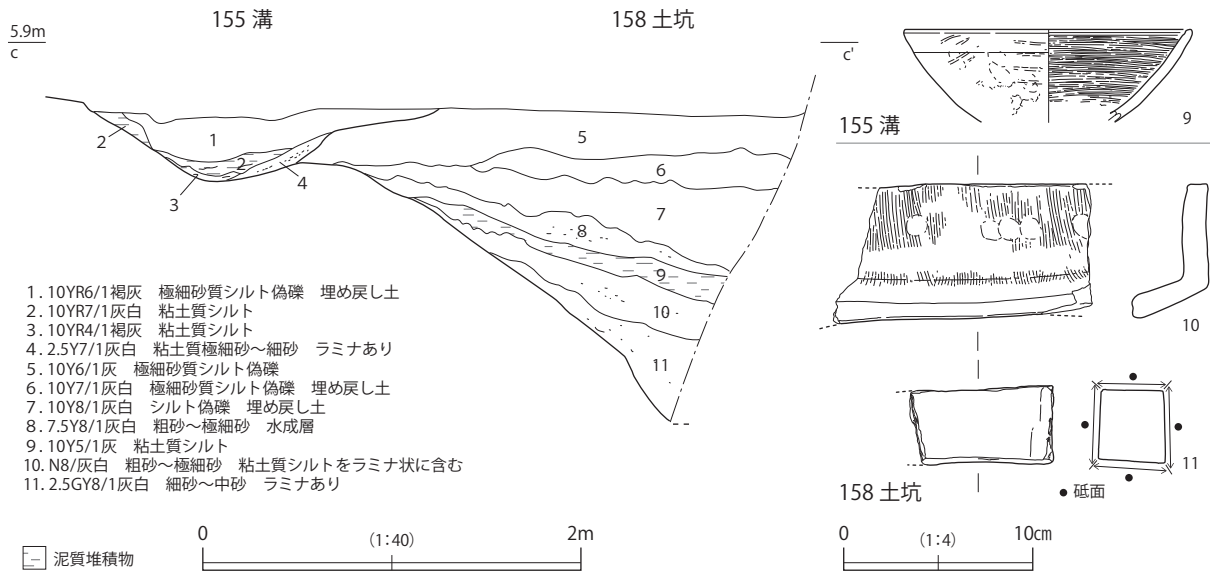


図10 155溝他断面、出土遺物

の可能性が高いと考えている。遺物は土師器皿・羽釜・鍋、須恵器、瓦器椀、常滑焼甕、白磁碗、平瓦、カマド片、砥石が出土した。158土坑の時期は13世紀後葉以前と考えている。

3・7溝（図11～14、図版1・6・7）

3溝は7溝と切り合い関係は無く、同じ時期に機能した溝である。幅2.15m、深さ0.5m、埋土には泥質堆積物が認められる。7溝は周辺で復元されている条里地割の坪境に合致し、坪境の溝と考えられる。溝は掘り直しが行われている状況を確認したが、平面的に明確ではなかったため、調査では図11の4層より上位を上層、下位を下層として掘り分けを行った。古段階の溝は幅2.23m、深さ0.9m、埋土には水成層と泥質堆積物が認められる。新段階の溝は幅1.8m、深さ0.48mである。埋土には泥質堆積物が認められた。下層の出土遺物は量的に少ないが、上層と明確な時期差は無い。なお、3溝では溝の掘り直しを行っている状況は確認されなかった。

3・7溝から出土した遺物には土師器皿・羽釜・鍋、白色土器皿、黒色土器椀（A類）・体部片（B類）、須恵器皿・鉢（東播系）、瓦器椀・皿、常滑焼壺・甕、青磁皿・碗、白磁碗、丸瓦・平瓦、木製品下駄、滑石製石鍋、弥生土器壺、種子（モクセイ科か）がある。常滑焼壺62は三筋壺で、肩部に「泉」の墨書がある。遺物は11世紀後葉から14世紀前葉のものが出土しており、中でも12世紀末葉から13世紀前葉のものが多い。なお、7溝南西側では部分的に近世の溝を確認しており、7溝と同様に坪境の溝を想定している。

9溝（図11）

幅1.3m、深さ0.27m、埋土下層は基盤層に由来する極細砂～細砂である。遺物は土師器皿、須恵器鉢、丸瓦・平瓦が出土した。9溝の時期は13世紀中葉から後葉と考えている。

100溝（図11）

幅0.72m、深さ0.27m。埋土は極細砂質シルト偽礫主体で短期間に埋め戻された可能性がある。遺物は土師器、須恵器甕、瓦器椀・皿が出土した。100溝の時期は13世紀中葉から後葉と考えている。

5・71溝（図7・15）

5溝は、幅2.0m、深さ0.41m、埋土は泥質堆積物である。7溝との切り合い関係は攪乱のため不明

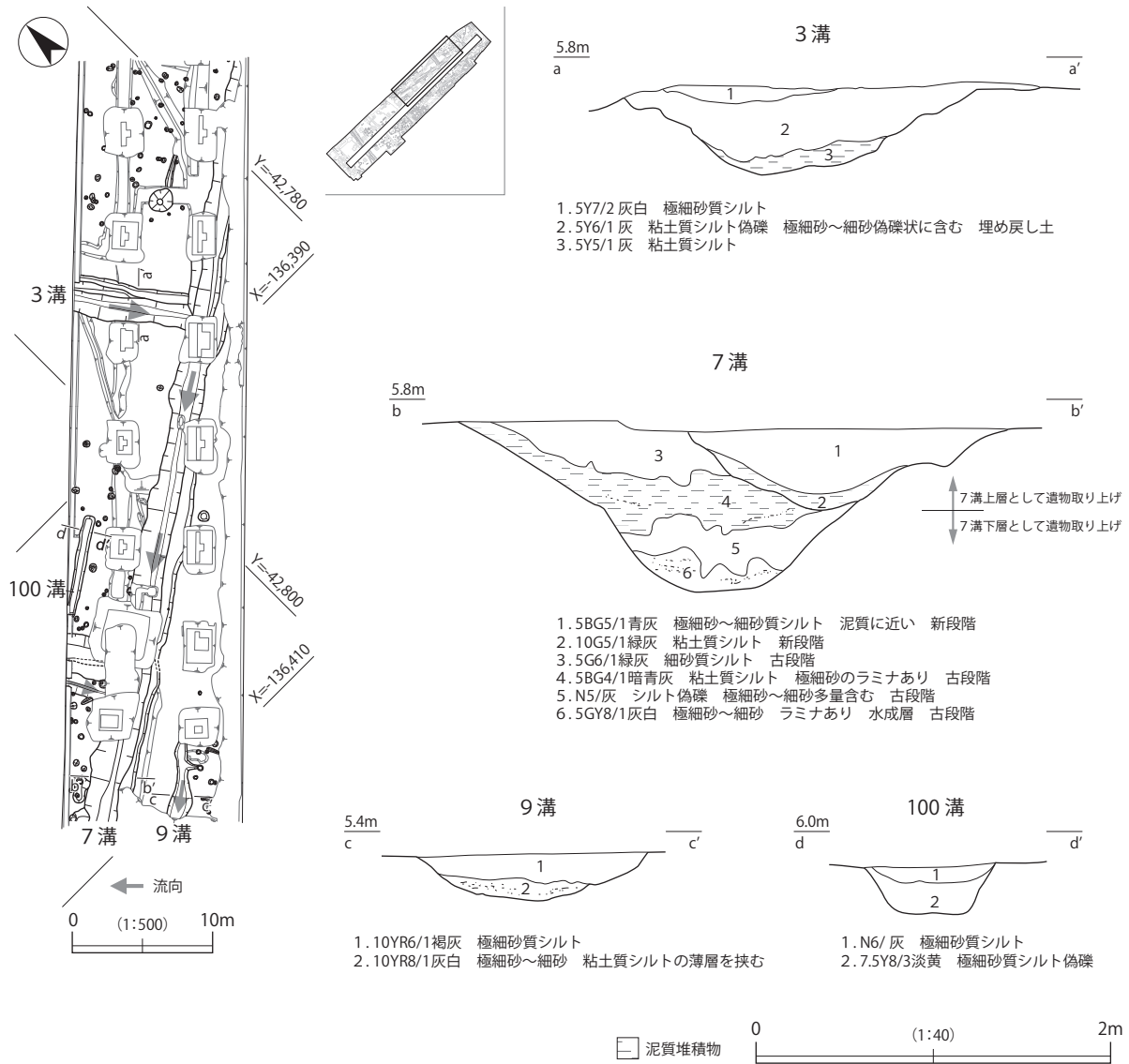


図 11 3 溝他平・断面

である。遺物は土師器皿・鍋、白色土器皿、瓦器椀・皿、平瓦が出土した。5 溝の時期は12世紀末葉から13世紀中葉と考えている。

71 溝は、幅1.2m、深さ0.36m、埋土下層には泥質堆積物が認められる。7 溝との切り合い関係は攪乱により不明である。直上まで削平を受けており、5 溝との層位的な検討もできなかった。

遺物は土師器皿・羽釜・鍋、瓦器椀・羽釜・甕、常滑焼甕、軒平瓦が出土した。土師器皿にはへそ皿が含まれる。軒平瓦108は、瓦当文様が連珠文、外区隅（右上）に目痕の可能性がある粘土塊を貼り付ける。近世の288溜池から出土した連珠文の軒平瓦325にも同様の位置に粘土塊を貼り付けている状況を確認している（図版8参照）。同范関係は確認できなかったが、珠文の直径も近似しており、同一の工人により製作されたものと想定される。71 溝の時期の上限は13世紀中葉以降、下限は14世紀前葉と考えている。

173・240・241 溝（巻頭図版2、図16・17、図版1・7・8）

173・240・241 溝は切り合い関係が無く、同時に機能した溝である。173 溝は掘り直しが行われており、新段階は図16の1～4層、古段階は図16の5層がそれぞれ対応する。新段階の断面形は上方に

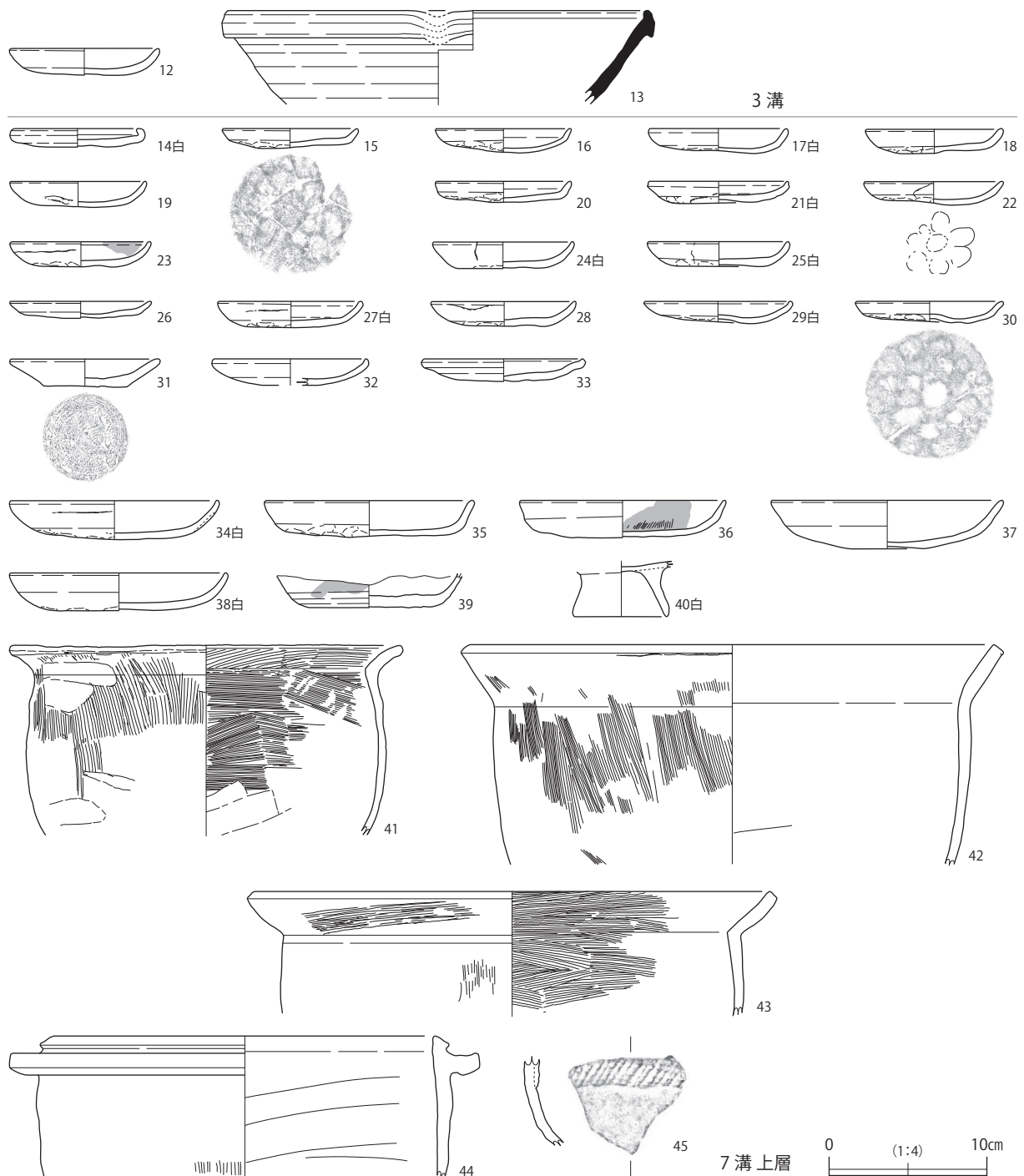


図 12 3 溝他出土遺物

広がるU字形を呈し、幅1.7~2.3m、深さ0.58~0.7m、埋土下層に泥質堆積物が認められる。古段階の断面形はV字形を呈するが、幅は新段階の掘り直しにより不明である。深さ0.77~0.97m、埋土は基盤層に由来する極細砂~細砂主体である。古段階の埋土から遺物は出土しなかった。

240溝は、173溝の南西端から南東方向にL字形に屈曲する溝である。幅0.69~1.75m、深さ0.75mである。

241溝は北東-南西方向に走る溝で、南西端で240溝に取り付く。幅1.8~2.0m、深さ0.62mである。173溝と平行し、両溝の芯々距離は4.5mである。240・241溝の埋土には泥質堆積物が認められ、173溝新段階の埋土に対比しているが、173溝のように溝の掘り直しの痕跡は認められなかった。

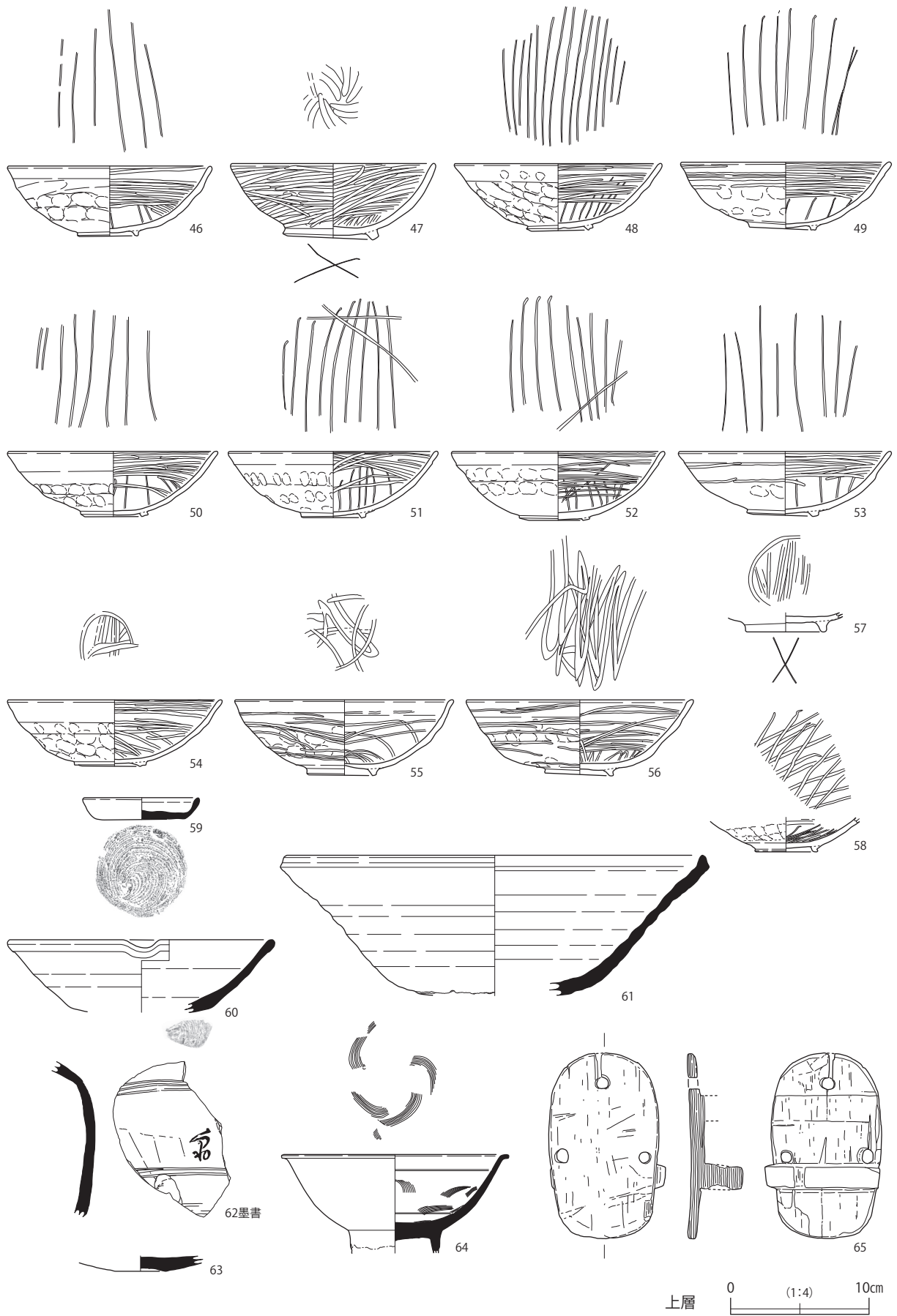


图 13 7 溝出土遺物 (1)

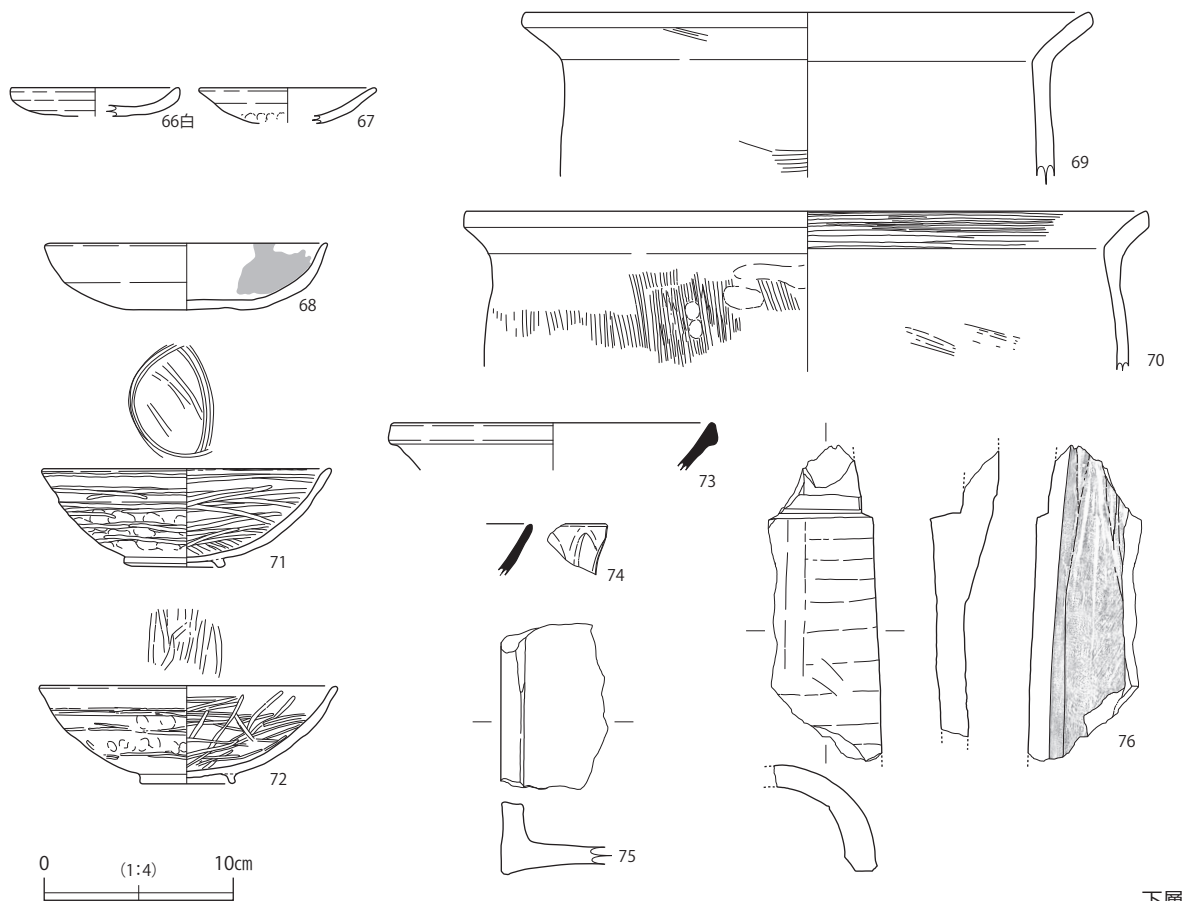


図14 7溝出土遺物(2)

173・240・241溝の遺物は、土師器皿・鍋、須恵器、瓦器椀・皿、灰釉碗、常滑焼甕、白磁碗、青磁碗、丸瓦・平瓦、埴、木製品、石鍋、鉾滓、埴塙、歯牙(切断痕のある猪牙)、種子(梅か)が出土した。土師器皿109はへそ皿、底部の持ち上がりは低い。木製品は部戸117が出土した。戸板や棧材と組み合わせ部戸として使用したと考えられる。鍛冶関連遺物は鉾滓112、埴塙116が出土した。11世紀後葉から14世紀前葉頃の遺物が出土しているが、他の遺構との切り合い関係から12世紀末葉から14世紀前葉頃にかけて機能したと考えられる。

195土坑(図16)

平面形は不整形、長軸1.95m、短軸1.6m以上、深さ0.4mである。埋土はシルト偽礫主体で、短期間に埋め戻されたことが想定される。土坑として調査を行っているが、全容が不明で、遺構の属性が溝になる可能性がある。遺物は土師器皿、白色土器皿、須恵器鉢(東幡系)・甕、瓦器椀・鍋、白磁碗が出土した。195土坑の時期は13世紀後葉頃と考えられる。

11井戸(図7・18、図版2)

検出時の平面形は不整形、検出面から0.5m掘り下げた段階で、円形に近い形状を呈する。底面に上下二段に重ねた曲物を据える。長軸1.65m、短軸1.5m、深さ1.57m。埋土は曲物より上位は埋め戻し土、曲物内は機能時の堆積物と考えられる粘土質シルト、曲物より下位は基盤層に由来する砂層である。曲物は上段と下段ともに二重にしたものを用いる。上段の曲物は直径41~43cm、高さ20cm、厚さ0.3~0.6cm、外側の曲物は高さ8.0cmで内側のものより低い。下段の曲物は直径42.5~44.8cm、高さ20.0cm、厚さ0.3~0.5cmである。

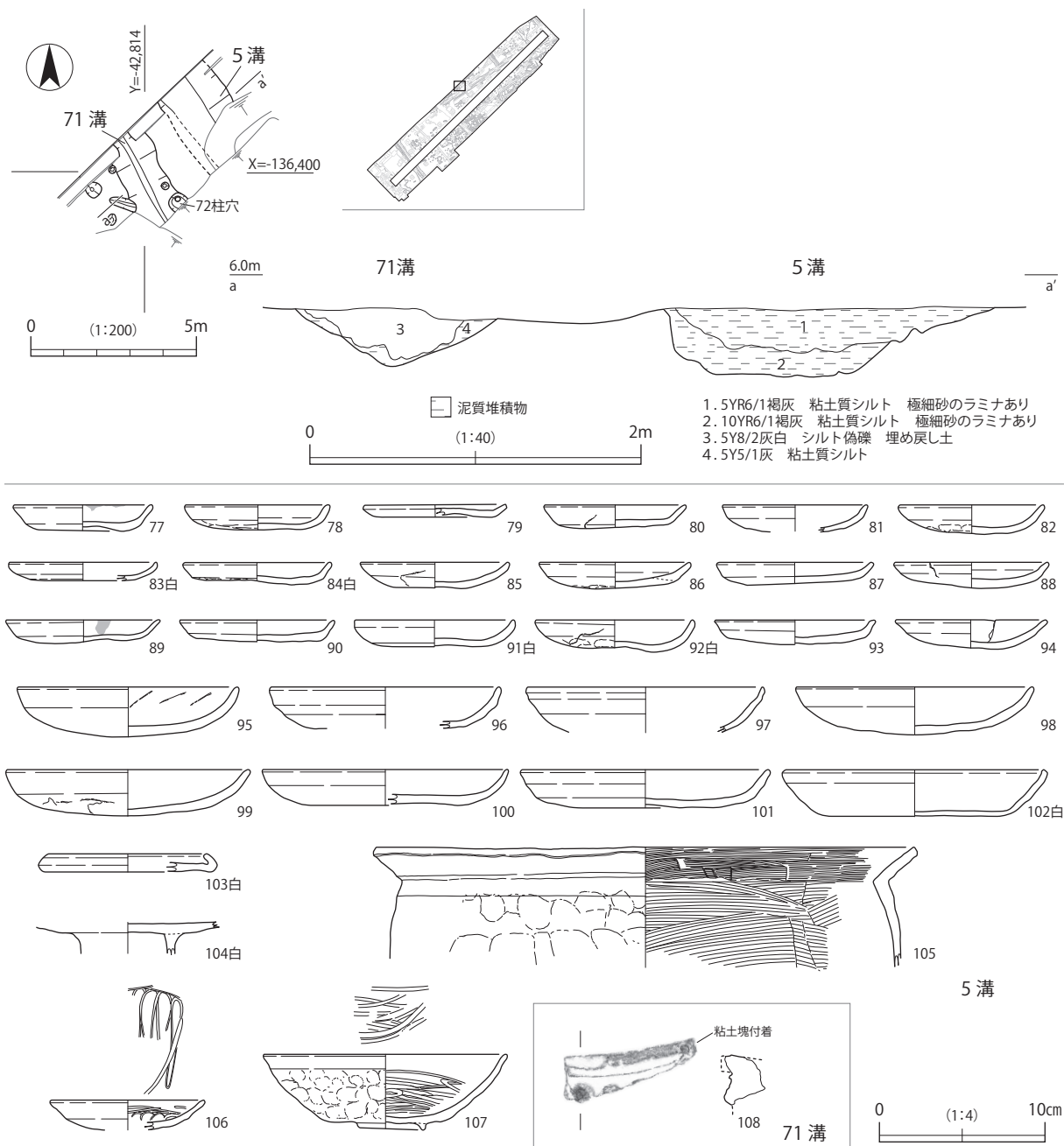


図15 5溝他平・断面、出土遺物

遺物は、土師器皿・羽釜、瓦器椀が出土した。瓦器椀118は上位の埋土掘削時に出土したものである。11井戸の時期は13世紀前葉から中葉頃と考えられる。

12井戸 (図7・18)

2溜池の埋土を除去して検出した。平面形は不整形、長軸1.44m、短軸1.27m、深さ1.73m、埋土には泥質堆積物が認められる。埋土中層の図18の2層の偽礫は第2層に由来する可能性がある。遺物は、丸瓦、陶器鉢(須恵質、常滑焼か)が出土した。遺物が少なく時期を明確にしがたいが、埋土の所見から中世後半に下る可能性がある。

162井戸、163土坑、215溝 (図19・20、図版2・6・7)

162井戸は、平面形は不整形、長軸1.12m、短軸0.97m、深さ1.52mである。井戸の下位に曲物を据える。埋土は、曲物より最上層が湿性の粘土質シルト、曲物の下から上位までが埋め戻し土、下層が

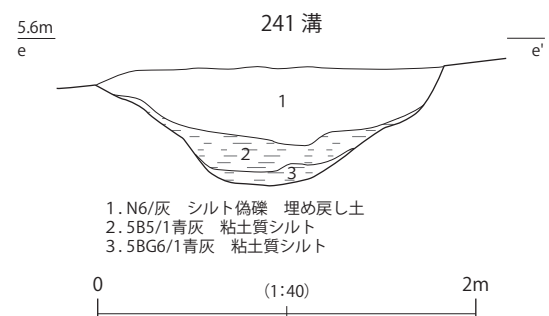
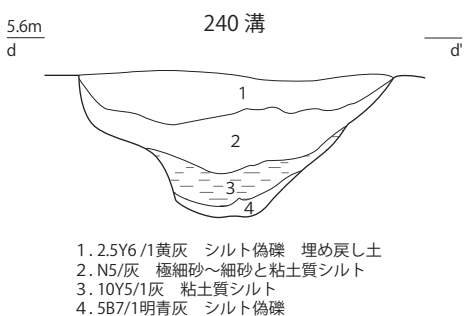
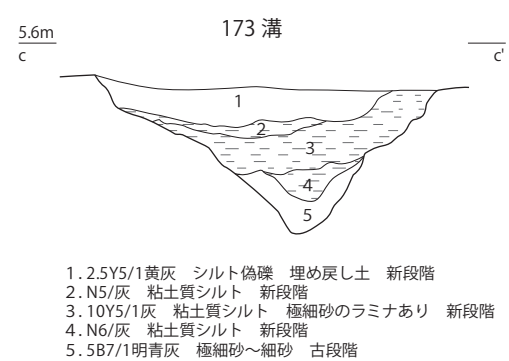
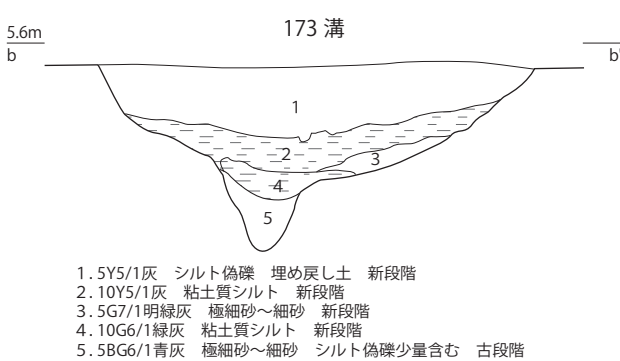
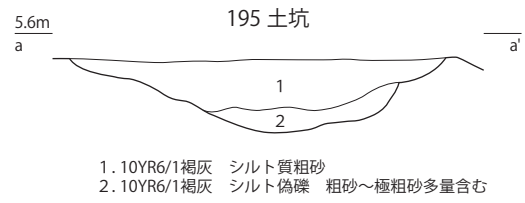
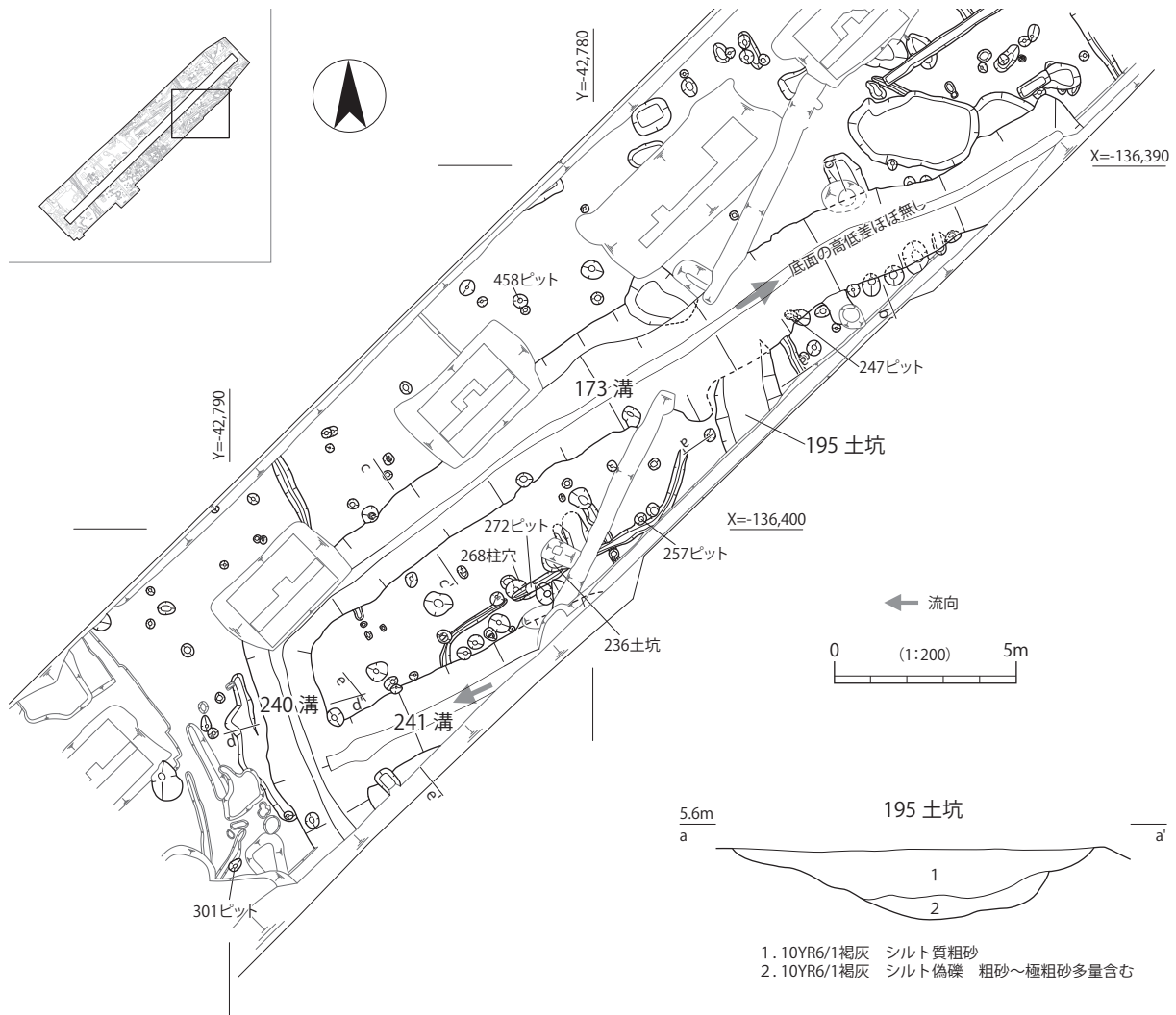


図 16 173 溝他平・断面

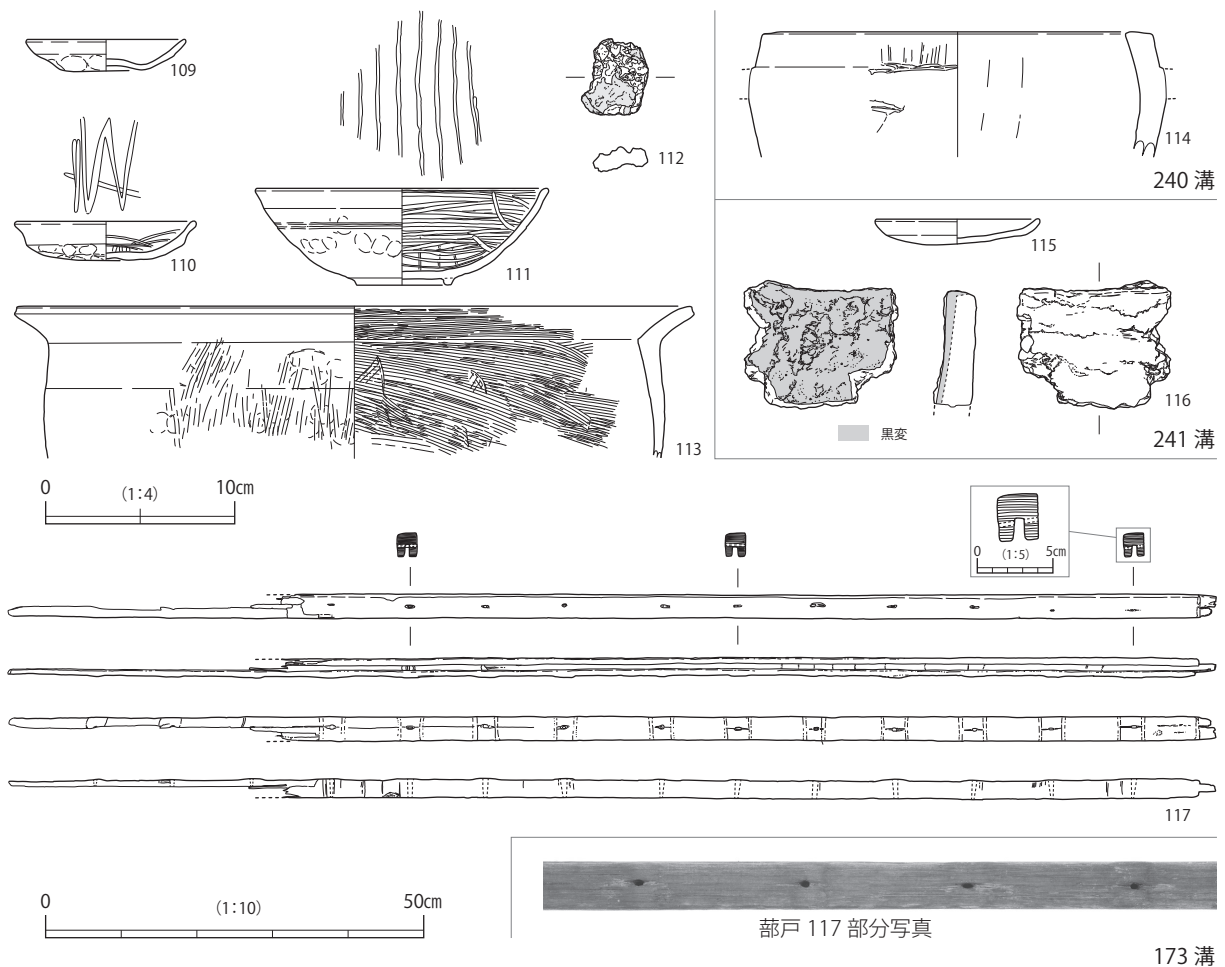


図 17 173 溝他出土遺物

機能時堆積物と考えられるシルト質粗砂～極粗砂である。163土坑と切り合い関係があり、162井戸の方が新しい。

遺物は土師器皿・鉢・鍋、白色土器皿・台付皿、須恵器甕、瓦器椀、平瓦、球状木製品（毬）が出土した。土師器には163土坑出土のものと接合するものが複数あり、163土坑の遺物が混入したものと考えられる。球状木製品（毬）は計4点出土した。木材の節部分を選んで加工する。129が全体を細かく削っているのに対し、他のものは木皮が残っているものがあり、未製品のものが含まれる可能性を有する。また、土師器皿には瓦器椀高台内でみられるような×印を底面に施すものが含まれた。162井戸の時期は12世紀中葉から後葉頃と考えられる。

163土坑は、平面形は不整形、長軸0.8m、短軸0.64m、深さ0.42mである。埋土には湿性の泥質堆積物が認められ、水を溜める機能があったものと想定される。

遺物は土師器皿・台付皿・鉢・鍋、白色土器皿・台付皿、瓦器椀、焼土塊が出土した。出土遺物の内、土師器皿と白色土器皿で全体の90.5%を占め、土師器皿72.5%、白色土器皿18%である。瓦器椀は細片2点のみで、土師器皿と白色土器皿の割合が突出して高い。台付皿は破片を含めて10点出土しており、他の遺構と比較して数量が多く、遺存状態も良好である。土師器皿の調整は二段ナデのものが162井戸より多い。163土坑の時期は11世紀後葉から12世紀前葉頃と考えられる。

215溝は北東側で163土坑に接続して、同時期に機能した溝である。幅0.34m、深さ0.11m、埋土はシルトである。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀が出土した。

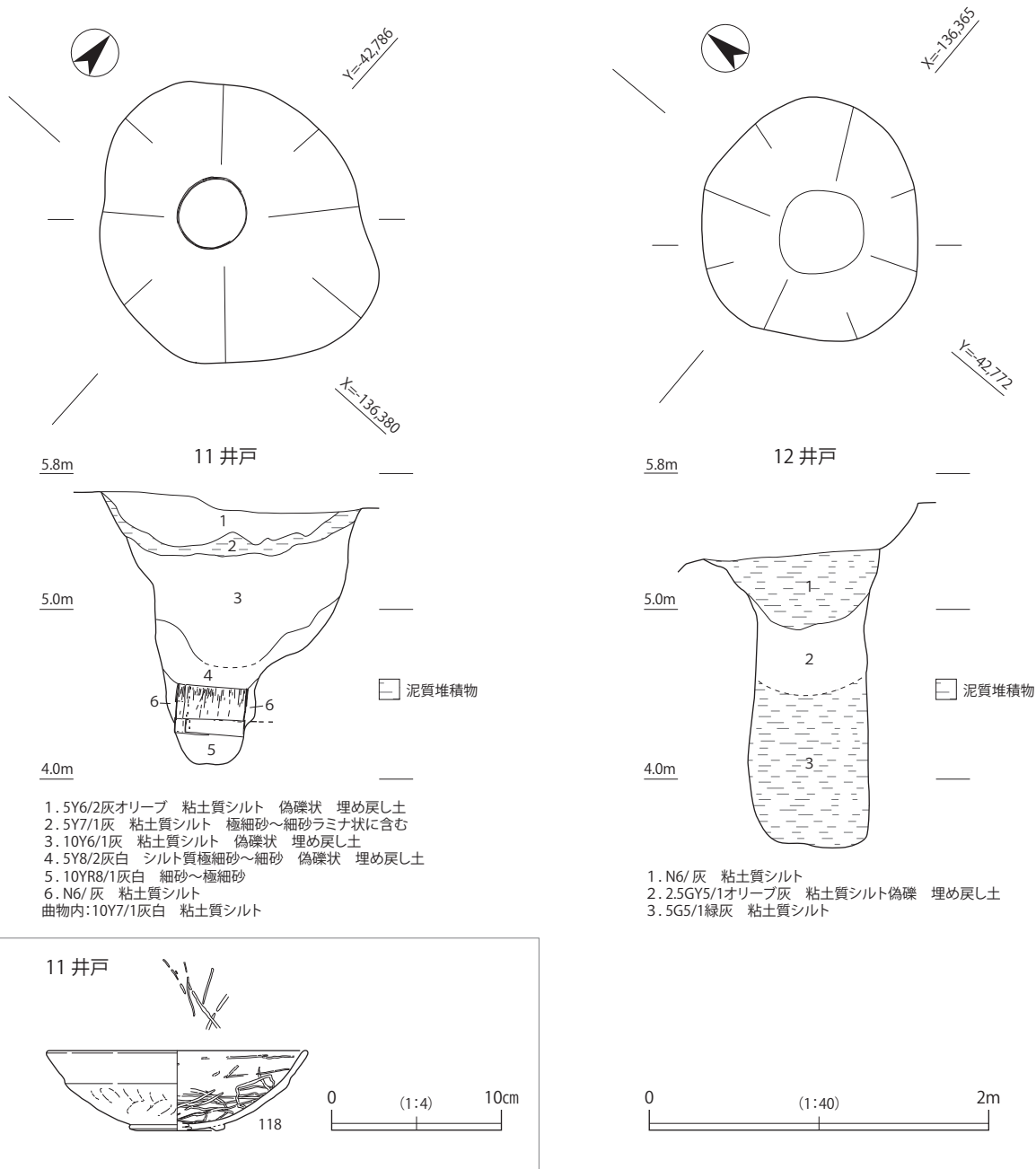


図 18 11 井戸他平・断面、出土遺物

159落込み (図19・21)

南東側は調査区外にあるため全容は不明である。平面形は不整形、長軸4.4m、短軸2.1m、深さ0.26m、埋土は止水性の泥質堆積物である。水溜めのような施設を想定しているが、落込みに接続する溝は調査区内で確認されなかった。

163土坑では埋土の泥質堆積物が掘方肩部にすり付く状況が確認されており、163土坑をオーバーフローした水を溜めることを目的とした土坑であった可能性がある。

遺物は土師器皿・鍋、須恵器鉢・甕、瓦器椀、青磁碗、砥石が出土した。土師器皿146～150は、162井戸から出土したものと形状が大きく異ならない。159落込みの時期下限は12世紀後葉、上限は163土坑と同時期の12世紀前葉頃と考えられる。

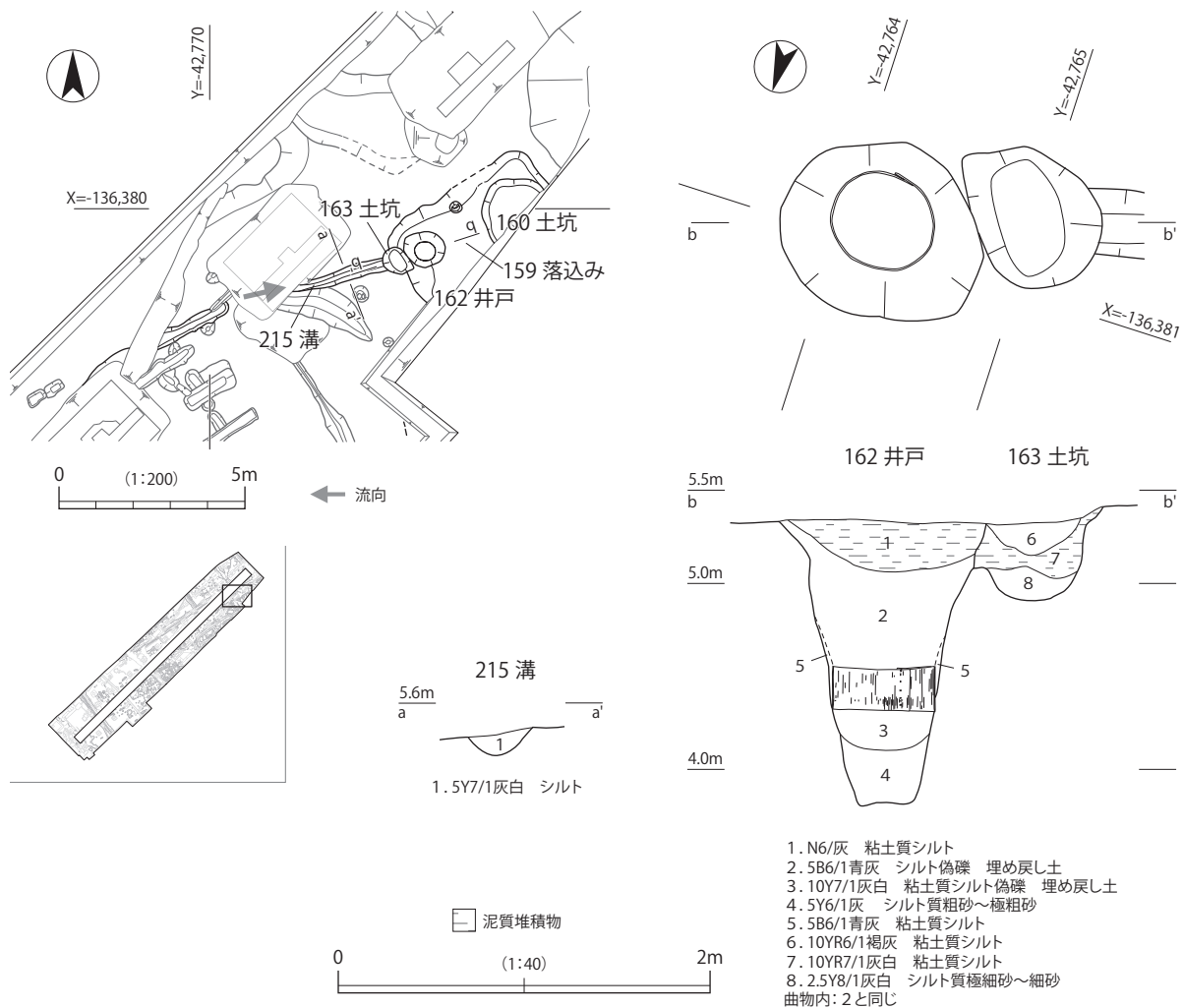


図19 162井戸他平・断面

160土坑 (図19・21)

南東側は調査区外にあり全容は不明。平面形は不整形、長軸2.0m、短軸1.1m以上、深さ0.17mである。遺物は土師器皿、白色土器皿、瓦器椀、常滑焼甕、焼土塊が出土した。土師器皿151は内面に成形時のものと考えられる筋状の痕跡がある。160土坑の時期は13世紀前葉から中葉頃と考えられる。

291土坑 (図7・21)

291土坑は、平面形は不整形、長軸1.05m、短軸0.6m、深さ0.3m、埋土はシルトである。遺物は土師器皿・鍋、白色土器皿、須恵器甕、瓦器椀が出土した。土師器皿154は外反する口縁部をもち、丸底に近い形状になる可能性がある。外反する口縁部の皿は162井戸で1点、469井戸で2点（内1点は小皿）が出土している。瓦器椀157は外面ミガキの分割性が失われたものである。291土坑の時期は12世紀後葉頃と考えられる。

311井戸、468土坑 (図7・22)

311井戸は、平面形は不整形、長軸3.2m以上、短軸3.14m、深さ3.14mである。埋土は上層が埋め戻し土、中層から下層が湿性の泥質堆積物である。井戸枠は確認されておらず、素掘りの井戸として機能したと考えられる。北東側では検出面から0.7mで平坦な面を検出しており、これより下位の掘方の平面形は円形である。

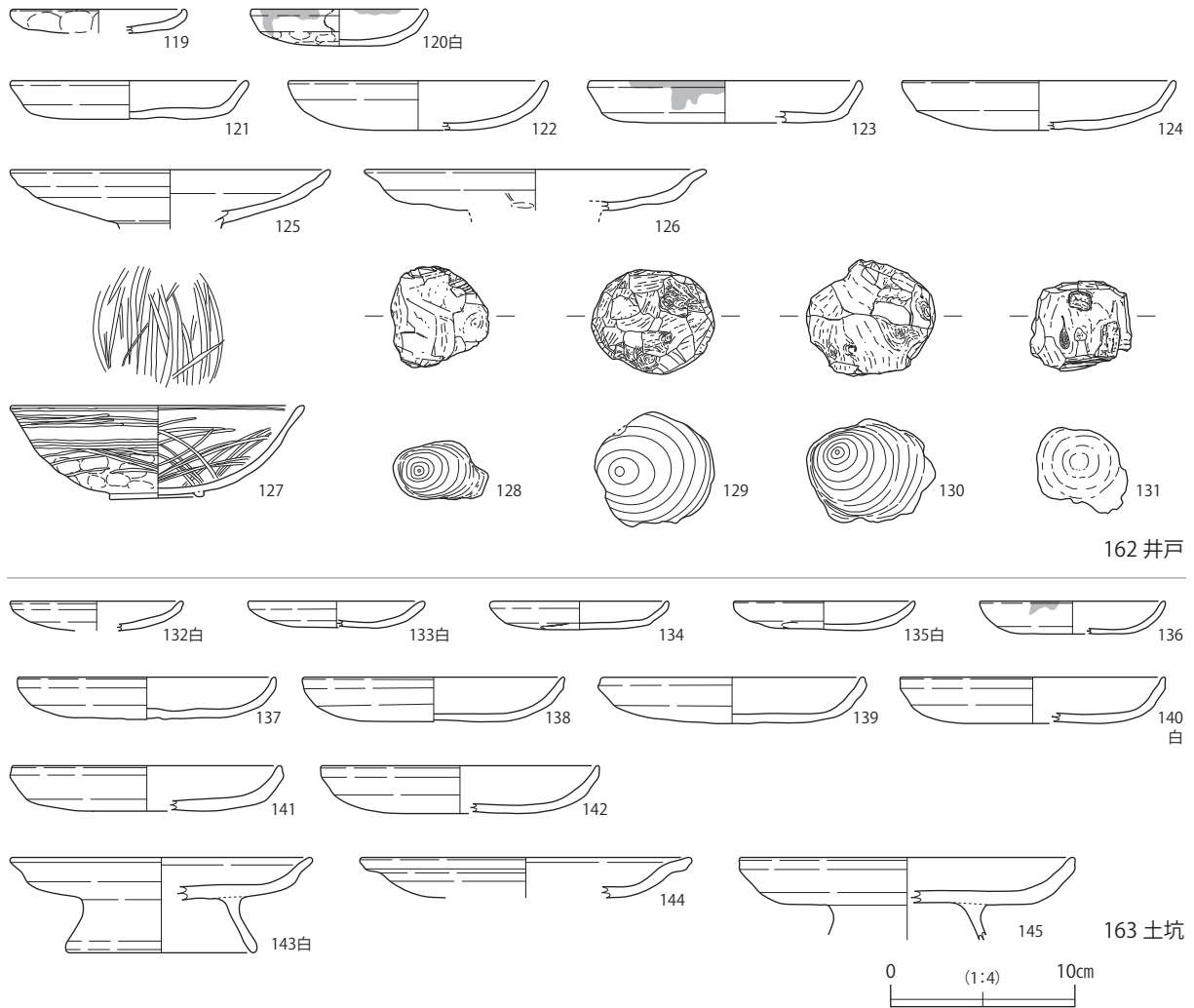


図 20 162 井戸他出土遺物

遺物は土師器皿・羽釜・鍋、須恵器鉢（東播系）、瓦器椀、白磁碗、種子（センダン）が出土しており、白色土器の可能性ある破片が混じる。瓦器椀160は、外面ミガキに分割性があり、内面のミガキは密に施される。311井戸の時期は12世紀前葉から中葉頃と考えられる。

468土坑は、311井戸北東側の平坦面で検出した。平面形は不整形、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.24mである。311井戸と明確な切り合い関係は確認されておらず、311井戸と同時に機能した可能性がある。遺物は須恵器甕が出土した。

掘立柱建物 1（図 7・23、図版 5）

建物構造は1間×2間、建物規模は梁行2.7m×桁行4.42mである。柱穴の平面形は不整な円形ないし不整形、隅丸方形に近いものがある。柱穴の規模は長軸0.35～0.44m、深さ0.1～0.3mである。

掘立柱建物 1 の遺物は土師器皿・鍋、瓦器椀が出土した。いずれも細片であるが、47柱穴から出土した瓦器椀は14世紀前葉頃に位置付けられる。掘立柱建物 1 の時期は下限が14世紀前葉頃、上限は出土遺物により13世紀中葉を遡ることはないと考えている。

324・325・388・411・426・603溝、322土坑（図24）

324・325・388・411・426・603溝、322土坑（以下、324他溝）は、切り合い関係が無く、同時に機能した溝・土坑である。溝は北西－南東方向と北東－南西方向の溝が交差しており、一辺4.5～7.0

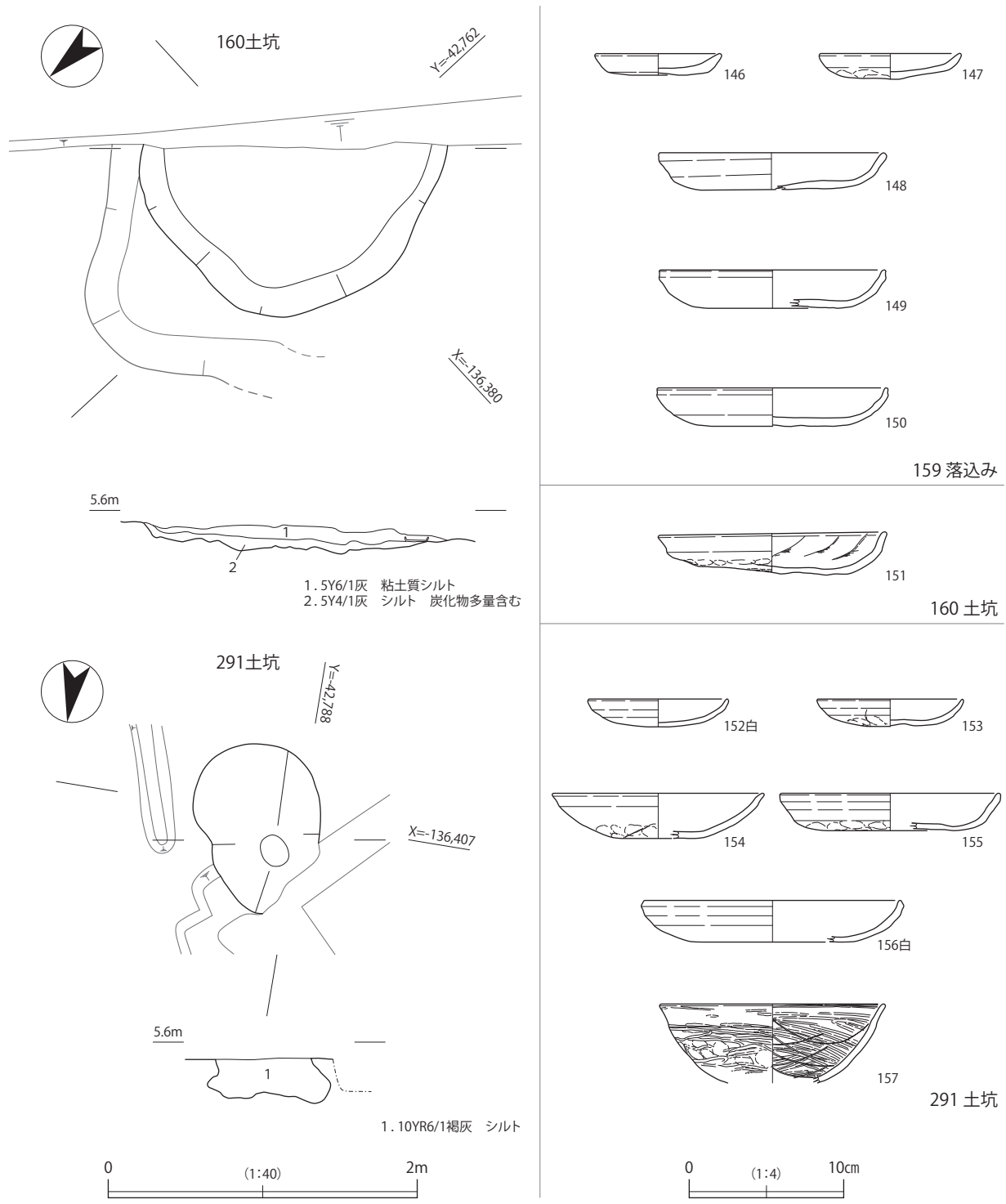
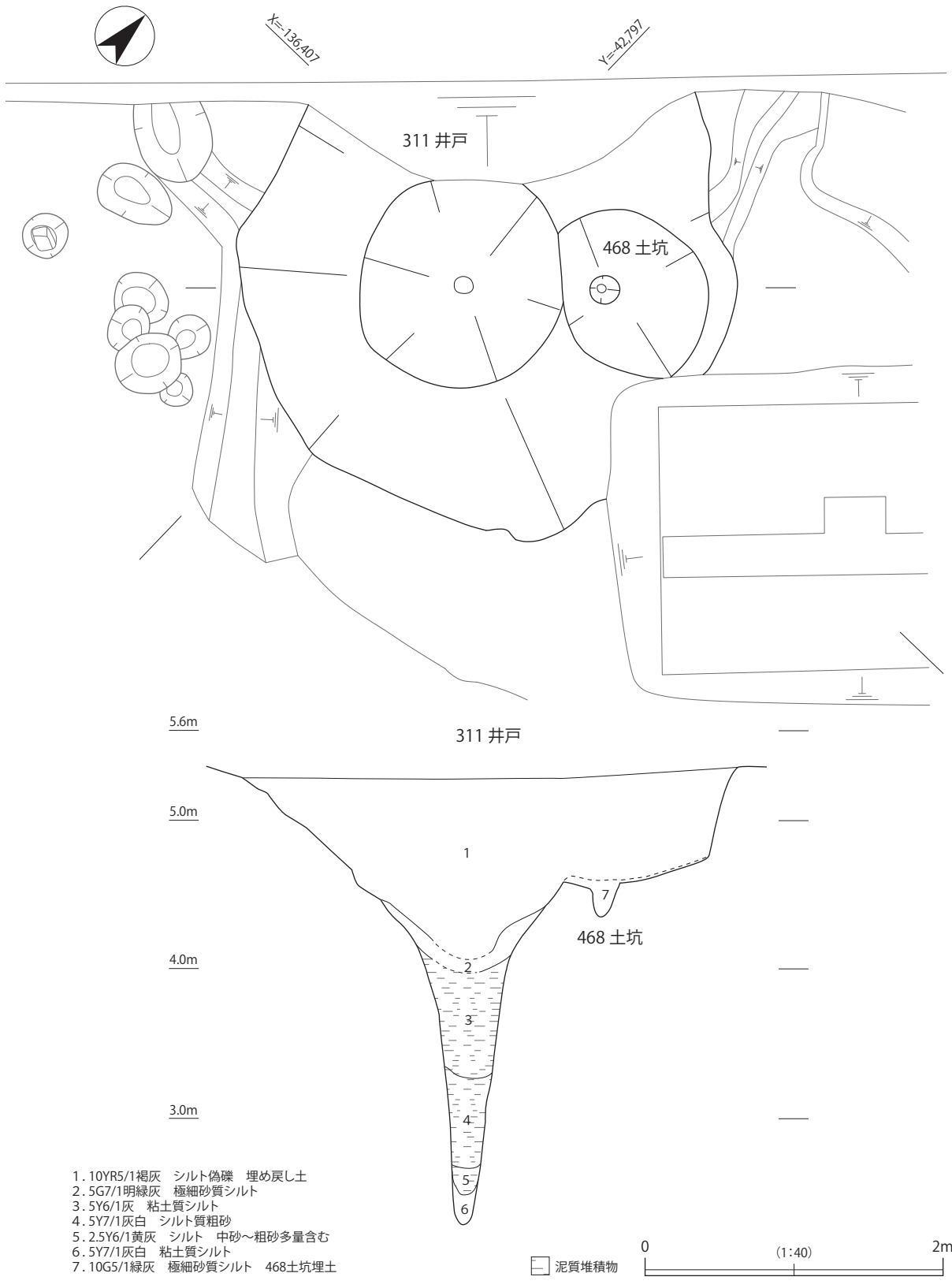


図 21 160 土坑他平・断面、出土遺物

mの方形状を呈する。幅0.5~2.0m、深さ0.07~0.15m、埋土はシルト主体である。324溝の中央は土坑状に深くなっており、深さ0.23mである。

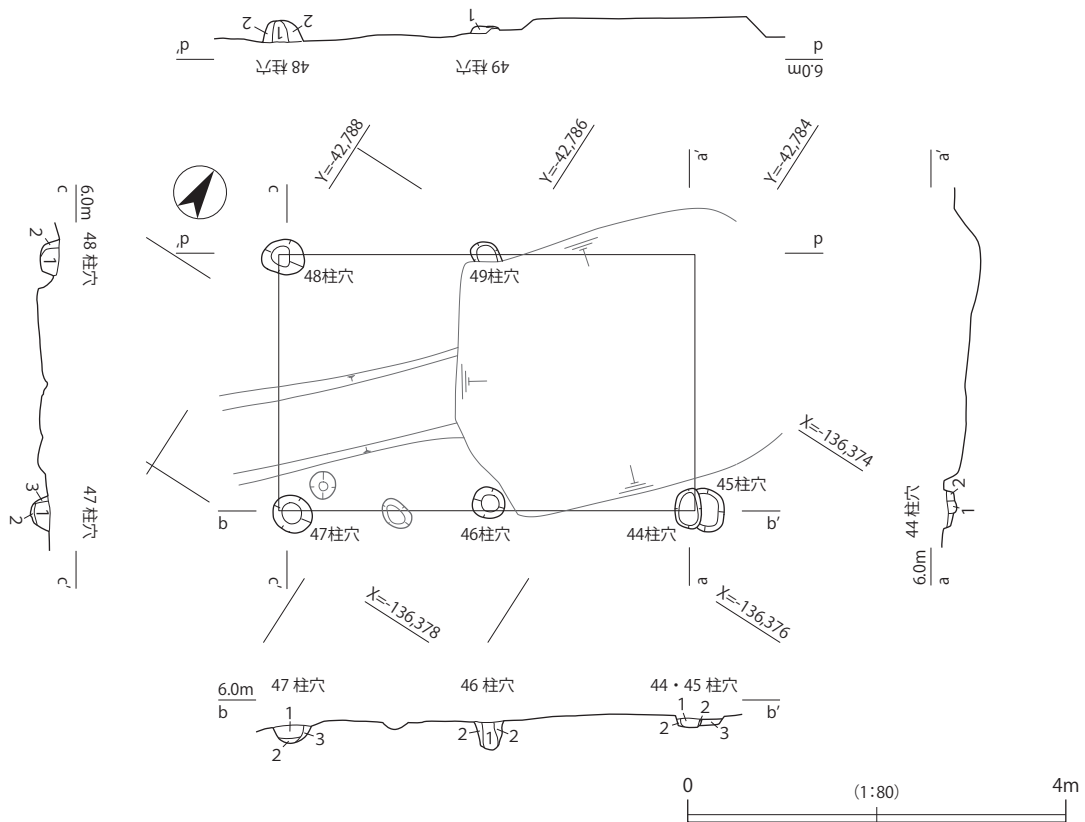
322土坑は426溝の中央付近で検出しており、426溝と切り合い関係は無い。平面形は不整形、長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.15m、埋土は上層が埋め戻し土の可能性のあるシルト、下層が粗砂質シルトで湿性の泥質堆積物に近い。一時的に水を溜めるような施設であった可能性がある。

遺物は324溝から土師器皿・羽釜、須恵器鉢（東幡系）、瓦器椀、325溝から土師器皿、瓦器椀・羽



311井戸

図 22 311井戸他平・断面、出土遺物



- | | | |
|---|---|--|
| <p>44-45柱穴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. N6/灰 シルト 抜き取り 2. 5Y8/3淡黄 シルト偽礫 掘方埋土 3. 5Y7/1灰白 シルト偽礫 掘方埋土 | <p>46柱穴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. N6/灰 シルト 抜き取り 2. 5Y8/3淡黄 シルト偽礫 掘方埋土 | <p>47柱穴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. N6/灰 極細砂質シルト 抜き取り 2. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取り 3. 5Y8/3淡黄 シルト 掘方埋土 |
| <p>48柱穴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. N6/灰 シルト 抜き取り 2. 5Y8/3淡黄 シルト偽礫 掘方埋土 | <p>49柱穴</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. N6/灰 シルト 抜き取り | |

図 23 掘立柱建物 1 平・断面

釜、388溝から土師器羽釜か鍋体部、須恵器鉢（東播系）、平瓦、陶器（丹波焼甕体部片か、外面赤褐色）、411溝から土師器皿、須恵器甕、瓦器椀、426溝から土師器皿、瓦器椀、丸瓦、322土坑から土師器皿・羽釜・羽釜か鍋体部、瓦器椀・羽釜、丸瓦・平瓦、白磁碗が出土した。土師器皿、瓦器椀には13世紀後葉以降のものが含まれており、324他溝の時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。324他溝と416溝は出土遺物から同時に機能した可能性が高い。

341溝（図24）

幅1.1m、深さ0.13m、埋土はシルトである。北東側の延長部は上部が削平されるため不明、南西側は攪乱を受けており、416溝との切り合い関係は確認できなかった。遺物は土師器皿・鍋、須恵器鉢（東播系）・甕が出土した。341溝の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

416溝（図24、図版1）

幅2.08m、深さ0.5mである。中央付近は現代に大きく攪乱される。416溝の北西側延長部は現代の攪乱（暗渠）を検出した範囲と一致しており確認されなかった。遺物は土師器皿、白色土器皿、須恵器鉢（東播系）、瓦器椀・羽釜、白磁碗、丸瓦、カマド片、獣骨が出土した。瓦器椀166は無高台、内面見込みの暗文は渦巻き状である。416溝の時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

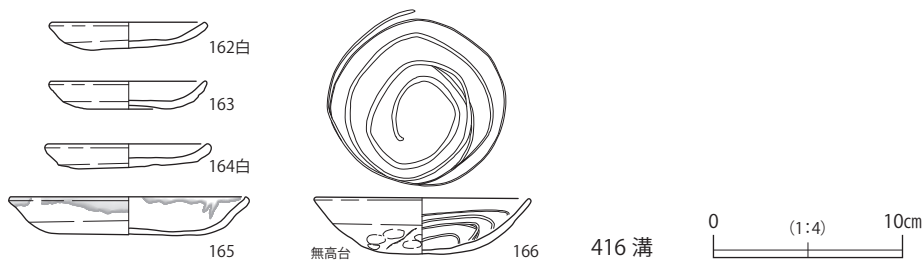
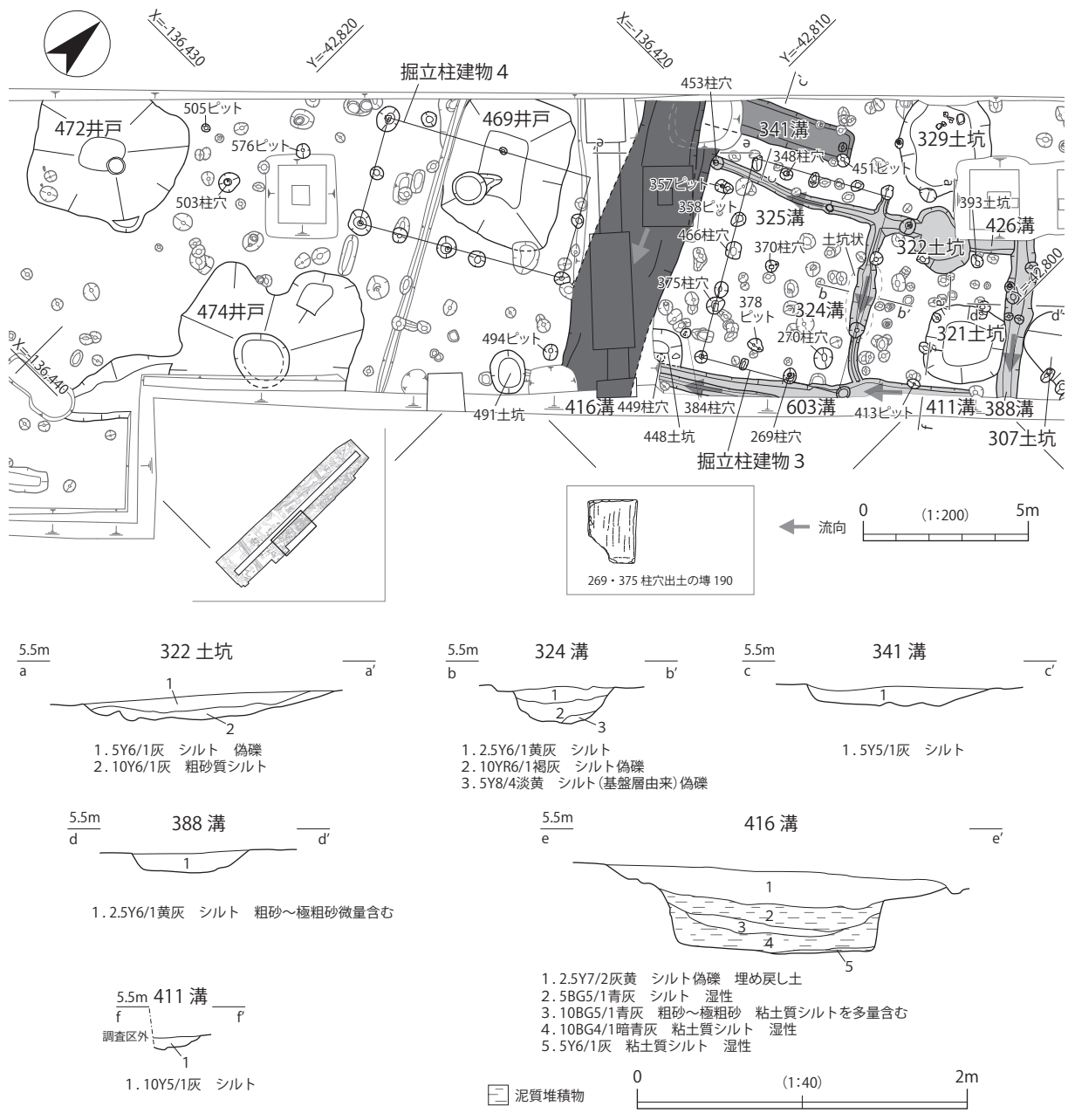
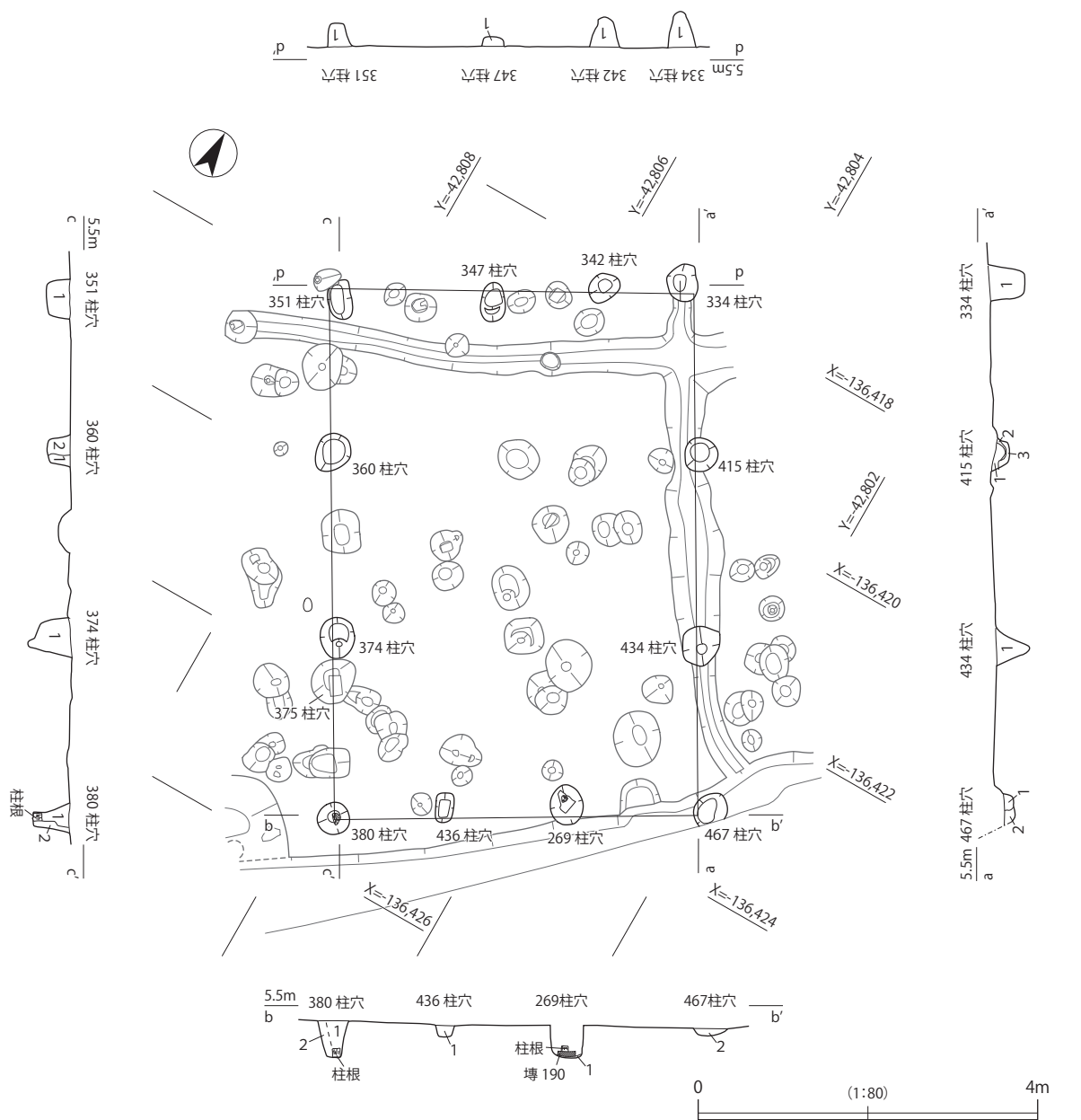


図 24 322 土坑他平・断面、出土遺物

掘立柱建物 3 (図24・25、図版 5・6)

建物構造は梁行 3 間×桁行 3 間、規模は梁行 4.3m、桁行 6.26m である。柱穴の平面形は不整な円形・不整形を呈す。長軸 0.36～0.44m、深さ 0.12～0.5m である。

269 柱穴では半分に割った埴 190 直上で柱根が検出された。269 柱穴から出土した埴 190 は 375 柱穴から出土した埴と接合する (図 31)。



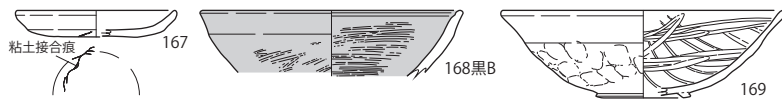
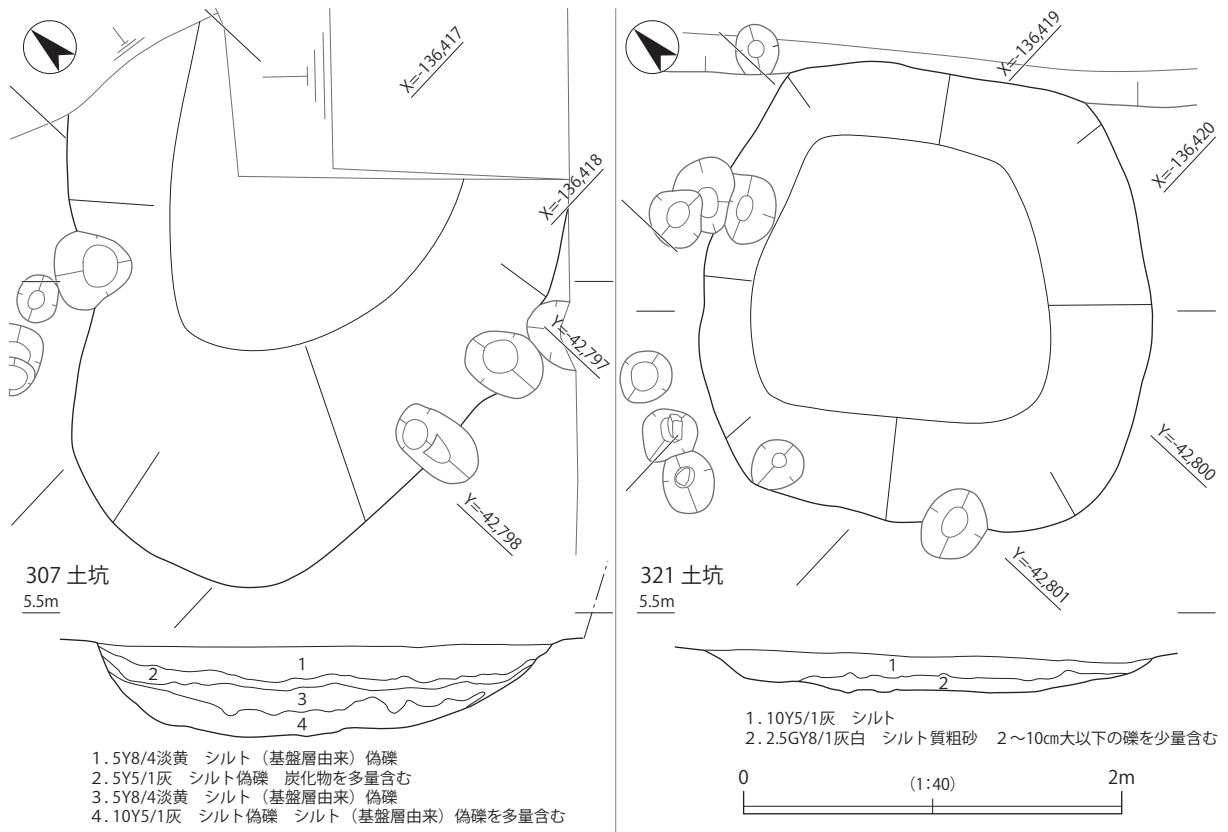
269柱穴 1. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫 掘方埋土	334柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り	342柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫	347柱穴 1. 5Y6/1灰 シルト偽礫
351柱穴 1. 5Y6/1灰 シルト偽礫	360柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り 2. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫 掘方埋土	374柱穴 1. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫	380柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り 2. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫 掘方埋土
415柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り 2. 10Y8/1灰白 粗砂~極粗砂 抜き取り 3. 10YR6/1褐灰 シルト偽礫 抜き取り	434柱穴 1. 5Y6/1灰 シルト偽礫	436柱穴 1. 5Y6/1灰 シルト偽礫	467柱穴 1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り 2. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫 掘方埋土

図 25 掘立柱建物 3 平・断面

遺物は、土師器皿・鍋、黒色土器碗（B類）、瓦器碗が出土した。12世紀代の遺物が含まれるが、他の柱穴・ピットとの切り合い関係から、掘立柱建物 3 の時期は13世紀後葉以降と考えられる。

307土坑 (図24・26)

北東側は攪乱を受けており、全容は不明である。平面形は不整な楕円形、長軸3.04m以上、短軸2.64m、深さ0.48m、埋土はシルト偽礫主体である。遺物は土師器皿・鍋、黒色土器碗（B類）、瓦器碗、丸瓦が出土した。307土坑の時期は12世紀後葉から13世紀前葉頃と考えられる。



307 土坑

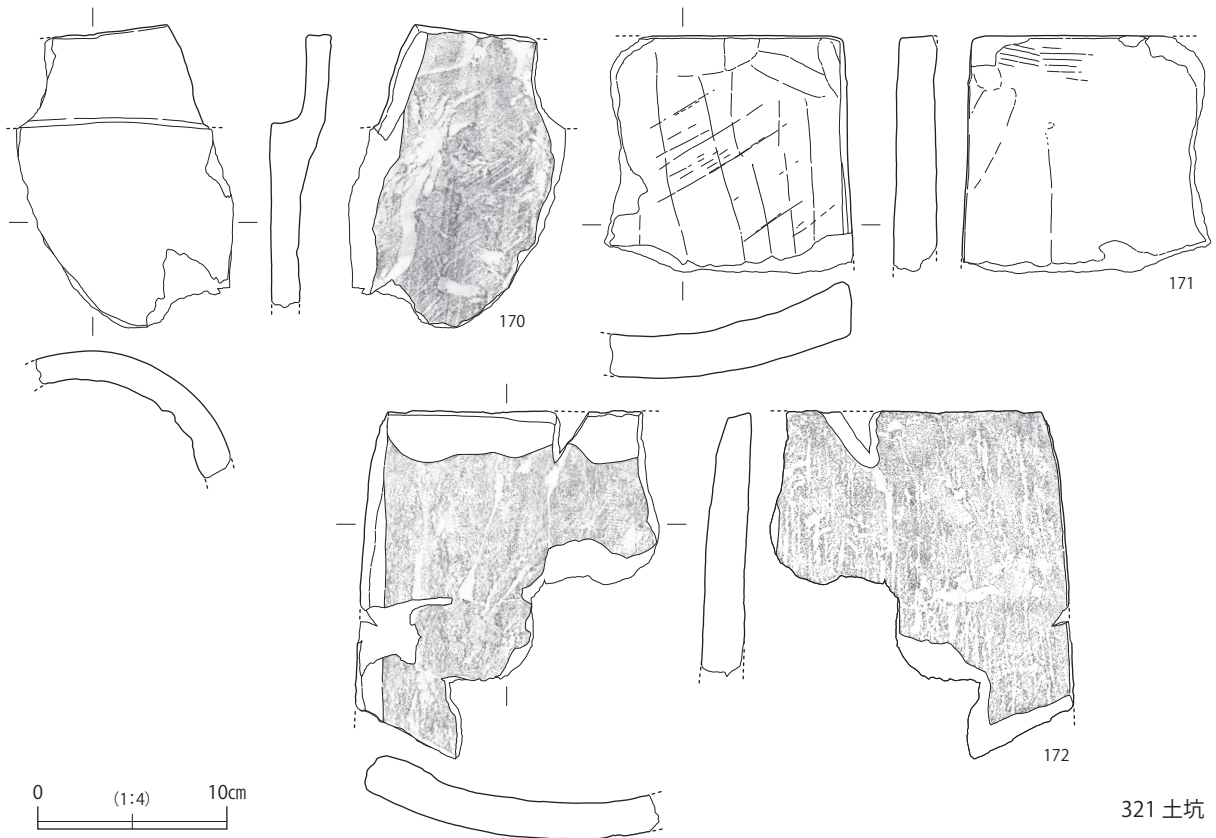


図 26 307 土坑他平・断面、出土遺物

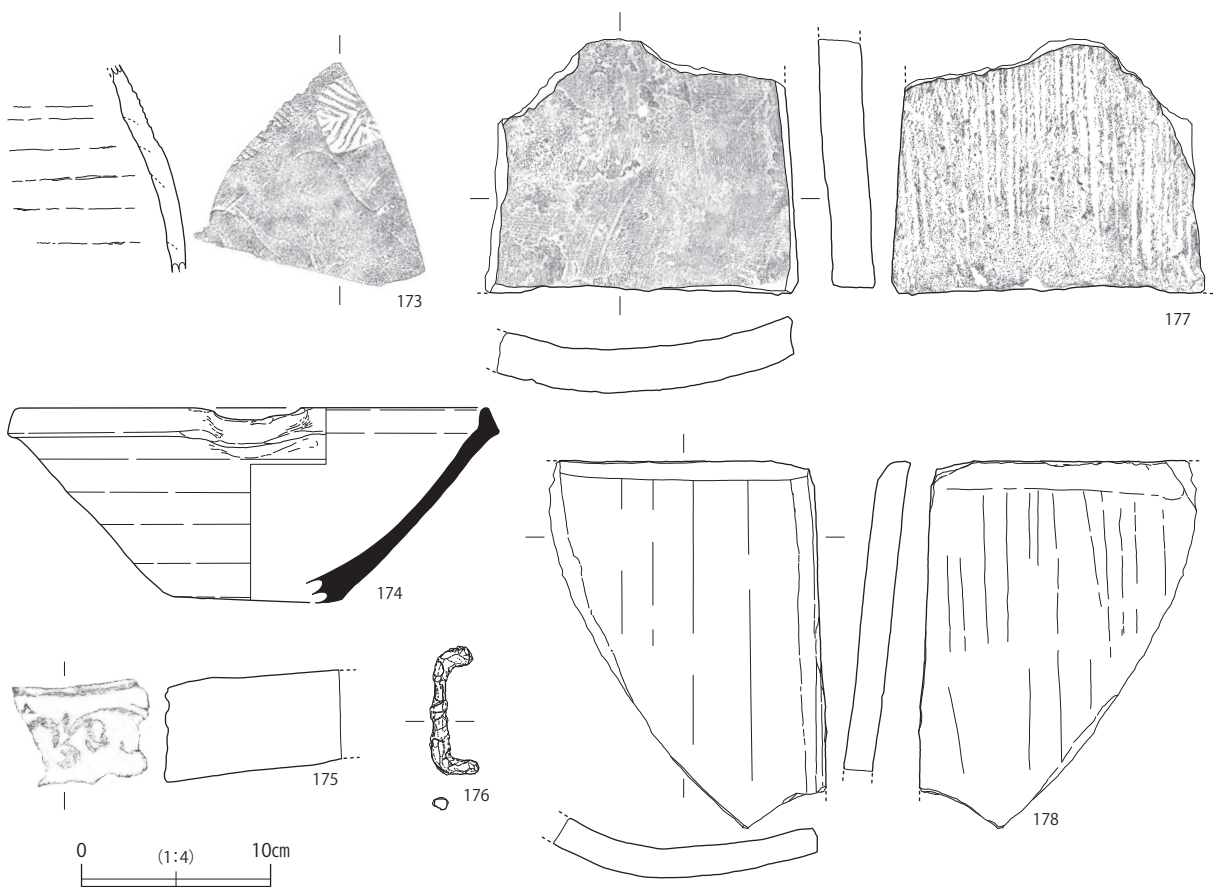
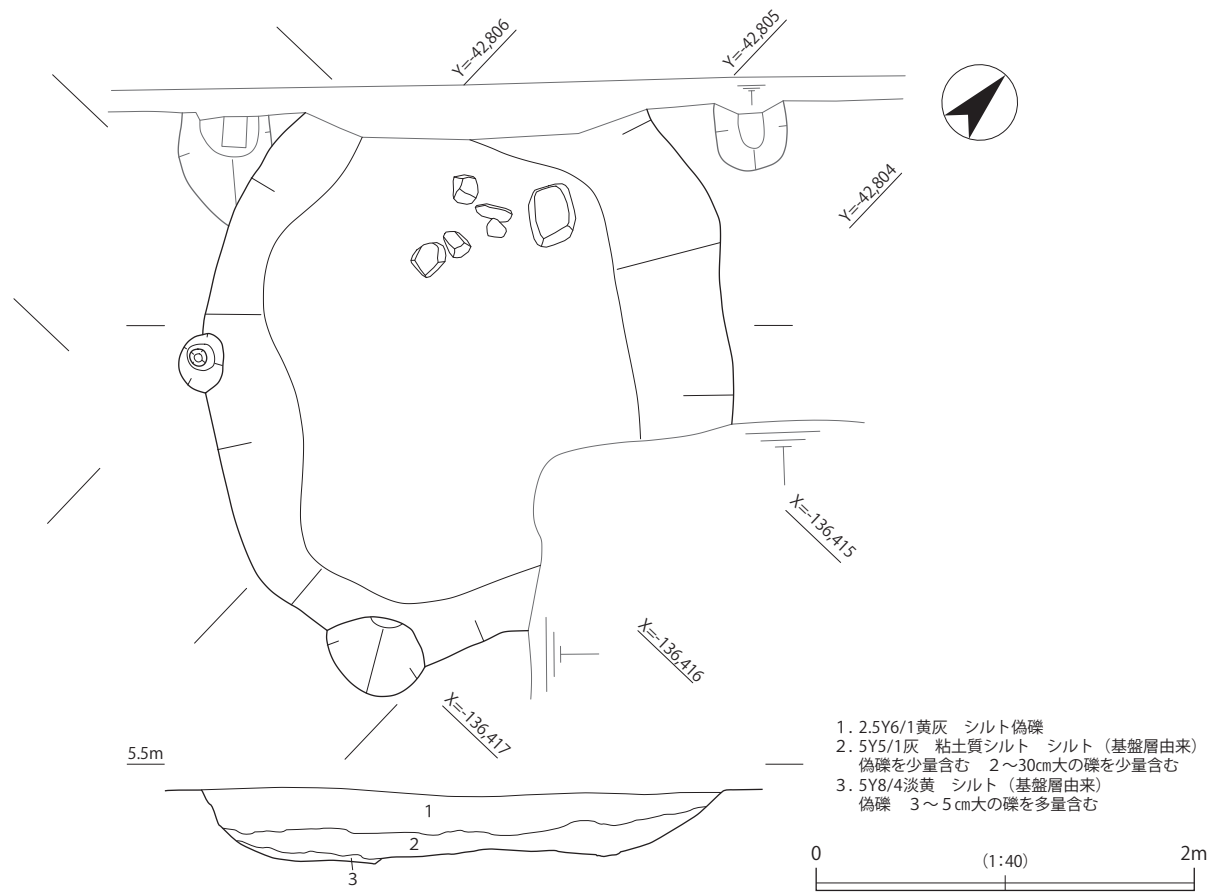


図 27 329 土坑平・断面、出土遺物

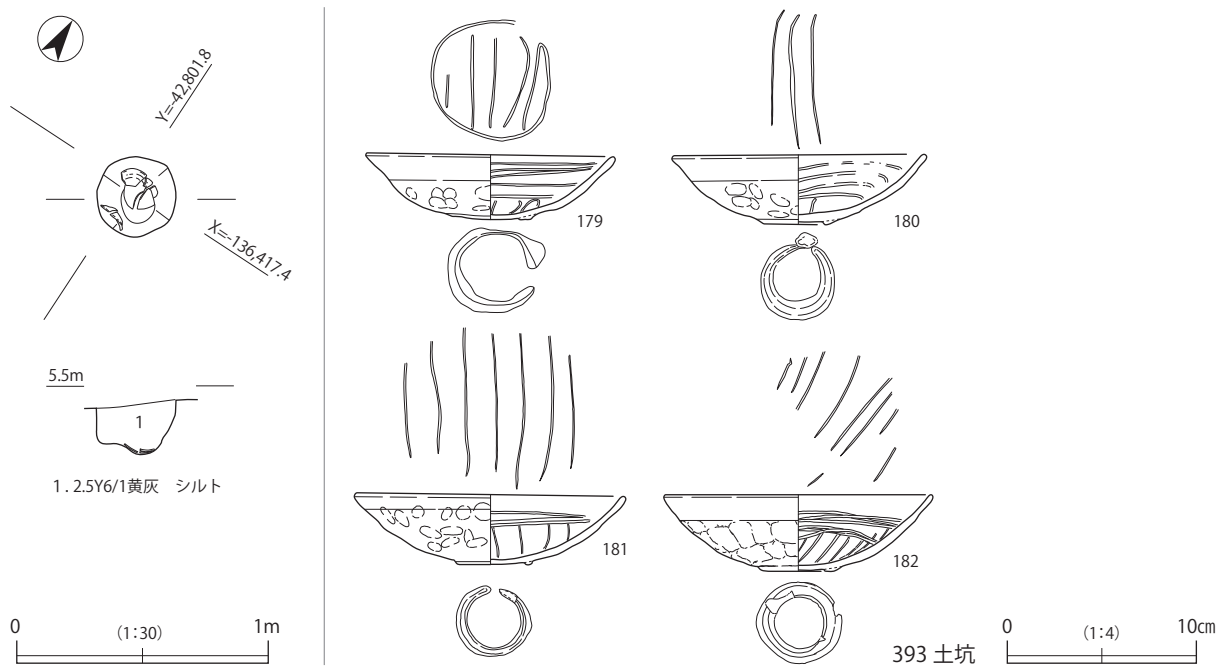


図 28 393 土坑平・断面、出土遺物

321土坑 (図24・26)

平面形は隅丸方形、一辺2.36m、深さ0.2mである。埋土下層はシルト質粗砂で、2～10cm大の礫が少量含まれる。遺物は土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢（東幡系）、白磁（碗か）、丸瓦・平瓦が出土した。321土坑の時期は13世紀後葉以降と考えられる。

329土坑 (図24・27、図版8)

北西側は調査区外にあり、全容は不明である。平面形は不整形、長軸2.92m以上、短軸2.76m、深さ0.38mである。埋土はシルト偽礫を主体としており、埋土下位には2～30cm大の礫が含まれる。

遺物は土師器皿・羽釜・鍋、須恵器鉢・甕、瓦器椀、常滑焼甕、青磁碗、軒平瓦・丸瓦・平瓦、鉄製品が出土した。今回検出した遺構の中では瓦が最も多く出土しており、平瓦の割合が多い。鉄製品176は用途不明で、コの字形に屈曲する。金具か。軒平瓦175は均整唐草文で、中心文は三葉文。唐草文は太く表現されるが、瓦範の傷みのせいかわ不明確である。329土坑の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

393土坑 (図24・28、図版3)

平面形は不整な円形、直径0.32m、深さ0.2m、埋土はシルトである。

遺物は土師器皿・羽釜か鍋体部片、瓦器椀、白磁皿が出土した。完形か一部欠損する瓦器椀が重なった状態で出土した。時期は遡るが、68土坑でも同様の遺物出土状況で瓦器椀（図47の292）が出土しており、地鎮等の祭祀を行った可能性がある。瓦器椀179～182は、内面見込みの暗文は平行線状、高台は不均等な径の粘土紐を貼り付けたもので、一周しない。393土坑の時期は13世紀後葉頃と考えられる。

72・74・77・79・81・107・115・134柱穴

72柱穴は南東側を攪乱されており、全容は不明である（図7・29）。平面形は不整な楕円形、長軸0.58m、短軸0.4m、深さ0.37mである。礎板（板材か）を検出しており、礎板の直上では腐食した柱根下端部が確認された。遺物は土師器羽釜が出土しており、時期は13世紀以降のものと考えられる。

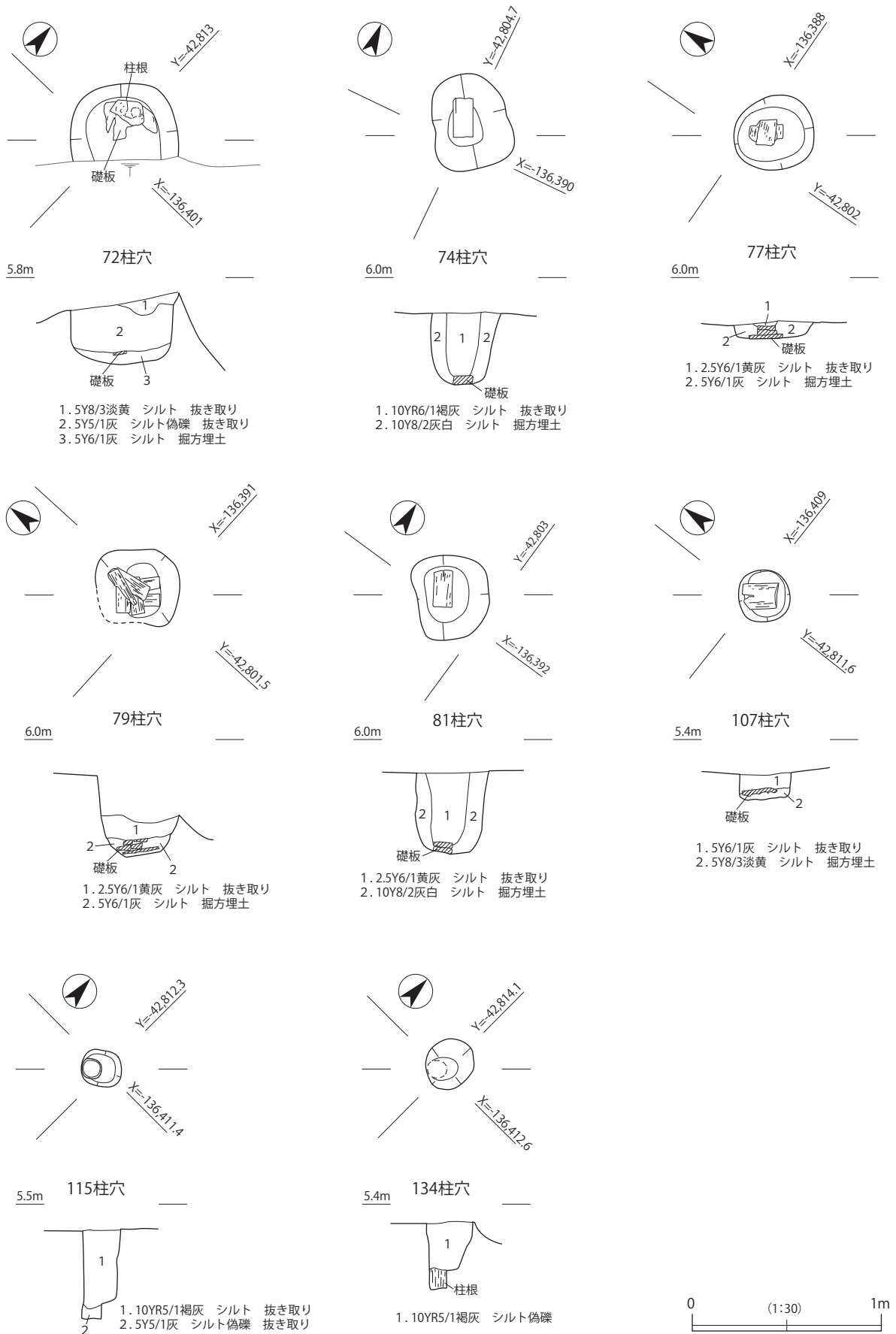


図 29 72 柱穴他平・断面

74柱穴は、平面形は不整形、長軸0.5m、短軸0.36m、深さ0.38m（図7・29）。底面では板材を用いた礎板を検出した。板材は長さ20cm、幅10cm、厚さ2cm。遺物は出土しなかった。

77柱穴は、平面形は不整な楕円形、長軸0.42m、短軸0.4m、深さ0.09mである（図7・29、図版5）。底面では礎板を検出した。礎板は板材を3段に重ねており、板材は長さ13～20cm、幅7～10cm、厚さ2～3cm。遺物は黒色土器碗（B類）が出土した。

79柱穴は、平面形は不整な隅丸方形、一辺0.45m、深さ0.17mである（図7・29、図版5）。底面で板材を3段に重ねた礎板を検出した。上段の板材は柱抜き取り時に動いた可能性が高いと考えている。板材は長さ20～23cm、幅6～8cm、厚さ2～3cm。遺物は出土しなかった。

81柱穴は、平面形は不整形、長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.43mである（図7・29）。底面では板材を2段に重ねた礎板を検出した。板材は長さ19cm、幅10cm、厚さ2cm。遺物は土師器鍋が出土したが、詳細な時期は不明である。

107柱穴は、平面形は円形、直径0.28m、深さ0.13mである（図7・29）。底面では礎板を検出した。礎板は板材を使用し、板材は長さ18cm、幅12cm、厚さ2cm。遺物は瓦器皿・碗が出土した。107柱穴の時期は13世紀前葉から中葉頃と考えられる。

115柱穴は、平面形は不整な隅丸方形、一辺0.2m、深さ0.46mである（図7・29）。柱は抜き取られていたが、柱があったと考えられる部分が掘方の底面より低くなっている。遺物は瓦器碗、鞆羽口、白色土器の可能性のある皿体部が出土した。瓦器碗は13世紀後葉から14世紀前葉頃のものである。

134柱穴は、平面形は不整な円形、直径0.25～0.27m、深さ0.34mである（図7・29）。柱根の下端が遺存する。柱根の上端は腐食が顕著。遺物は出土しなかった。

248・270・302・327・370・375・384・453柱穴、301ピット

248柱穴は、平面形は不整形、長軸0.34m、短軸0.33m、深さ0.22mである（図8・30）。底面では根石と根固めに使用した礫を検出した。遺物は土師器皿・鍋、瓦器碗が出土した。248柱穴の時期は13世紀以降と考えられる。

270柱穴は、平面形は不整な楕円形、長軸0.66m、短軸0.55m、深さ0.62mである（図24・30）。270柱穴では柱が抜き取られた痕跡を確認している。遺物は土師器皿、白色土器皿、瓦器碗が出土した（図31）。土師器皿・白色土器皿は、188を除き遺存状態が良好である。瓦器碗は細片のため不明の1点を除いて和泉型のものが出土した。270柱穴の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

301ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.35m、短軸0.22m、深さ0.18mである（図7・30）。遺物は土師器皿、須恵器杯蓋・杯身・甕、瓦器碗、平瓦が出土した。瓦器碗は12～13世紀頃のもものが出土した。須恵器杯蓋・杯身・甕191は、溶着資料で窯体が付着する（図31、図版8）。時期はTK47～MT15型式に位置付けられる。

302柱穴は、平面形は不整な円形、直径0.34～0.36m、深さ0.27mである（図7・30）。底面では礎板を検出した。礎板は板材を使用し、板材は長さ20cm、幅9cm、厚さ3cm。遺物は土師器皿、須恵器鉢（東幡系）、瓦器碗が出土した。302柱穴の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

327柱穴は、平面形は不整な円形、直径0.32m、深さ0.18mである（図7・30）。底面では、板材を用いた礎板を検出した。礎板は長さ20cm、幅9cm、厚さ3cmである。遺物は土師器皿、瓦器碗が出土した。327柱穴の時期は13世紀以降と考えられる。

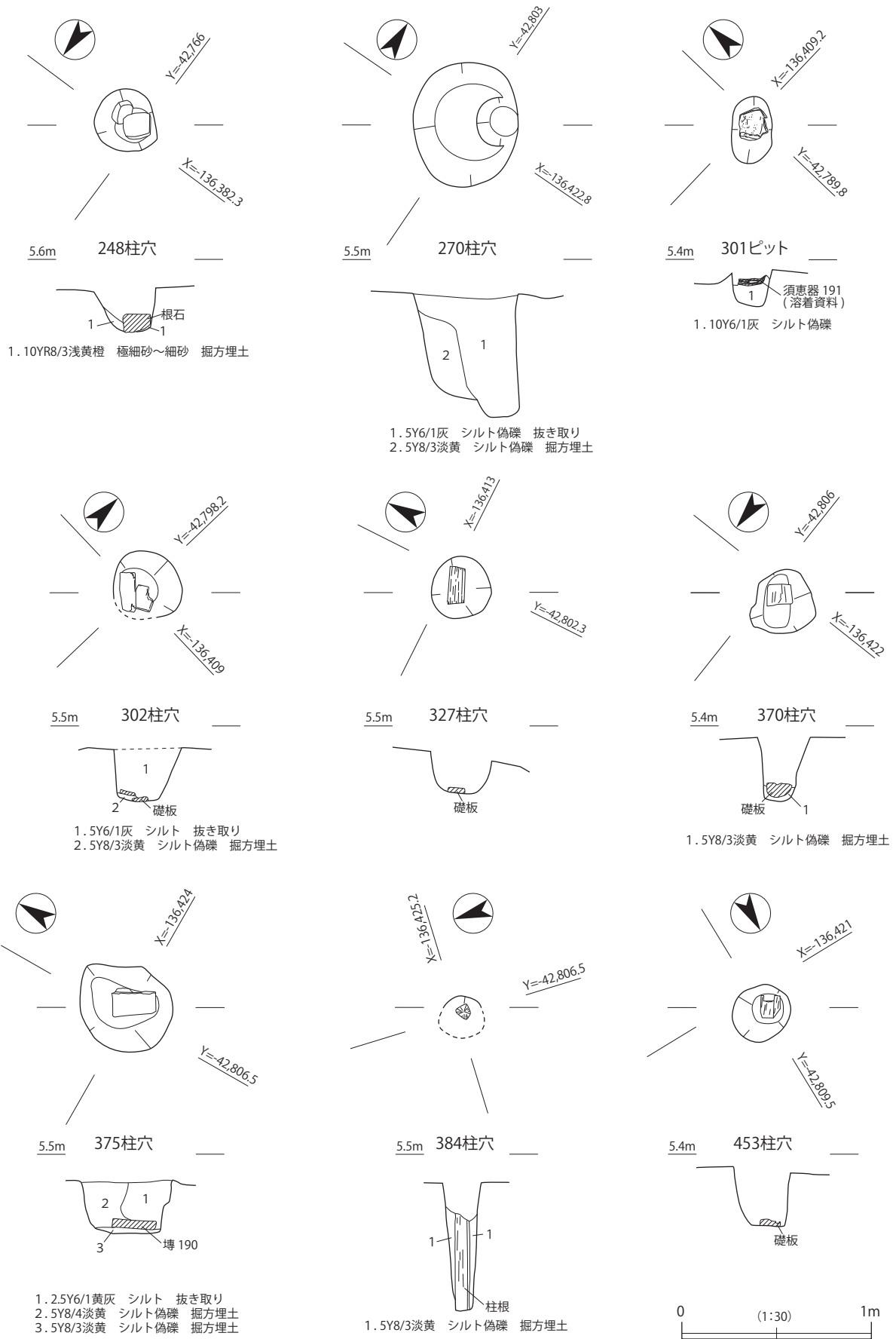


図 30 248 柱穴他平・断面

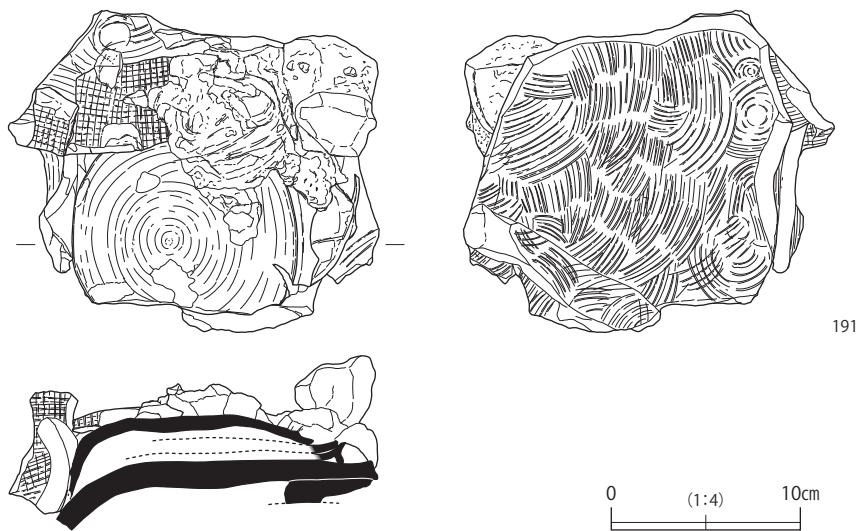
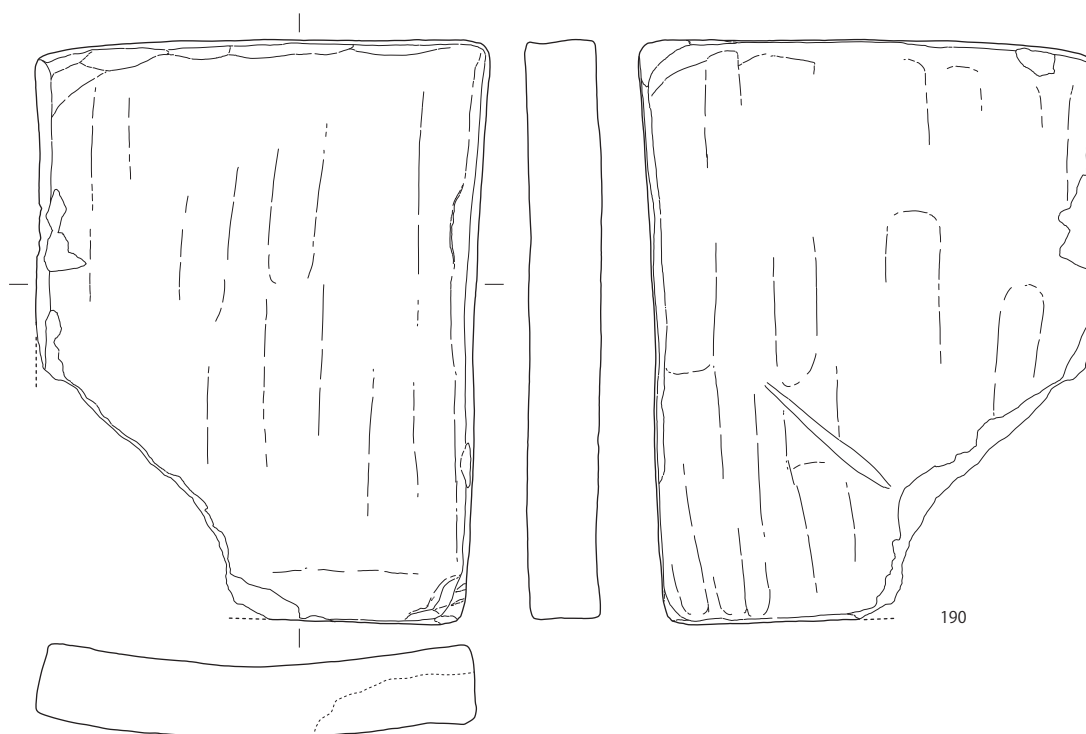
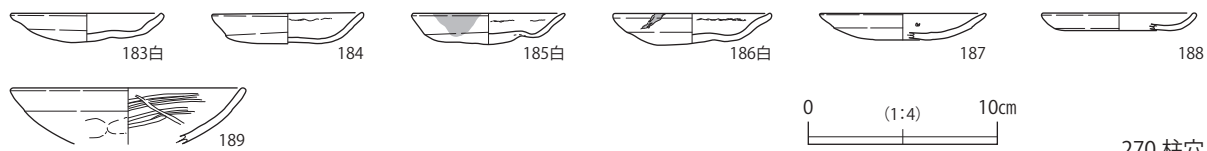


図31 270 柱穴他出土遺物

370柱穴は、平面形は不整形、長軸0.33m、短軸0.28m、深さ0.34mである（図24・30）。底面では、礎板を検出した。礎板は長さ10cm、幅13cm、厚さ7cm。遺物は出土しなかった。

375柱穴は、平面形は不整形、長軸0.49m、短軸0.45m、深さ0.26mである（図24・30）。底面では柱基礎として用いられた埴190を検出した（図31、図版6）。埴190は半割したもので、掘立柱建物3の269柱穴から出土した埴と接合する。表面を上向きにして柱の基礎として使用する。

384柱穴は、西側が攪乱されているため全容は不明である（図24・30）。平面形は円形、復元径

0.22m、深さは0.67m。柱根は長さ50cm、幅6cm、断面形は多角形状を呈する。遺物は土師器皿、瓦器碗が出土しており、時期は13世紀以降と考えられる。

453柱穴は、平面形は不整な楕円形、長軸0.3m、短軸0.28m、深さ0.29mである(図24・30)。底面では礎板を検出した。礎板は方形の切り欠き(柄穴状)があり、348柱穴の礎板302(図48)と類似する。遺物は土師器皿、瓦器羽釜が出土した。時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

(2) 南西側の調査(図32、巻頭図版1)

118溝(図33、図版1・8)

118溝は周辺で復元されている条里地割の坪境に合致しており、坪境の溝であったと考えられる。近世に溝の掘り直しが行われたことを確認しており、近世を新段階、近世以前を古段階として以下で報告する。

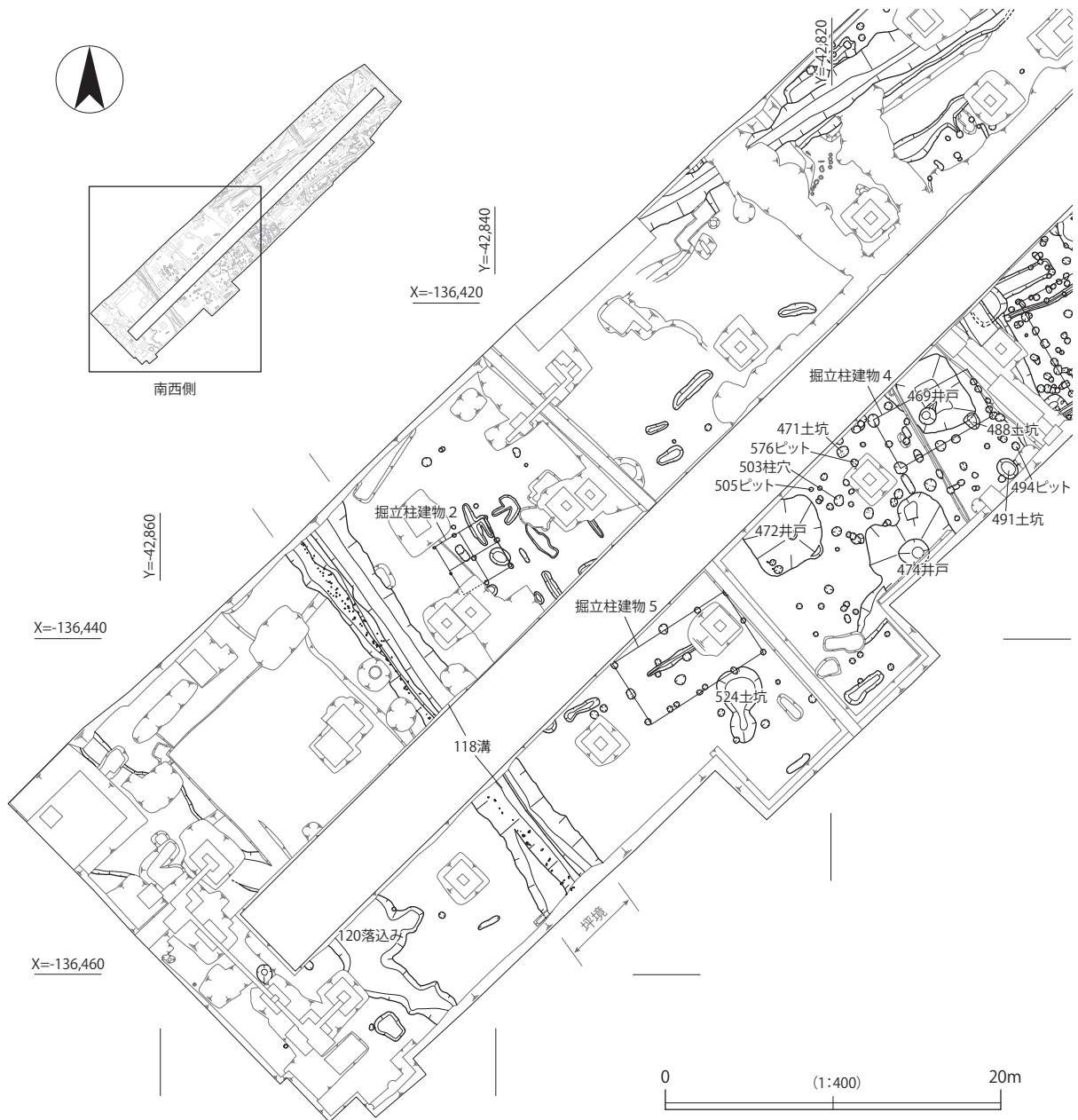


図32 第3面平面(2)

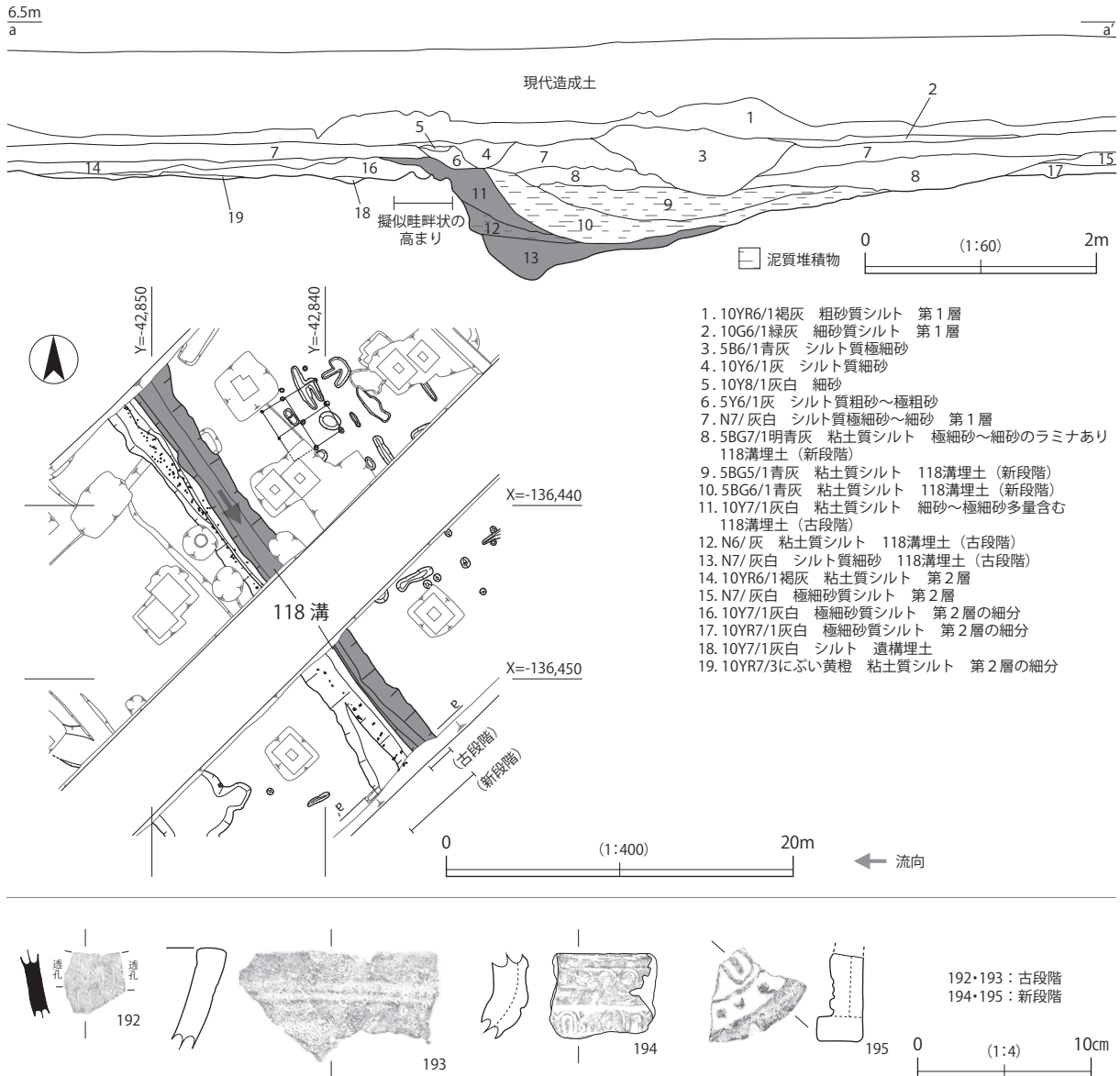


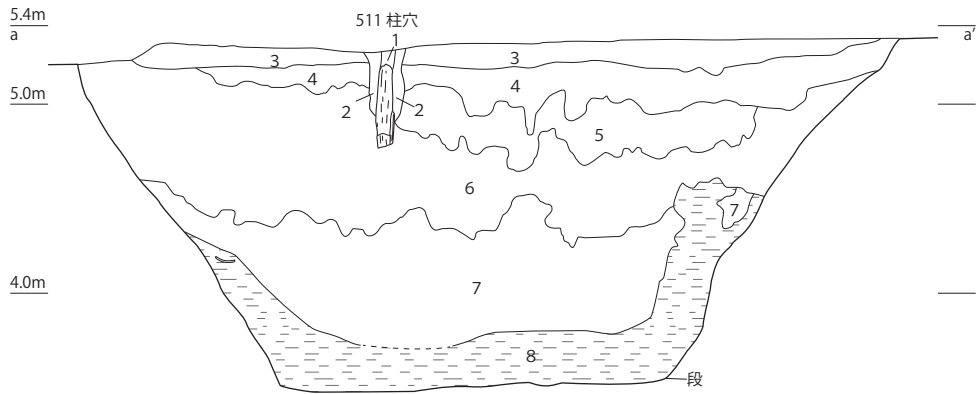
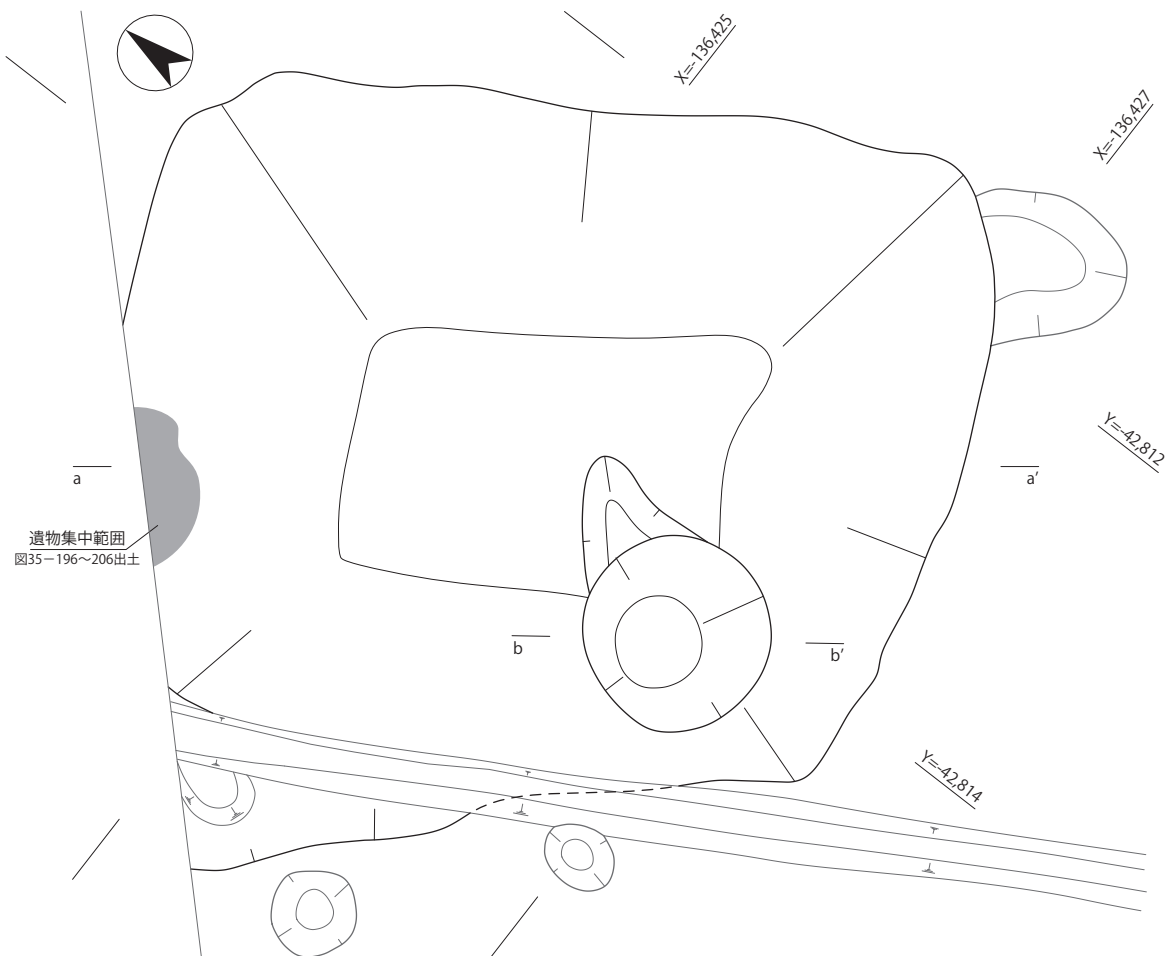
図33 118 溝平・断面、出土遺物

新段階は、幅2.6m以上、深さ0.7m以上、埋土は湿性の泥質堆積物である。遺物は肥前系磁器・信楽焼甕等が出土した他、瓦器風炉ないし火鉢194、軒丸瓦195が出土した。軒丸瓦195は瓦当文様が蓮華文、外区に珠文と外縁の間に範傷が認められる。文様の特徴から12世紀代のものと考えられる。

古段階は、幅2.5m以上、深さ0.9m、埋土は上層が粘土質シルト、下層がシルト質細砂である。断面の検討で、第2層とした図33の7層の形成より古い時期から機能することや、図33の16層下面に相当する118溝東側肩部で擬似畦畔状の高まりを確認している。遺物は須恵器器台192が出土した他、図33の13層から瓦器火鉢193が出土した。118溝古段階の時期は中世後半と考えられる。

469井戸 (図32・34～36、図版3・6～8)

平面形は不整な隅丸長方形、長辺4.5m、短辺3.55m、深さ0.93mである。埋土は下位に泥質堆積物が認められる。検出面から1.8mで平坦に加工された段を検出しており、井戸の最深部は段の南側隅に掘削される。最深部の掘方は、平面形は円形、直径1.0m、段から底面までの深さは0.93mで、井戸枠は確認されなかった。



- 1. 10YR6/1 褐灰 シルト 511柱穴柱痕
- 2. 10Y7/1 灰白 シルト偽礫 511柱穴掘方埋土
- 3. 10Y6/1 灰 極細砂質シルト 上層
- 4. 5Y6/1 灰 シルト
- 5. 5Y5/1 灰 シルト (基盤層由来) 偽礫 埋め戻し土
- 6. 2.5Y6/1 黄灰 シルト (基盤層由来) 偽礫 埋め戻し土
- 7. 10YR7/1 灰白 シルト (基盤層由来) 偽礫 埋め戻し土
- 8. 10YR7/1 灰白 粘土質シルト 9と連続して堆積
- 9. 10YR6/1 褐灰 粘土質シルト
- 10. 2.5Y8/1 灰白 極細砂~細砂

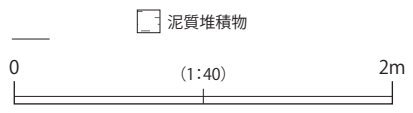
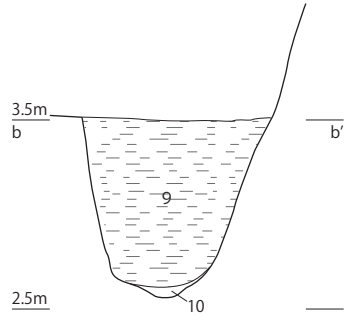
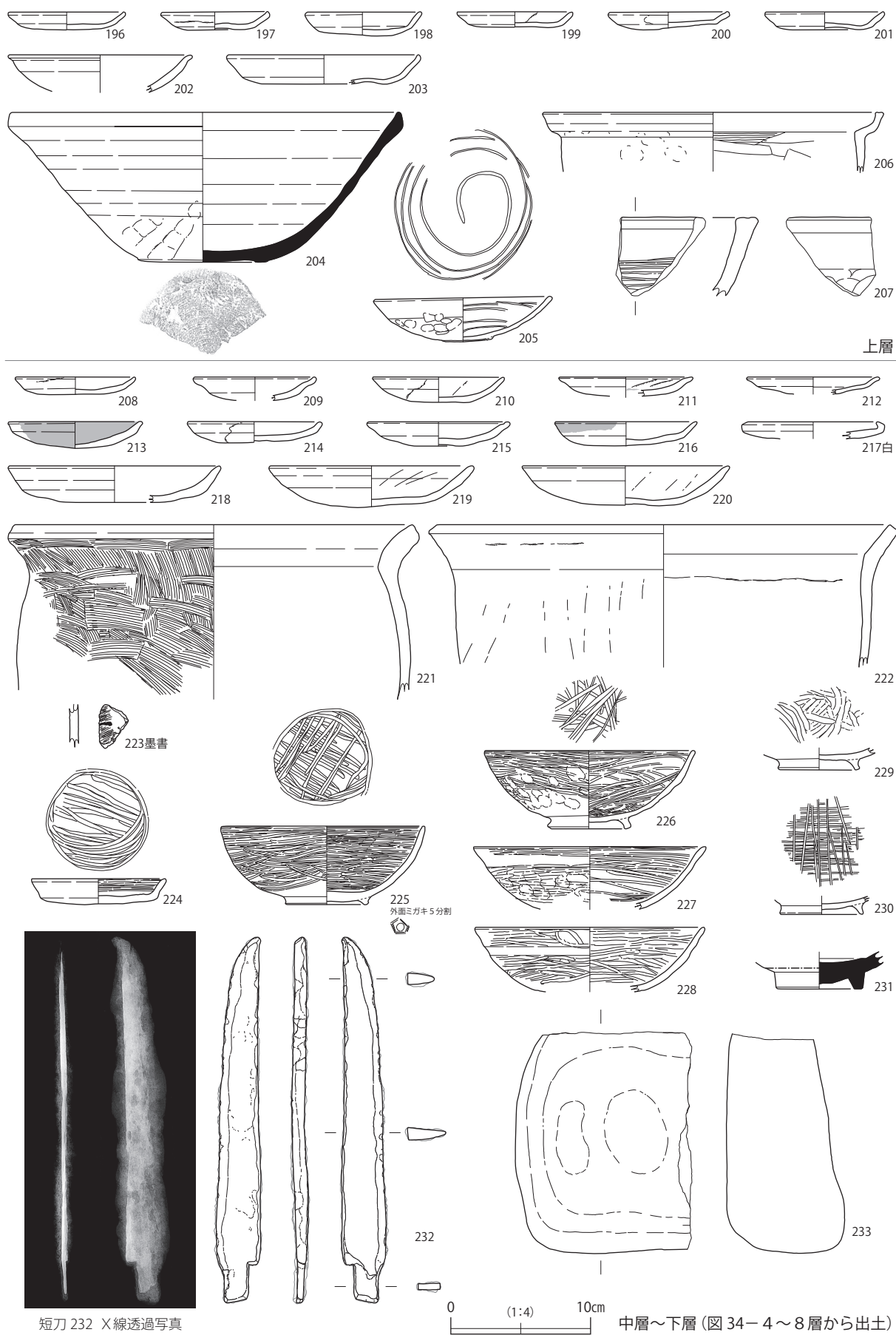


図 34 469 井戸平・断面



短刀 232 X線透過写真

図35 469井戸出土遺物(1)

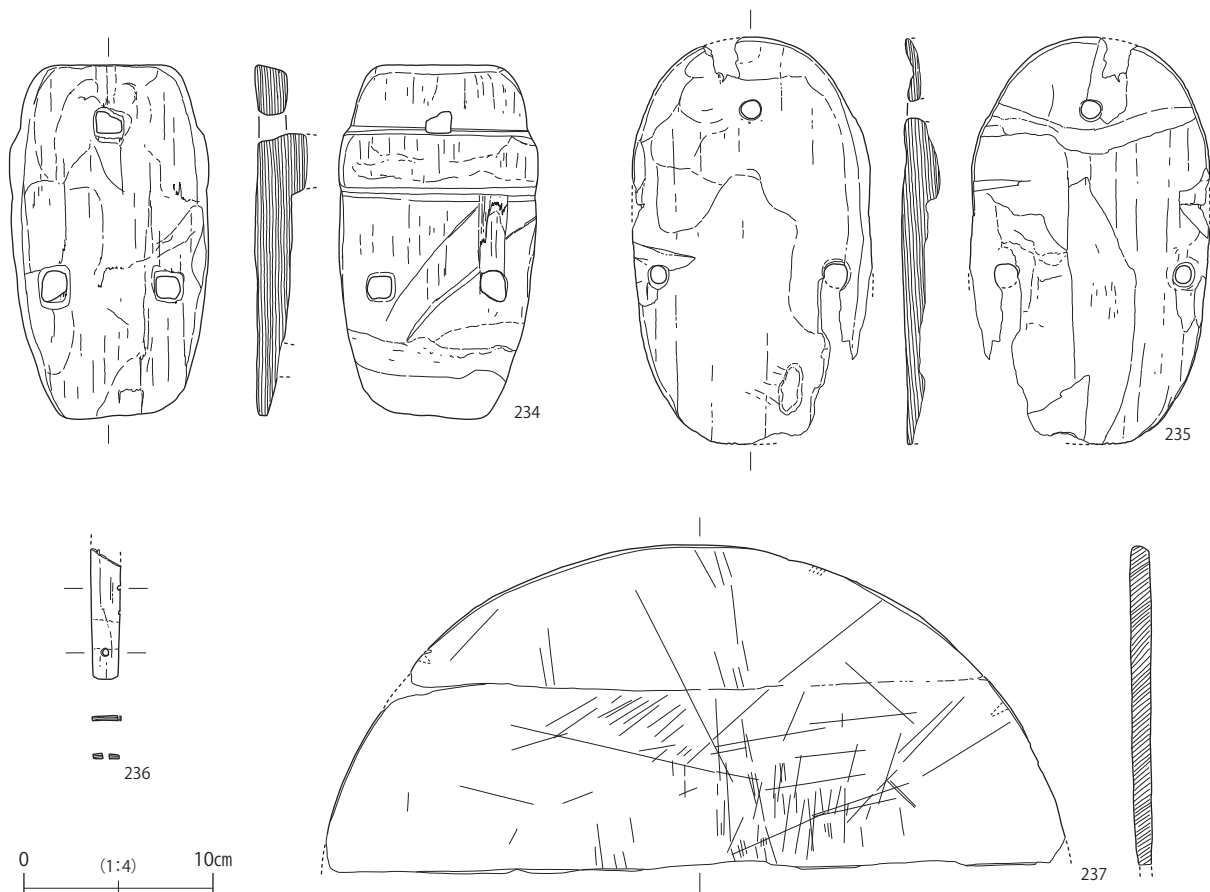


図36 469井戸出土遺物（2）

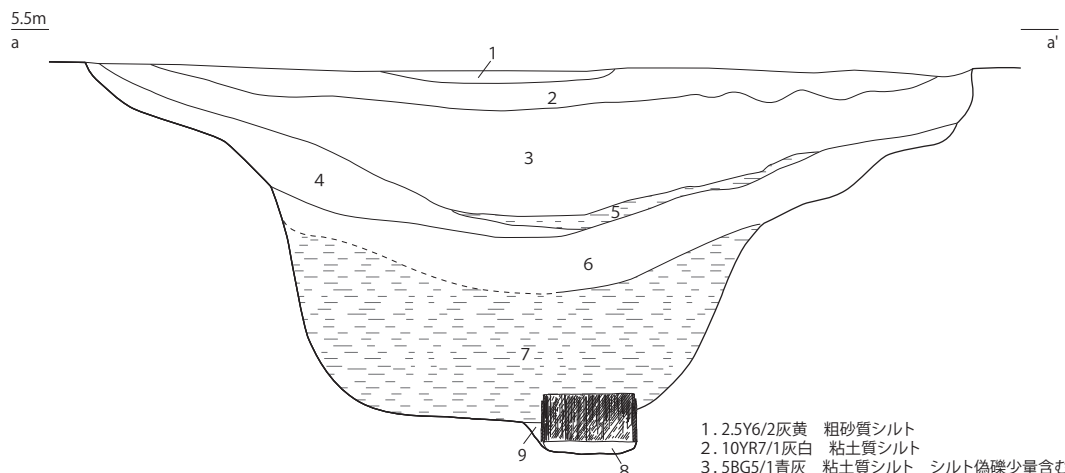
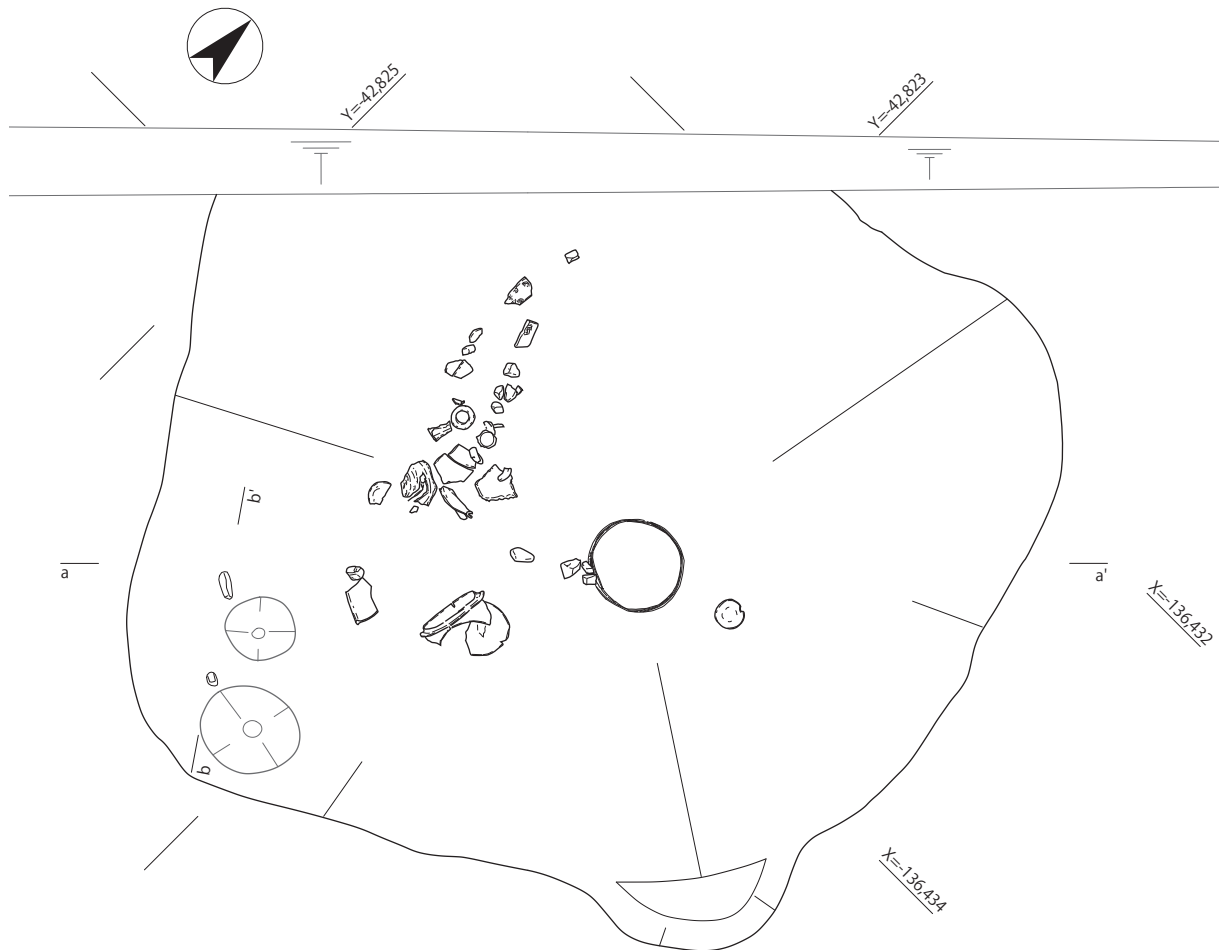
469井戸埋土の上層に当たる図34の3層では、既設構造物に近接した位置で遺物が集中して出土した（図34、図版3の2）。遺物集中部から出土した土器は、図34の4層以下から出土したものより新しく、時間的に隔たりがある。遺物集中部については469井戸の埋め戻し後に上部が凹みとして残っていた可能性と、469井戸埋没後に掘削された別の遺構があった可能性を想定している。後者については遺物集中部周辺で土坑等の遺構を確認することはできなかった。

469井戸上層の遺物は、土師器皿・鍋、白色土器皿、須恵器鉢（東播系）、瓦器椀・鍋が出土した。瓦器椀205は、粘土紐を貼り付けた高台は一周せず、内面見込み暗文は渦巻状。瓦器鍋は今回の調査で206以外に7溝直上と118溝からそれぞれ1点出土した。瓦器火鉢207は出土した層位が不明で、上層に帰属させている。時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

図34の4層以下から出土した遺物には、土師器皿・鍋、瓦器椀・皿、白磁碗、鉄製品、木製品、台石、馬歯がある。鉄製品は短刀232が出土した。切先は圧力が加わって変形する。木製品は、下駄234・235、扇子骨の可能性のある板状木製品236、曲物底板237が出土した。図34の7層と8層の層境は凹凸があり、調査時明確に区別して掘削することができなかったが、土師器皿209・211、瓦器皿224、瓦器椀226・227・229が図34の8層掘削時に出土した遺物である。なお、図34の9・10層から遺物は出土しなかった。469井戸の時期は11世紀後葉から12世紀前葉頃と考えられる。

472井戸（図32・37～39、図版3・4・6～8）

北西側が調査区外に当たるため、全容は不明。底面には曲物を据える。平面形は検出面で不整形な形状を呈するが、0.1m程度掘り下げた段階で隅丸長方形を呈する。長辺（北東－南西方向）4.68m、



- 1. 2.5Y6/2灰黄 粗砂質シルト
 - 2. 10YR7/1灰白 粘土質シルト
 - 3. 5BG5/1青灰 粘土質シルト シルト偽礫少量含む
 - 4. 5BG4/1暗青灰 粘土質シルト シルト偽礫少量含む
 - 5. 10BG4/1暗青灰 粘土質シルト
 - 6. 5Y8/1灰白 シルト偽礫 埋め戻し土
 - 7. 5Y6/1灰 粘土質シルト
 - 8. 5Y8/1灰白 極細砂～細砂
 - 9. N8/灰白 細砂～中砂
- 曲物内: 7と同じ

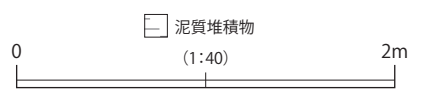
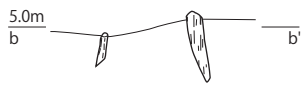


図 37 472 井戸平・断面

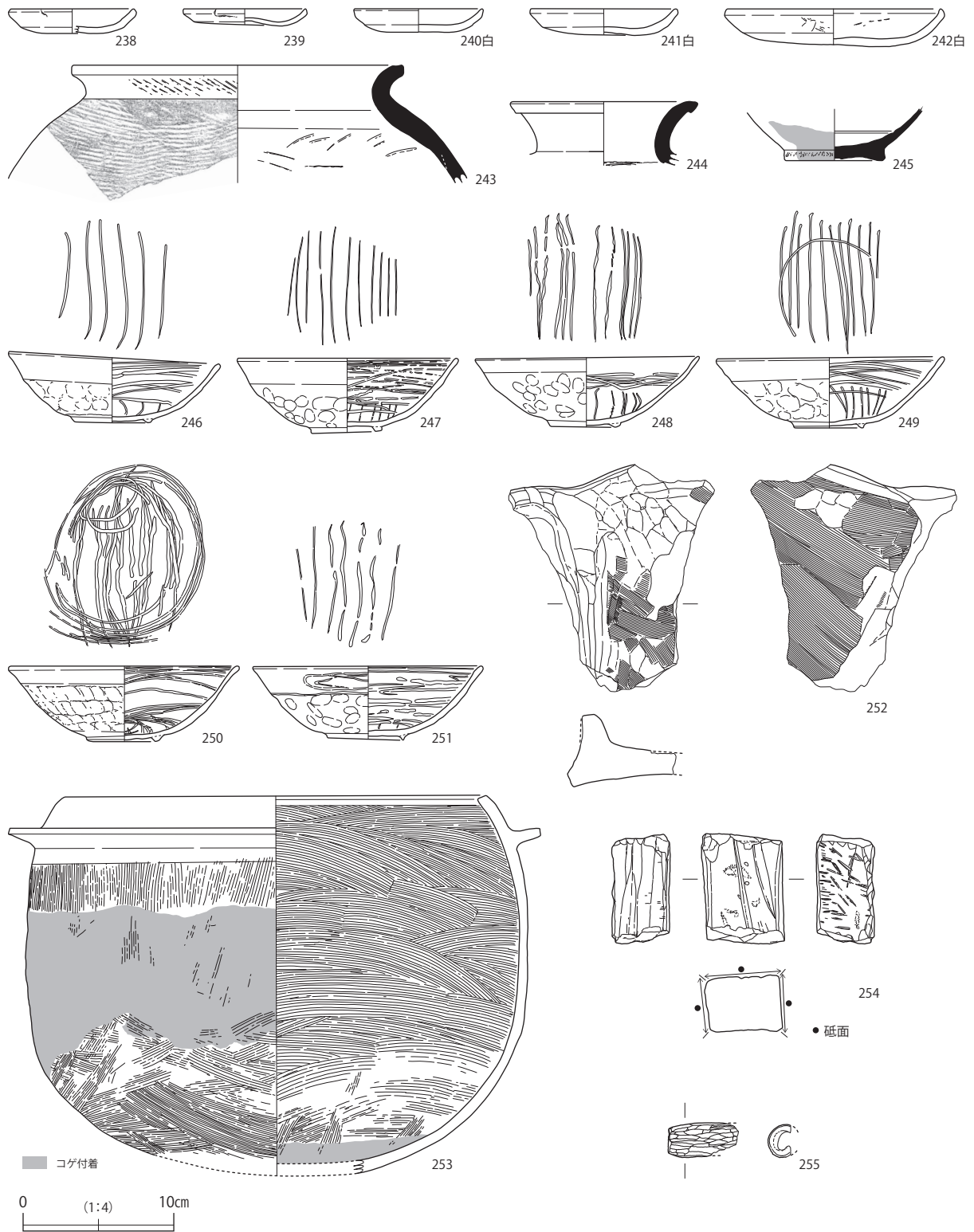


図38 472井戸出土遺物(1)

短辺(北西-南東方向)3.93m、深さ2.02m、埋土下位に泥質堆積物が認められる。曲物は直径50.0cm、高さ27.0cm、厚さ0.4~0.5cmである。遺物は土師器皿・羽釜・鍋、白色土器皿、須恵器鉢(東幡系)・甕・壺、瓦器碗・皿・羽釜、常滑焼甕、白磁碗・皿、青磁皿、平瓦、カマド片、木栓、陶棺片、砥石等が出土した他、須恵器溶着資料、窯体、被熱した礫が出土した。瓦器碗246~251はすべて和泉型で、251以外は外面のミガキを施さない。土師器羽釜253は底部の一部を除いて完形に近いもので、

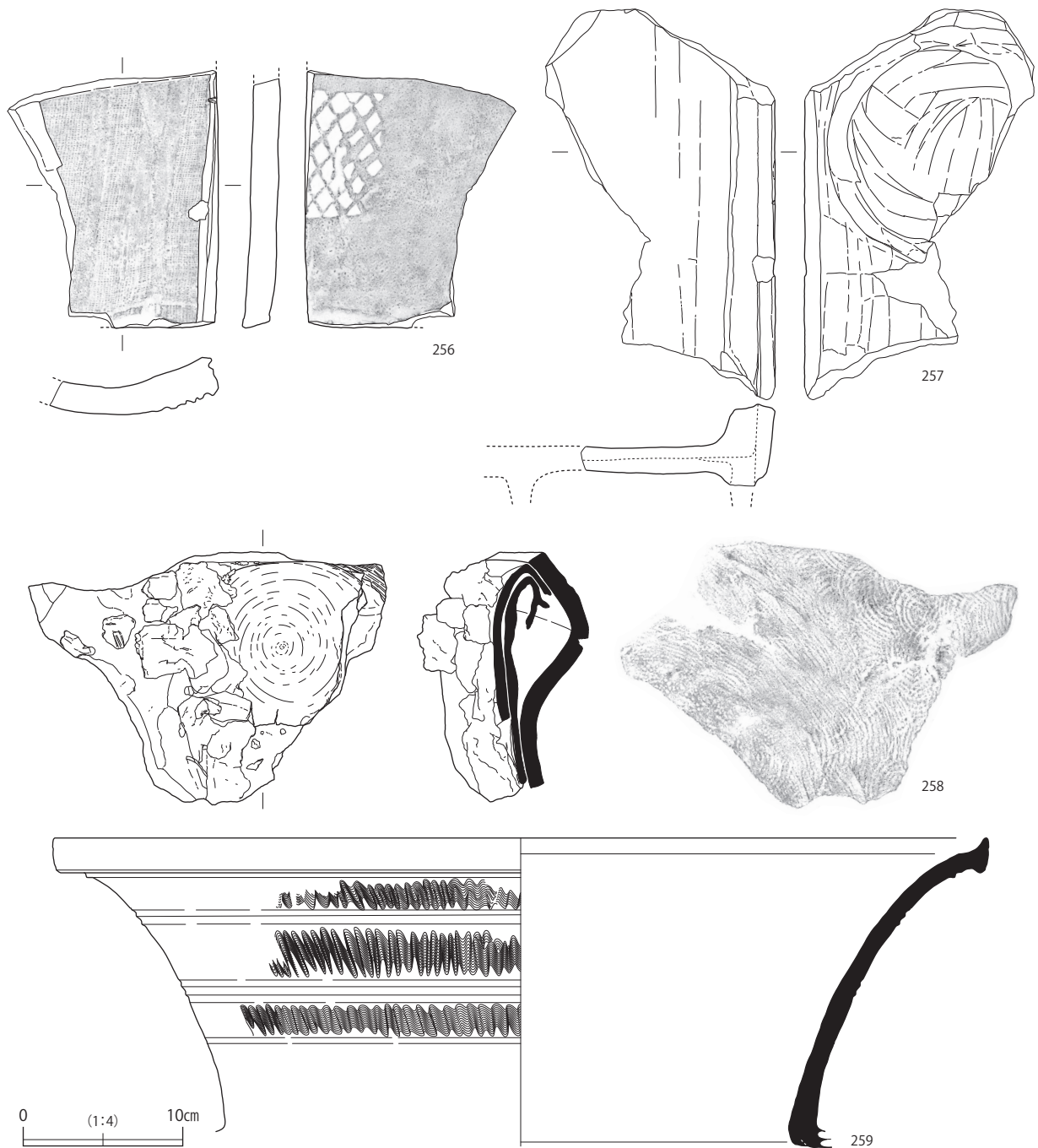
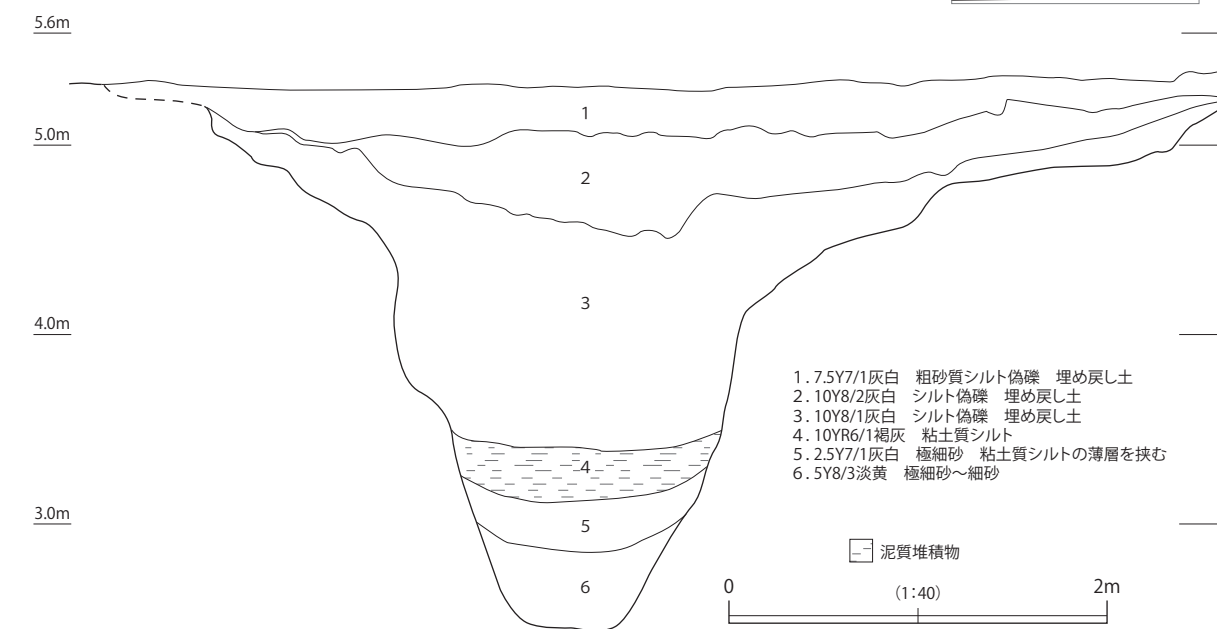
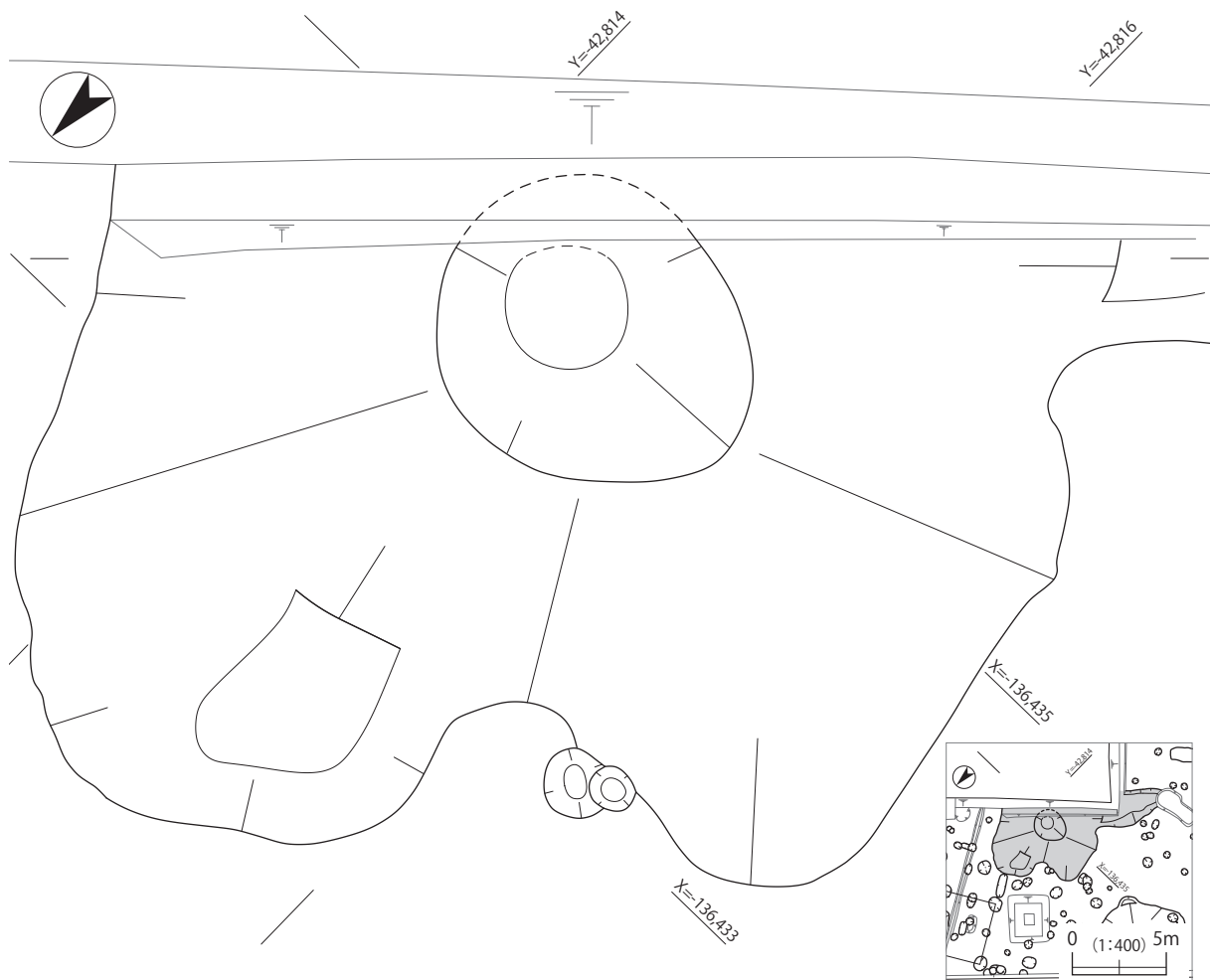


図39 472井戸出土遺物（2）

外面にはコゲが分厚く付着する。砥石254はV字状の砥面が認められ、鉄製品の仕上げ砥の可能性が有る。平瓦256は凸面に斜格子タタキを施すもので、7世紀後葉から8世紀前葉頃のものと考えられる。須恵器258は溶着資料で、変形した杯蓋・杯身・甕に礫・窯体が付着し、須恵器甕259も含めてTK47～MT15型式に位置付けられる。472井戸の時期は13世紀前葉から中葉と考えられる。

474井戸（図32・40、図版3・8）

南東側は調査区外に当たるため、全容は不明。平面形は不整形で、掘方の南西側は溝状に突出する。長軸8.2m以上（溝状に突出する部分を含む）、短軸2.57m以上、深さ2.88mである。埋土は上位が埋め戻し土、下位は泥質堆積物と基盤層に由来する極細砂～細砂である。井戸枠は確認されておらず、廃絶時に抜き取られた可能性がある。



- 1. 7.5Y7/1灰白 粗砂質シルト偽礫 埋め戻し土
- 2. 10Y8/2灰白 シルト偽礫 埋め戻し土
- 3. 10Y8/1灰白 シルト偽礫 埋め戻し土
- 4. 10YR6/1褐灰 粘土質シルト
- 5. 2.5Y7/1灰白 極細砂 粘土質シルトの薄層を挟む
- 6. 5Y8/3淡黄 極細砂～細砂

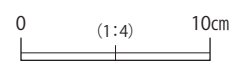
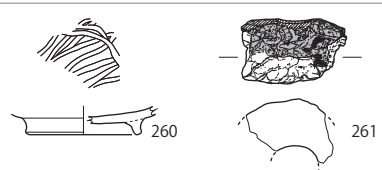


図 40 474 井戸平・断面、出土遺物

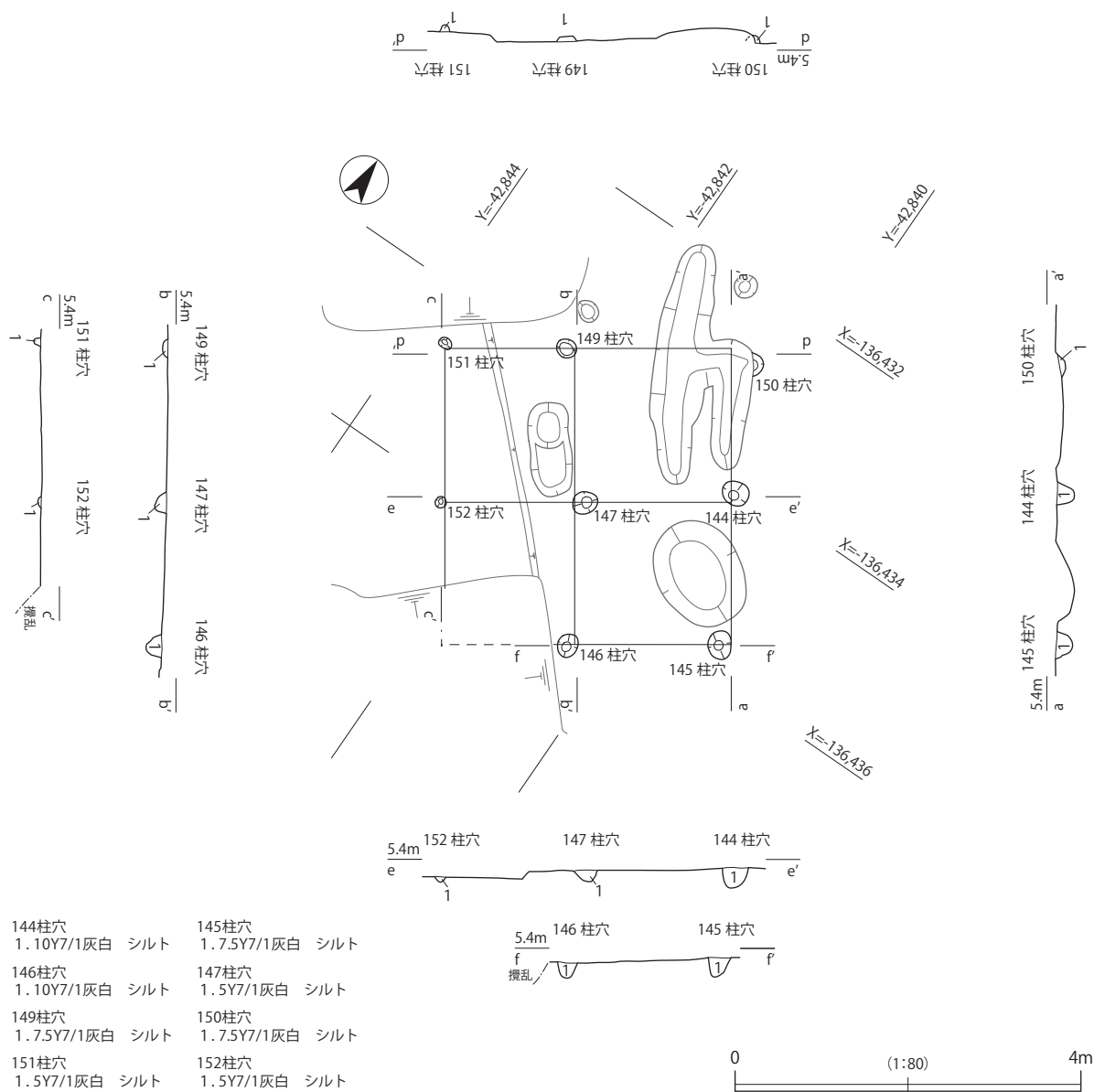


図41 掘立柱建物2平・断面

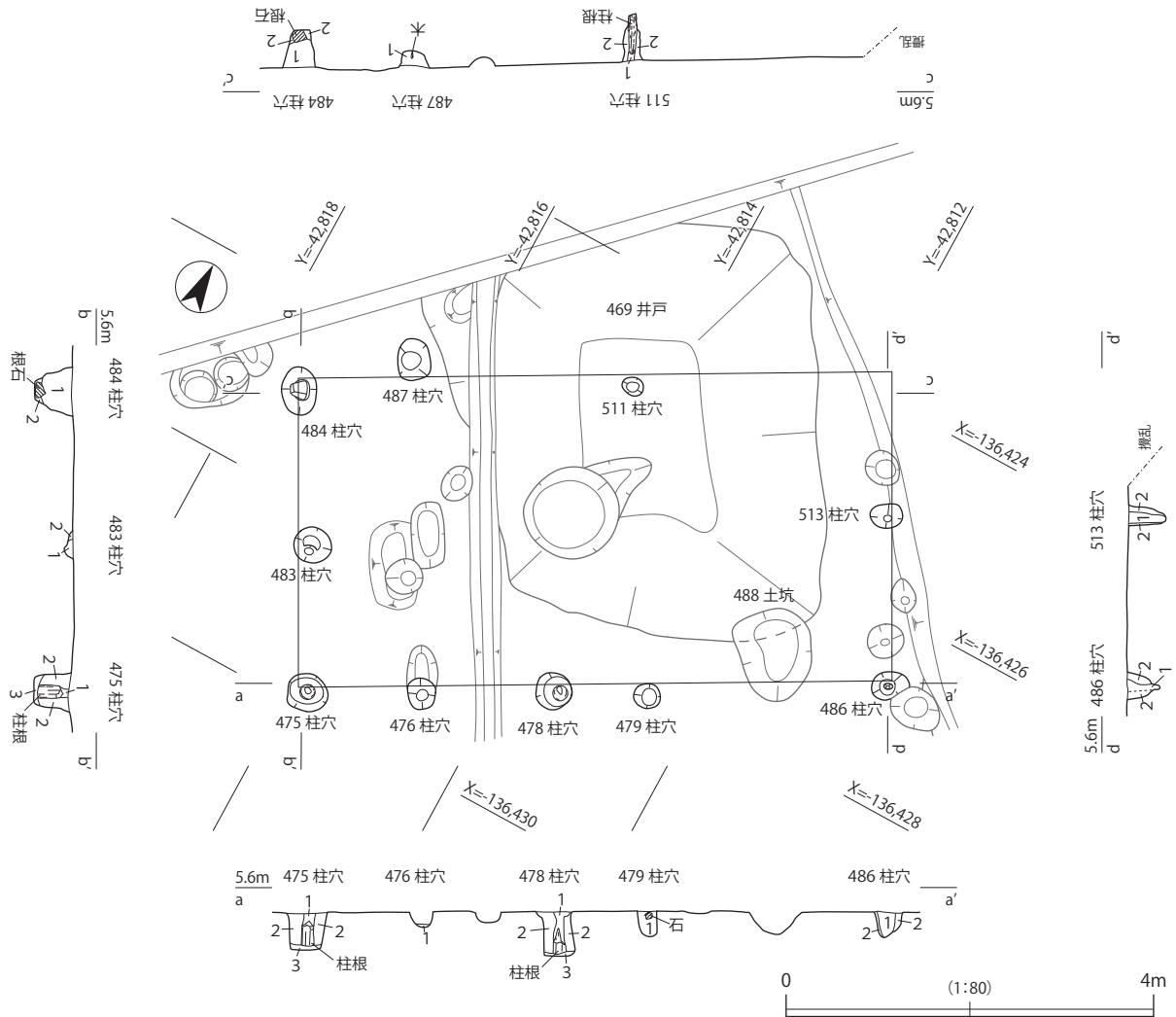
遺物は土師器皿・羽釜・鍋、瓦器碗、須恵器甕、鞆羽口が出土した。いずれも細片で、469・472井戸と比較して遺物量は少ない。瓦器碗260は見込み暗文は平行線状、高台には成形時の歪みがある。時期は12世紀中葉から後葉頃を想定している。

掘立柱建物2（図32・41、図版5）

建物構造は2間×2間の総柱建物、建物規模は3.32m×3.44mである。151・152柱穴は他の柱穴より規模が小さく、後世の削平を受けた場所で確認しており、柱痕部分のみを検出した可能性がある。柱穴の平面形は円形ないし円形に近い形状を呈し、直径0.1～0.3m、深さ0.06～0.24mである。柱穴の遺物は土師器皿、須恵器甕、瓦器碗が出土した。掘立柱建物2の時期は13～14世紀と考えられる。

掘立柱建物4（図32・42、図版5）

建物構造は梁行2間、桁行は4間か。建物規模は梁行3.38m×桁行6.46mである。柱穴の平面形は不整な円形ないし楕円形、長軸0.2～0.5m、深さ0.1～0.5mである。北東側の攪乱を受けた範囲と488



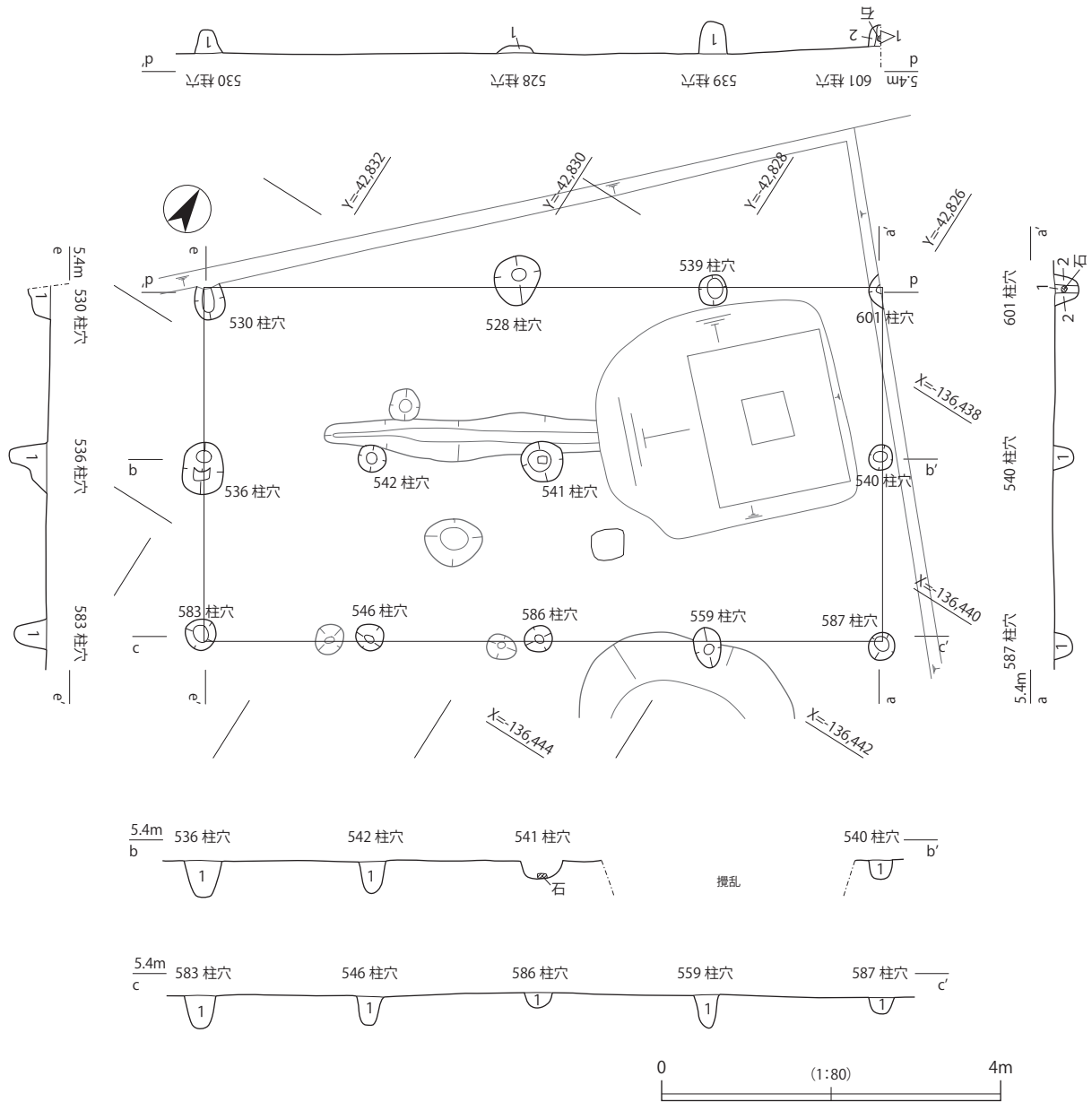
- | | | |
|---|--|--|
| <p>475柱穴
1. 5Y6/1灰 シルト
2. 5Y5/1灰 シルト偽礫 掘方埋土
3. 5Y8/2灰白 シルト偽礫 掘方埋土</p> <p>479柱穴
1. 5Y6/1灰 シルト</p> <p>486柱穴
1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り
2. 5Y7/3浅黄 シルト偽礫 掘方埋土</p> | <p>476柱穴
1. 5Y6/1灰 シルト 掘方埋土</p> <p>483柱穴
1. 2.5Y7/1灰白 細砂質シルト 抜き取り
2. 10Y7/2灰白 シルト偽礫 掘方埋土</p> <p>487柱穴
1. N6/ 灰 シルト</p> | <p>478柱穴
1. 5Y6/1灰 シルト
2. 5Y5/1灰 シルト偽礫 掘方埋土
3. 5Y8/2灰白 シルト偽礫 掘方埋土</p> <p>484柱穴
1. 2.5Y6/1黄灰 シルト偽礫 抜き取り
2. 5Y7/2灰白 シルト偽礫 掘方埋土</p> <p>511柱穴
1. 10YR6/1褐灰 シルト
2. 10Y7/1灰白 シルト偽礫 掘方埋土</p> <p>513柱穴
1. 2.5Y6/1黄灰 シルト 抜き取り
2. 5Y8/4淡黄 シルト偽礫 掘方埋土</p> |
|---|--|--|

図 42 掘立柱建物 4 平・断面

土坑直下では、柱穴は検出されなかった。また、469井戸直上では511柱穴のみ確認できており、調査時に井戸埋土と区別できていなかった可能性がある。遺物は土師器皿・鍋、白色土器皿、須恵器甕、瓦器椀が出土した。掘立柱建物 4 の時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

掘立柱建物 5 (図32・43、図版5)

建物構造は梁行2間×桁行4間、建物規模は梁行4.18m×桁行8.0mである。541・542柱穴は調査時には建物構造に含めていなかったが、536・540柱穴と柱筋が通っており、束柱等になる可能性がある。柱穴の平面形は円形ないし不整な楕円形、径ないし長軸0.3~0.6m、深さ0.1~0.44mである。528・530柱穴間で柱穴は検出されなかった。541柱穴のみ底面で根石を検出した。遺物は土師器皿、須恵器鉢(東幡系)・甕、瓦器椀、白磁碗が出土した。掘立柱建物 5 の時期は13世紀中葉から後葉頃と考えられる。



528柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	530柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	536柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取り	539柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取り
540柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取り	542柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	546柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	559柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか
583柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取り	586柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	587柱穴 1. 5Y8/3淡黄 シルト 抜き取りか	601柱穴 1. 10Y6/1灰 シルト 抜き取り 2. 5Y8/3淡黄 シルト 裏込め

図43 掘立柱建物5平・断面

524土坑 (図32・44、図版6)

平面形は不整形、長軸4.48m、短軸0.97m、深さ0.15mである。北側と南側は切り合い関係がなく、埋土が連続することを確認している。遺物は土師器皿・羽釜・鍋、白色土器皿、黒色土器椀（A類）、須恵器鉢（東幡系）・甕、瓦器椀・皿、白磁碗、カマド片、砥石、種子（桃）が出土した。砥石は図示していないが白色を呈し、158土坑から出土した砥石11と岩質が同じものが出土している。瓦器椀277は見込みに暗文を施文した後、体部内面のミガキを施しており、他の瓦器椀と施文・調整の順番が異なる。524土坑の時期は13世紀前葉から中葉頃と考えられる。

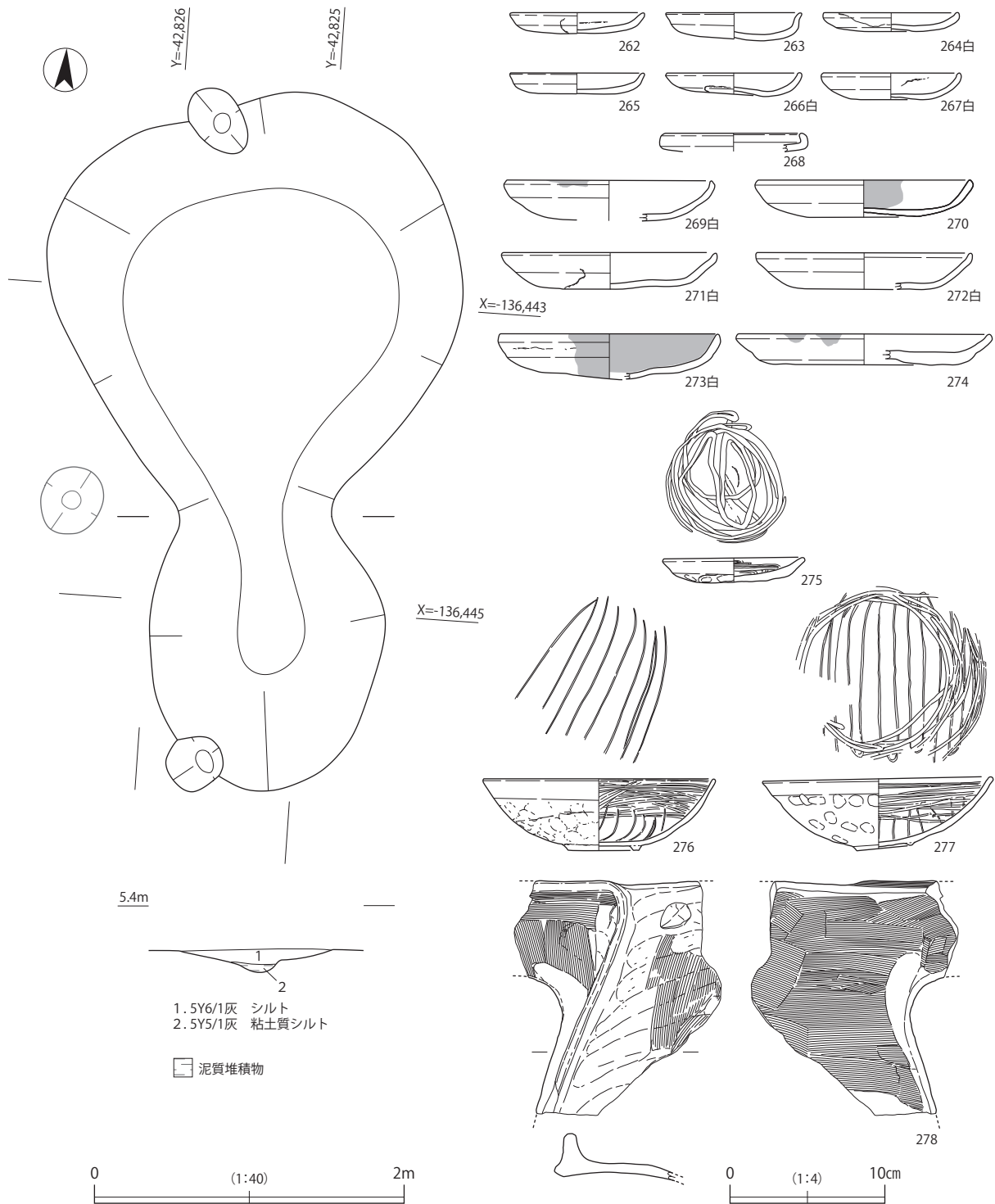


図44 524土坑平・断面、出土遺物

471土坑 (図32・45、図版6)

平面形は不整な楕円形、長軸0.62m、短軸0.5m、深さ0.12m、埋土はシルトである。底面直上から遺物が多量に出土した。

遺物は土師器皿、須恵器鉢（東幡系）、瓦器碗・羽釜が出土した。瓦器羽釜281は三足が付くもので、今回出土した三足が付く羽釜としては最も遺存状態が良好なものである。471土坑の時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

488土坑（図32・45、図版3）

平面形は不整形、長軸0.95m、短軸0.72m、深さ0.23mである。469井戸と切り合い関係があり、488土坑が新しい。埋土は上層がシルト偽礫、下層が粘土質シルトである。

遺物は土師器皿・鍋・羽釜か鍋の体部片、瓦器碗が出土した。瓦器碗287は、外面に疎略なミガキが施される。488土坑の時期は13世紀前葉頃と考えられる。

503柱穴（図32・45）

平面形は楕円形、長軸0.43m、短軸0.32m、深さ0.47mである。柱根が残存する。柱根は直径12cm、長さ30cm以上である。遺物は土師器皿・羽釜か鍋体部片、白色土器皿、瓦器碗が出土した。503

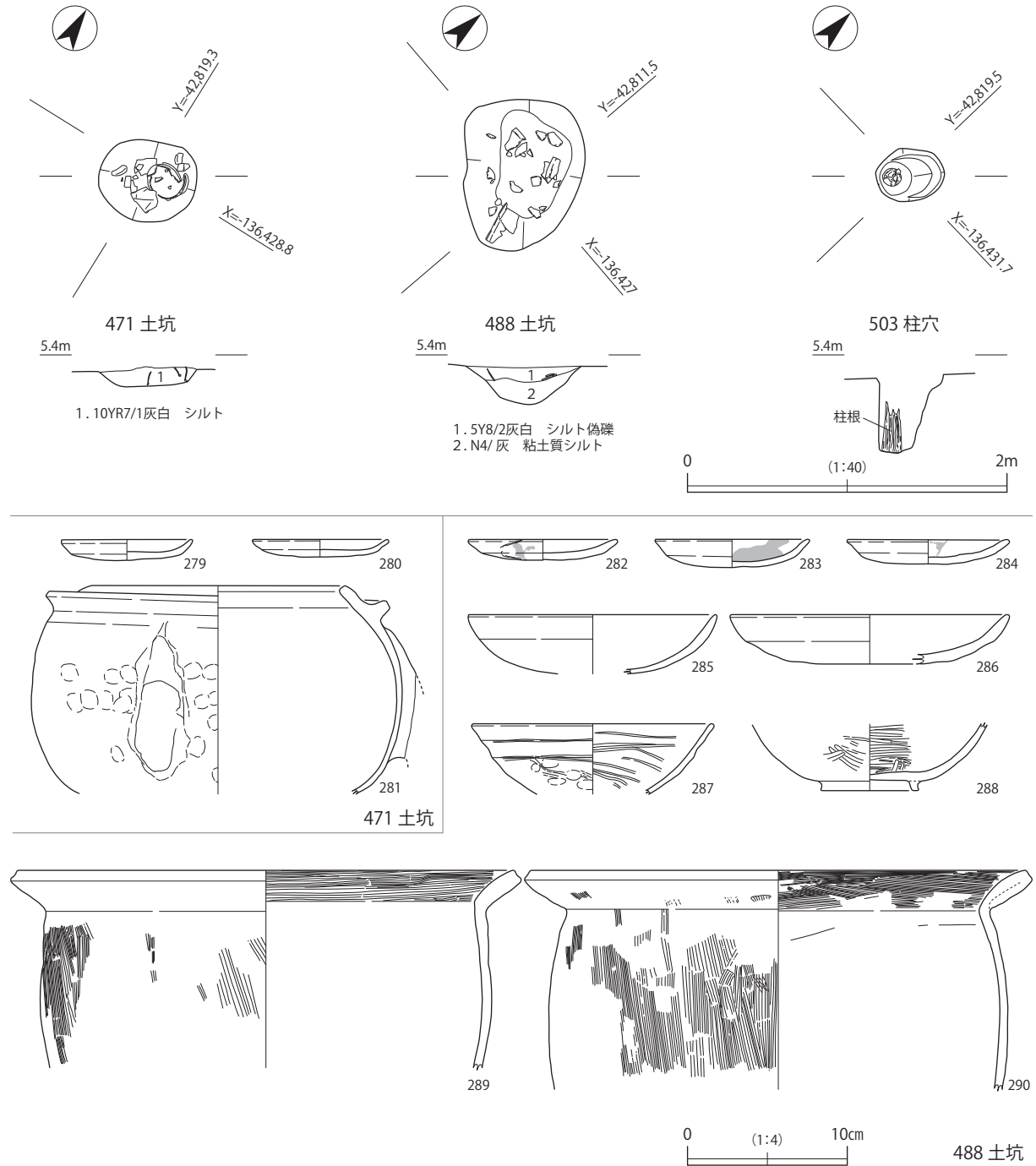


図45 471土坑他平・断面、出土遺物

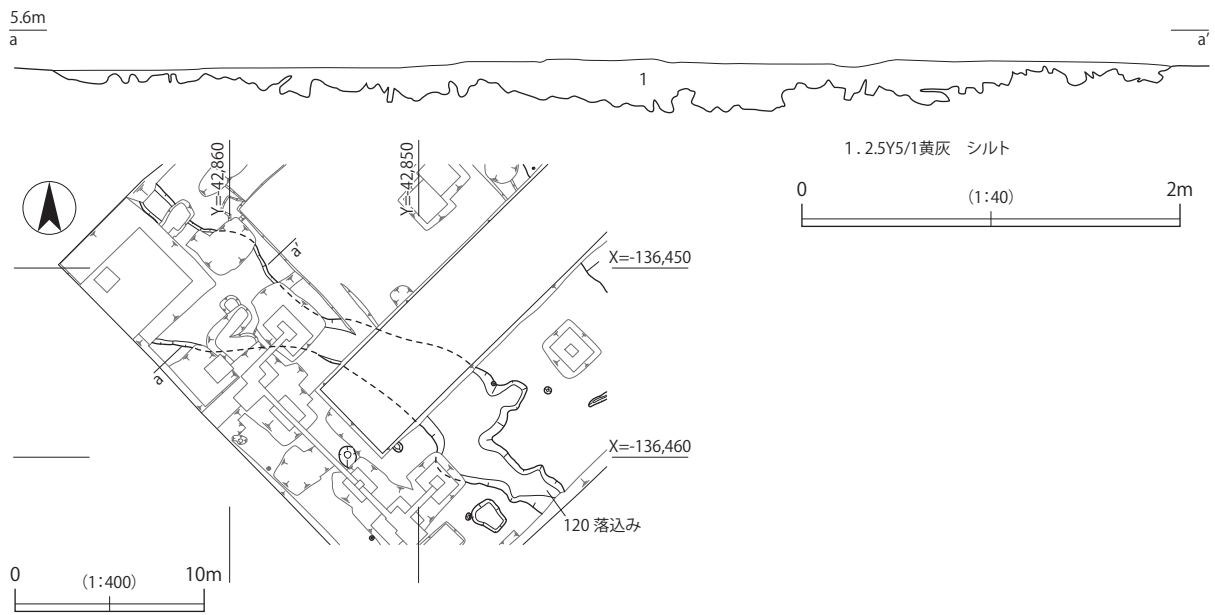


図46 120 落込み平・断面

柱穴の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

120落込み (図32・46)

幅1.5～7.1m、深さ0.09～0.26m、埋土はシルトである。埋土と基盤層の層境は凹凸が顕著で変形する。溝の平面形は不明確で、浅い谷状の地形の一部であった可能性がある。遺物は、土師器皿・鍋、白色土器皿、黒色土器（A類）、須恵器鉢（東幡系）、甕、瓦器椀が出土した。微細な破片のみ出土している。120落込みの時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

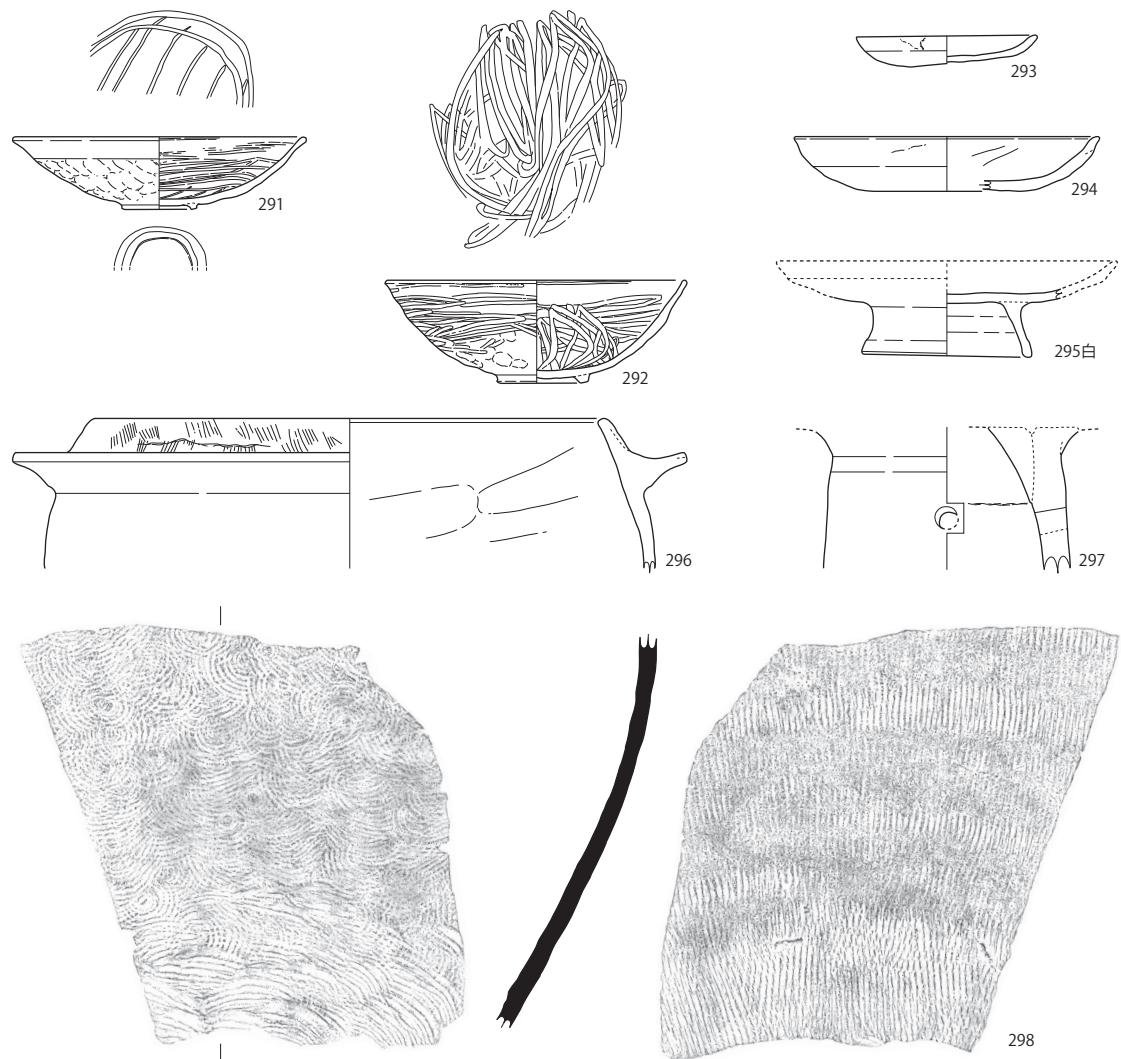
その他の遺構① (161溝、68・236・448・491土坑、268・348・449・466柱穴)

161溝は幅0.66m、深さ0.25m、埋土は上層が粘土質シルト、下層がシルトである (図8)。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀・羽釜 (三足が付く)、灰釉碗、青磁碗が出土した。瓦器椀291は見込み暗文は平行線状、高台は下からみて歪みのある円形を呈する (図47)。161溝の時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

68土坑は、平面形は楕円形、長軸0.3m、短軸0.27m、深さ0.17m、埋土はシルトである (図7)。遺物は瓦器椀が出土した。瓦器椀は2点が底面に重なった状態で出土した (図47)。瓦器椀292の見込み暗文は粗雑なジグザグ状、摩滅により明確ではないが、外面ミガキの分割性は失われているものと考えられる。68土坑の時期は12世紀前葉から中葉頃と考えられる。393土坑 (図28) と時期は異なるが、地鎮等に関係する可能性がある。

236土坑は現代に攪乱を受けており全容は不明 (図16)。検出した範囲で不整形、長軸0.6m、短軸0.26m、深さ0.54m、埋土はシルト偽礫である。遺物は土師器皿・羽釜・鍋、白色土器台付皿、瓦器椀、焼土塊、陶棺片が出土した。焼土塊は平坦な面を持ち、厚さ4.0cm、壁土の可能性のあるものが出土している。白色土器台付皿295は接合しなかったが、同一個体と考えられる口縁部をもとに復元的に図示した。236土坑の時期は12世紀後葉頃と考えられる。

448土坑は南西側と南東側が攪乱を受けており、全容は不明である (図24)。平面形は不整形、長軸1.0m、短軸0.86m、深さ0.25m、埋土は極細砂質シルトである。遺物は須恵器甕が出土した。須恵



291:161溝 292:68土坑 293~297:236土坑 298:448土坑

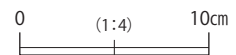


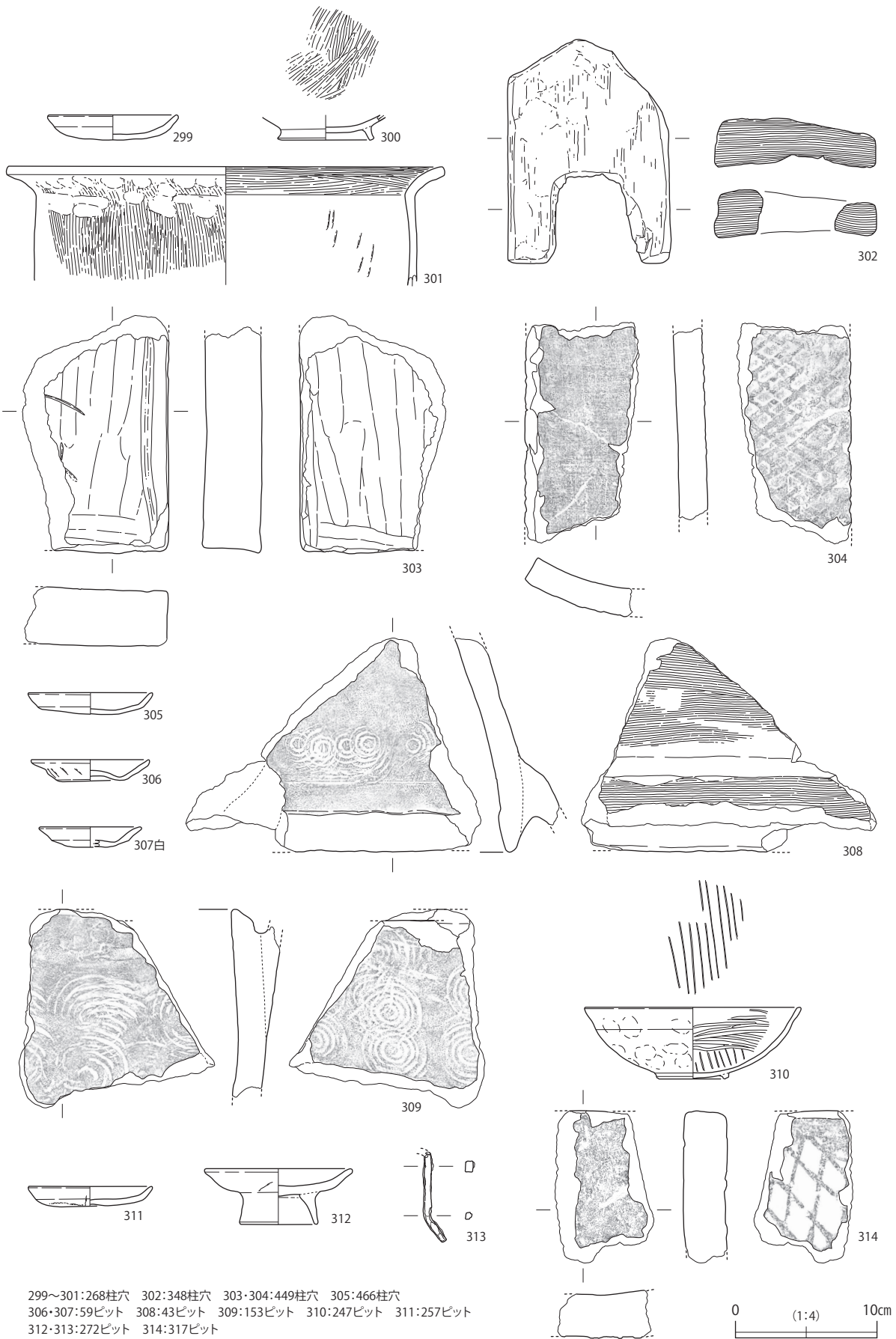
図47 161溝他出土遺物

器甕298は体部片で、外面は平行タタキ、内面は同心円文当具痕が残る（図47）。時期は11世紀後葉から12世紀前葉頃のものか。

491土坑は、平面形は楕円形、長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.25m、埋土は上層がシルト、下層が極細砂質シルトである（図32）。遺物は土師器皿・鍋が出土した。土師器皿317は外底面に糸切痕が残り、成形時に回転台を使用したものである（図49）。491土坑の時期は11世紀後葉頃と考えられる。

268柱穴は、平面形は円形、直径0.6m、深さ0.4m、埋土はシルトである（図16）。272ピットと切り合い関係があり、268柱穴の方が新しい。268柱穴では柱抜き取り痕を確認した。遺物は土師器皿・鍋、瓦器碗が出土した。土師器皿299は細片を図化、低平で器壁は厚い（図48）。瓦器碗300は、高台がハの字形に開くシャープな形状のもので、11世紀後葉から12世紀前葉頃のものと考えられる（図48）。

348柱穴は、平面形は不整な楕円形、長軸0.36m、短軸0.33m、深さ0.26m、埋土はシルトである（図24）。底面では礎板302を用いる（図48、図版7）。453柱穴（図30）の礎板と形状は同じである。遺物は土師器皿が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。



299~301:268柱穴 302:348柱穴 303-304:449柱穴 305:466柱穴
 306-307:59ピット 308:43ピット 309:153ピット 310:247ピット 311:257ピット
 312-313:272ピット 314:317ピット

図 48 268 柱穴他出土遺物

466柱穴は、平面形は隅丸長方形、長軸0.52m、短軸0.44m、深さ0.13m、埋土はシルトである（図24）。遺物は完形に近い土師器皿305が出土しており、時期は13世紀頃か（図48）。

449柱穴は、平面形は円形、直径0.3m、深さ0.21m、埋土はシルト偽礫である（図24）。柱抜き取り痕を確認しており、底面で柱基礎として使用した埴303を検出した（図48）。遺物は埴の他に凸面に斜格子タタキを施した平瓦304が出土している（図48）。

その他の遺構②（43・59・153・247・257・272・317・358・378・413・451・458・494・505・576ピット・288溜池）

43ピットは、平面形は円形、直径0.3m、深さ0.22m、埋土はシルトである（図8）。遺物は土師器体部片、陶棺片が出土した。陶棺蓋308は外面ハケ調整、内面には同心円文当具痕が残る（図48）。

59ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.25m、短軸0.23m、深さ0.12m、埋土はシルトである（図8）。遺物は土師器皿、須恵器甕が出土した。土師器皿306・白色土器307はへそ皿である（図48）。土師器皿306は口縁部外面に指押え時に付いた爪痕が残る。

153ピットは、平面形は円形、直径0.27m、深さ0.05m、埋土はシルトである（図8）。遺物は土師器皿・鍋、陶棺片が出土した。陶棺の棺身309は内外面に同心円文当具痕が残る（図48）。

247ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.35m、短軸0.22m、深さ0.38m、埋土はシルトである（図16）。遺物は瓦器椀が出土した。瓦器椀310の見込み暗文は平行線状、時期は13世紀中葉から後葉頃と考えられる（図48）。

257ピットは、平面形は円形、直径0.3m、深さ0.15m、埋土はシルトである（図16）。遺物は土師器皿が出土した。土師器皿311は全体に摩滅顕著、時期は13世紀以降と考えられる（図48）。

272ピットは、平面形は不整な円形、直径0.3m、深さ0.15m、埋土はシルトである（図16）。遺物は土師器皿・台付皿、瓦器椀、折釘が出土した。土師器台付皿312は今回出土した台付皿の中では器高が最も低いもので、赤色系の胎土である（図48）。折釘313は上端が欠損し、下側は曲がっている（図48）。272ピットの時期は13世紀代と考えられる。

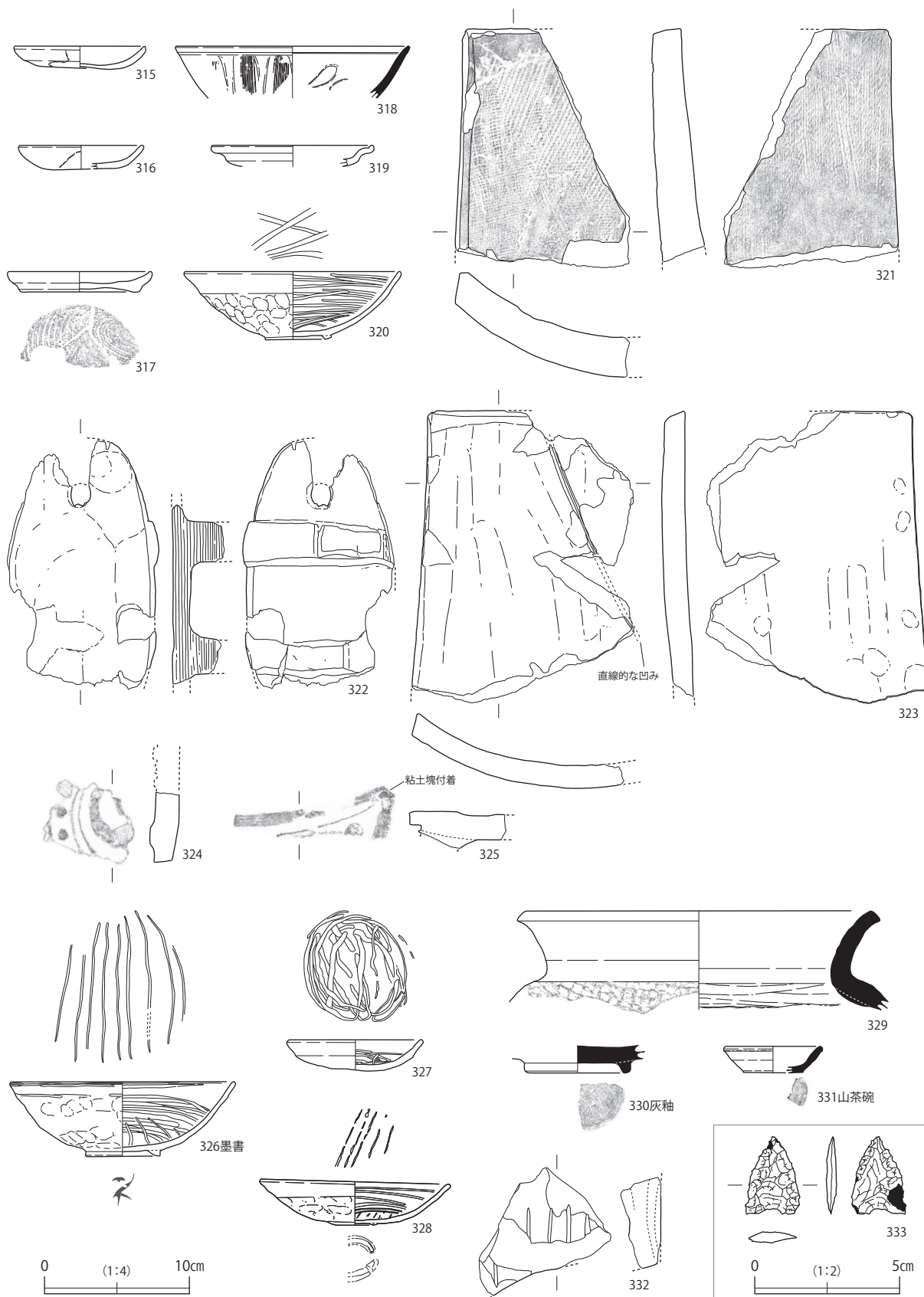
317ピットは、平面形は不整な円形、直径0.3m、深さ0.23m、埋土はシルトである（図7）。遺物は土師器皿・鍋、平瓦が出土した。平瓦314は凸面に斜格子タタキを施す（図48）。

358ピットは、平面形は不整形、長軸0.3m、短軸0.28m、埋土はシルトである（図24）。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。土師器皿315は完形品で、粘土接合痕が明瞭に残る（図49）。358ピットの時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

378ピットは、平面形は不整形、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.51m、埋土はシルトである（図24）。遺物は土師器皿、瓦器椀、青磁碗が出土した。青磁碗318は櫛目をういて蓮弁文を表現する（図49）。378ピットの時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

413ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.4m、短軸0.26m、深さ0.27m、埋土はシルトである（図24）。遺物は土師器皿・羽釜か鍋の体部片、瓦器椀が出土した。土師器皿316は内外面が摩滅しており、調整は不明（図49）。胎土は白色味を帯びる。413ピットの時期は13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。

451ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.4m、短軸0.35m、深さ0.29m、埋土はシルトである（図24）。遺物は瓦器椀、平瓦が出土した。平瓦321は凸面縄タタキ、内面の布目痕にはほつれが認められる（図49）。



315:358ピット 316:413ピット 317:491土坑 318:378ピット 319:458ピット 320:494ピット 321:451ピット 322:505ピット 323:576ピット
 324・325:288溜池 326・327・330:側溝 328・329・331・332・333:第1層

図 49 358ピット他出土遺物

458ピットは、平面形は不整な円形、直径0.4m、深さ0.11m、埋土はシルトである（図16）。遺物はての字形皿319が出土している。458ピットの時期は11世紀後葉から12世紀前葉頃と考えられる（図49）。

494ピットは、平面形は不整な円形、直径0.4～0.46m、深さ0.42m、埋土はシルトである（図24）。遺物は土師器皿、須恵器鉢（東幡系）、瓦器椀、陶棺片が出土した。瓦器椀320の見込み暗文は直線状のミガキを交差させて表現する（図49）。494ピットの時期は13世紀前葉頃と考えられる

505ピットは、平面形は円形、直径0.25m、深さ0.24m、埋土はシルトである（図24）。遺物は瓦器椀、木製品が出土した。木製品は下駄322が出土しており、前穴側をピット底面に向けた状態で出土した（図49、図版7）。322は全体に腐朽が著しいが、拇趾の圧痕と考えられる凹みが認められる。瓦器椀は楠葉型で、時期は12世紀頃のもの出土している。

576ピットは、平面形は不整な楕円形、長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.36m、埋土はシルトである（図24）。遺物は平瓦が出土した。平瓦323は凹凸面に縦方向のナデを施す（図49）。凹面側に焼成前に入れられた直線状の凹みがあり、隅切瓦等への加工を前提にした分割線の可能性がある。平瓦の時期は中世前半のものである。

288溜池は311井戸や307土坑等、中世の遺構が密集した範囲で検出した近世の溜池である（図7）。埋土から軒丸瓦324や軒平瓦325が出土した（図49、図版8）。軒丸瓦324の瓦当文様は左巻きの巴文、頭部は大半を欠損しているが、残存する部分で丸い。外区に圈線を伴う。尾部は細長く表現されており、圈線に接触している可能性が高い。時期は13世紀前葉から中葉頃と考えられる。軒平瓦325の瓦当文様は連珠文、顎形態は段顎。71溝から出土した軒平瓦108（図15）と同様、外区（右上）に粘土塊を貼り付ける。側縁の外区の幅は狭い。時期は13世紀代のものと考えられる。

側溝・第1層出土遺物（図49）

側溝出土遺物には瓦器椀326、瓦器皿327、灰釉碗330がある。いずれも北西部の調査区の側溝掘削時に出土した。瓦器椀326と瓦器皿327は側溝内にあった遺構に帰属する遺物である。326には判読不明の墨書があり、記号等を表現しているものと考えられる。時期は13世紀後葉頃と考えられる。灰釉碗330は内底面が平滑で煤が付着しており、硯に転用された可能性がある。1溝周辺の側溝掘削時に出土した。

第1層出土遺物には瓦器椀328、須恵器甕329、山茶碗皿331、軒端飾瓦332、石鏝333がある。瓦器椀328は見込み暗文が平行線状、高台は一周せず途切れている。時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。須恵器甕329は外面格子タタキ、内面ヨコナデを施す。時期は12～13世紀頃のものか。山茶碗皿331は外底面に糸切痕が残り、内面と口縁端部外面には釉が付着する。内面の釉層は分厚い。12世紀後葉以降のものと考えられる。棟端飾瓦332は文様がへら描き沈線で表現される。時期は18世紀以前と考えられる。石鏝333はサヌカイト製で側縁に微細な剥離が認められる。

第5章 総括

今回の発掘調査では、主として11世紀後葉から14世紀前葉の遺構と遺物を確認した。遺構は溝、井戸、掘立柱建物、土坑、柱穴等を検出しており、居住域として土地利用されていたと考えられる。溝や井戸を中心とした遺構の平面的な分布状況はこの地に住んだ人々の生活のまとまりを示しており、溝、井戸、掘立柱建物は屋敷地を構成する遺構と考えている。以下では、11世紀後葉から14世紀前葉を中心とした出土遺物と遺構の変遷をまとめ、最後に中世以外の各調査成果について触れる。^(註1)

1. 11世紀後葉から14世紀前葉を中心とした出土遺物と遺構の変遷

(1) 出土遺物

a：土師器

土師器皿の出土量は、12世紀から13世紀前葉のものが多く、以降、14世紀前葉にかけて遺物量は徐々に減少する。外底面に糸切痕があり、回転台を使用した土師器は計3点出土した（点数は破片数、以下同じ）。7溝から出土した皿31・灯明皿に転用した39、491土坑から出土した皿317が該当し、他に摩滅した細片で明確ではないが469井戸上層から1点出土した。今回の調査区に近接する西の庄東遺跡で検出された21土坑は469井戸の瓦器椀より古い様相を示すものが出土した土坑で、糸切痕のある土師器皿が4点出土している。また、煮沸具として、羽釜は12世紀後葉から13世紀前葉の井戸・土坑、鍋は11世紀後葉から13世紀前葉の溝・井戸を中心に出土した。

b：白色土器

白色土器は、口縁端部が先細りするか外面側に面をもつ皿やへそ皿、台付皿が出土した。白色土器皿240のみ赤色系の土師器皿に近い形状で、それ以外は器形が在地産のものと異なる。赤色系と区別つかないものは遺物観察表で胎土が白色を呈することを記載した。胎土は精良なものと2mm以下の砂粒を含むものがある。砂粒を含むものは図示した44点中12点である。砂粒を多量と少量含むものがあり、少量のものは粒径の比較的大きいもの（粗砂から極粗砂）を含むものが多い。砂粒を含むものの傾向として焼成不良で断面が暗色を帯びるものも多く、胎土は瓦器椀、瓦器羽釜に共通するものがある。

c：須恵器

皿・鉢・甕が出土した。東幡系のものが多く、一部の鉢を除いて細片である。甕は、平行タタキを施すものと格子タタキを施すものがあり、平行タタキを施すものの割合が高い。格子タタキを施すものには亀山焼の可能性のあるものが含まれる。

d：瓦器

瓦器は椀・皿・羽釜・鍋の他、甕体部片と考えられるものが出土した。瓦器椀は11世紀後葉から14世紀前葉に位置付けられるものが出土した。皿はすべて和泉型で12世紀から13世紀前葉（一部13世紀中葉まで下がるか）を中心としたものが13点出土した。

羽釜は三足が付くタイプのものが13世紀代の井戸・土坑等を中心に出土した。12世紀以前の井戸等の遺構からは土師器鍋、12世紀後葉から13世紀前葉の井戸等の遺構から土師器羽釜が出土しており、時期の区分は明確ではないが、各時期に主として使用される煮沸具が異なっている。鍋は全体で2点出土しており、469井戸から出土した鍋206の他、7溝直上と118溝の近世埋土からそれぞれ1点出土した。口縁部有段の羽釜は9点出土した。14世紀前葉以降に積極的に採用されたと考えられる。

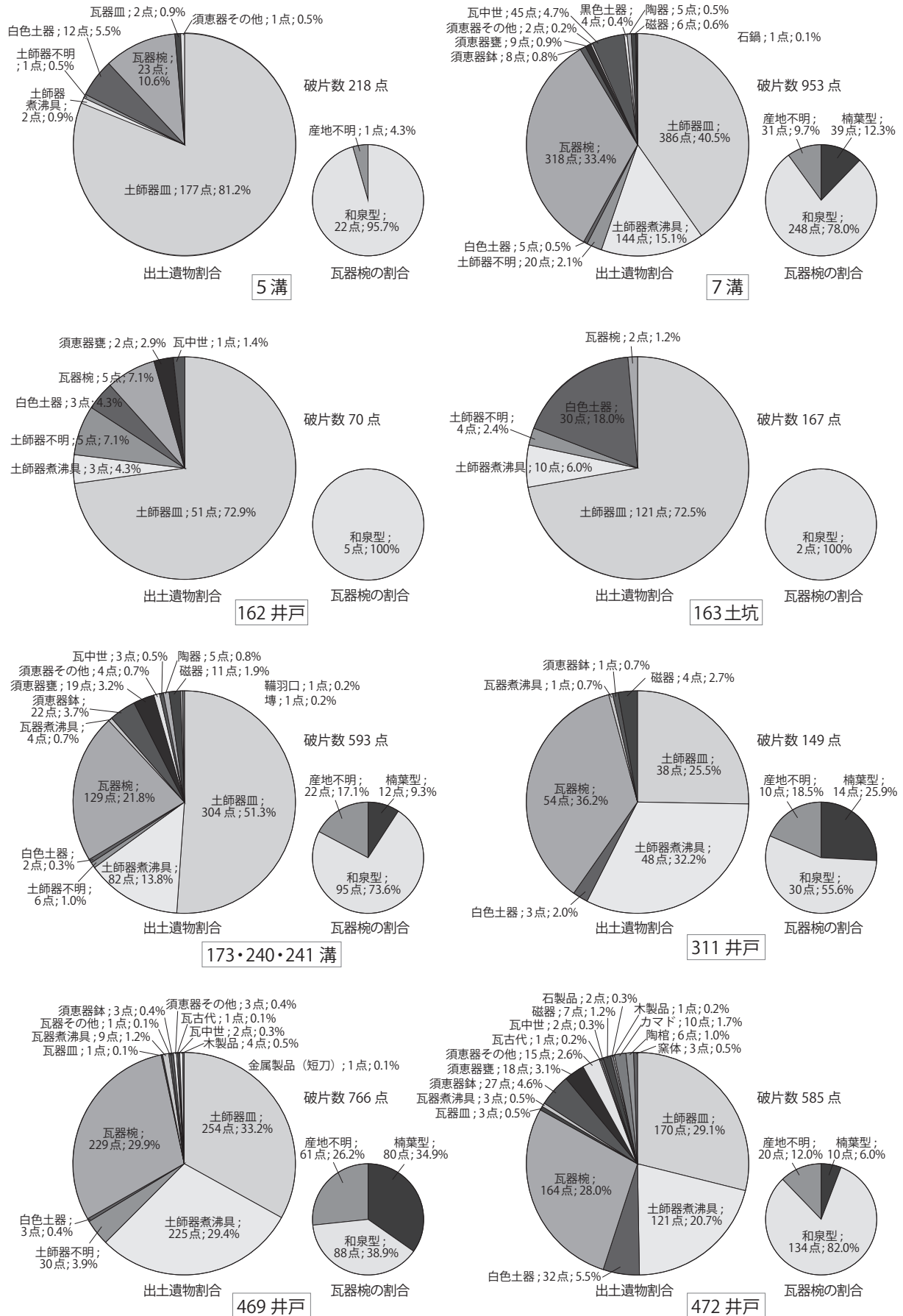


図 50 出土遺物割合

e：黒色土器

A類（内黒）6点、B類（両黒）8点が溝・土坑・柱穴・ピットから出土した。遺構埋土に混じるような状況で出土しており、少数である。細片で摩滅しており、全体の形状が分かるものは無かった。

f：灰釉陶器・山茶碗

灰釉碗5点が出土した。11世紀以降に搬入されたものと考えられる。161溝から出土した灰釉碗1点は端反の口縁部だが、共伴した遺物により15世紀以降のものとは現状では考えていない。山茶碗皿（山皿）、東海産と考えられるすり鉢が、それぞれ1点ずつ第1層から出土した。

g：陶器

14世紀前葉以前の遺構では常滑焼壺・甕・（鉢）、古瀬戸卸皿が出土した。陶器は常滑焼甕が過半を占める。

h：磁器

青磁碗17点・皿1点、白磁碗40点・皿5点・四耳壺4点が出土した。青磁と白磁は色調が退色したものが多く、釉掛が粗雑なものや表面に小穴のあるものが含まれる。11世紀後葉から14世紀前半頃に位置付けられるものが出土した。これ以外に中世後半以降の白磁碗（端反のもの）が近世作土の第1層から出土しているが、少数である。

i：瓦

中世前半の瓦は124点出土した。軒丸瓦は蓮華文と巴文、軒平瓦は唐草文と連珠文が1点ずつ出土した。丸瓦は44点、平瓦は78点、不明のもの2点が出土した。丸瓦は玉縁式のもものが8点、凸面に縄タタキを施すものが4点出土した。平瓦は凸面ナデないし離砂が付着するもの55点、凸面斜格子タタキ15点、凸面ハケ4点、凸面ケズリ1点が出土した。ハケ、ケズリは端面や側縁際の部分的な調整の可能性がある。329土坑出土の瓦には煤が付着したものが多く、瓦葺きの建物で火災があった可能性が想定される。出土した瓦は少量で、瓦は一部の建物に限定的に使用していたと考えられる。

j：鍛冶関連遺物

坩堝116、鞆羽口261、鉦滓112が出土した他、鉄製品の仕上げ砥の可能性のある砥石254、金床石の可能性のある台石233が出土した。鉦滓は112以外に357ピット（図24）と第1層から出土しており、全体で34.6gになる。357ピットと第1層から出土した鉦滓は、滓質が緻密、磁着度が無く、細片である。鍛冶関連遺物が出土した遺構は11世紀後葉から14世紀前葉まで時期幅があり、小規模な鍛冶が継続的に行われていた可能性を想定している。

（2）出土遺物割合（図50）

遺物が一定量出土した遺構の出土遺物の構成比を出土点数で検討した。個別遺構の検討であることや破片数を主としたカウントであるため、本遺跡全体の性格を示さないが、以下のとおりの傾向が認められた。土師器皿は5溝、162井戸、163土坑で割合が高い。163土坑は白色土器も高い割合で出土しており、台付皿の出土点数が多い。土師器皿と白色土器皿・台付皿の出土量の割合が他の遺構と比較して高い割合である。162井戸から出土した土師器皿には共伴する瓦器碗より古い様相を示すものが含まれるが、それらの内163土坑から出土した土師器皿と接合するものも複数あり、163土坑の土師器皿が高い割合で混入していることを想定している。5溝は調査区内で部分的な検出に留まっており、集計上の偏りが出ている可能性がある。311・469・472井戸の出土遺物の割合は、土師器皿、土師器煮沸具、瓦器碗の割合がそれぞれ30%前後の値になっており、時期が異なっても大きな差異は見出せない。

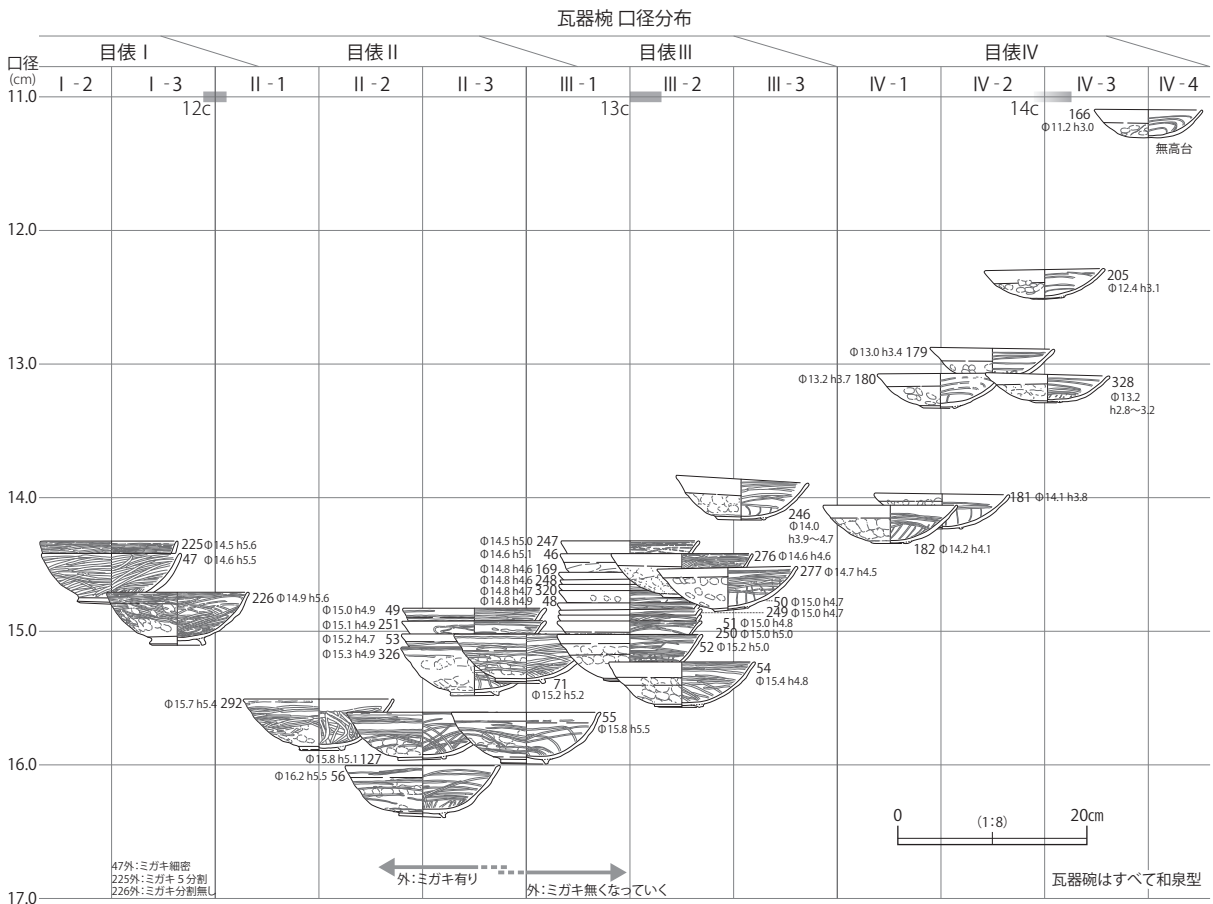
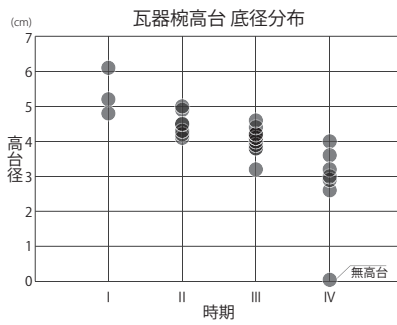
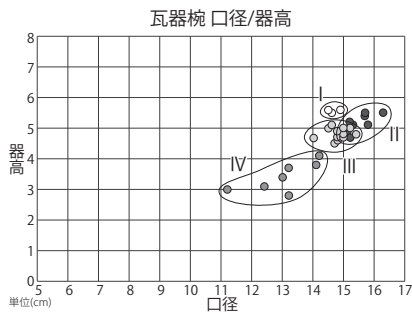
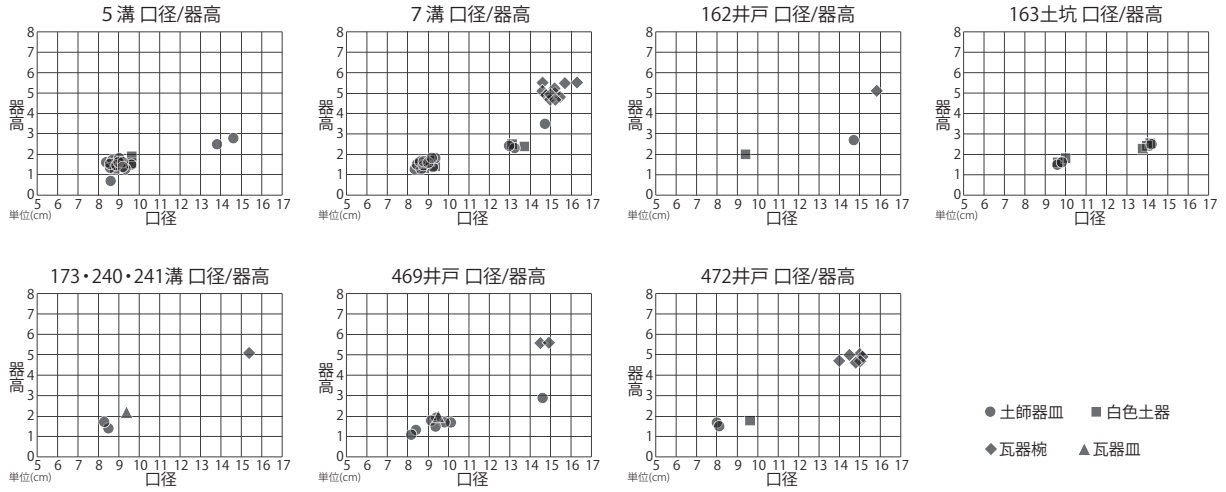


図 51 土器法量分布

瓦器碗は和泉型、楠葉型の割合について検討した（図50、掲載遺物の各型は遺物観察表参照）。細片や摩滅により同定できないものは産地不明とした。大和型は抽出されなかった。469井戸では和泉型と楠葉型の割合が拮抗しているが、472井戸では和泉型が過半を占めており、12世紀から13世紀にかけて和泉型が主流となっている。173・240・241溝の楠葉型瓦器碗の割合は12世紀代のものが多数だが、13世紀以降のものも少量含まれており、楠葉からの瓦器碗の流入が途絶えてしまった訳ではないと考えている。5溝では胎土に雲母が多量に混じる瓦器碗の細片1点（未掲載）が出土しており、産地は不明だが和泉や楠葉以外の地域で生産された瓦器碗と考えている。

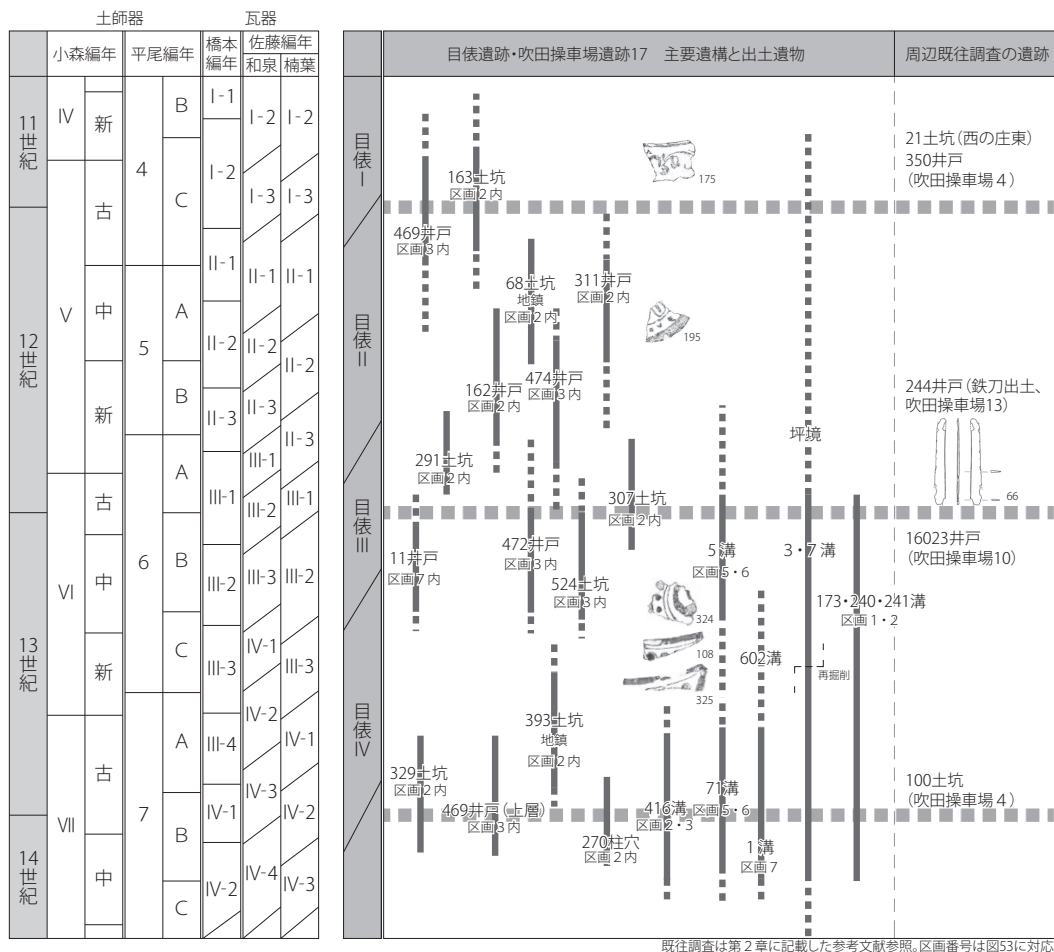
（3）法量分布（図51）

土師器皿、白色土器、瓦器碗・皿の口径と器高の分布図は、口径の残存率50%を基準に抽出し、本遺跡の遺物の時期を検討する目安とした。土師器皿の内、皿（小）は口径の縮小と器高の減少が有意な差として看取できる。一方、皿（大）は抽出した個体数が少ないものの、163土坑と5・7溝の法量分布から、口径の大きさを示す領域が12世紀から13世紀にかけて広がる傾向を示す。

瓦器碗の法量分布はⅠ型式からⅡ型式にかけて口径は縮小し、器高は低平化する。Ⅱ型式からⅢ型式は領域が重なるが、Ⅲ型式からⅣ型式は領域が離れており、瓦器碗の抽出に偏りが生じてしまっている可能性がある。

なお、口径と器高の数値的にⅢ型式とⅣ型式の間を埋める、50%以上残存する瓦器碗は今回の調査では出土していない。

表3 遺構と土器変遷



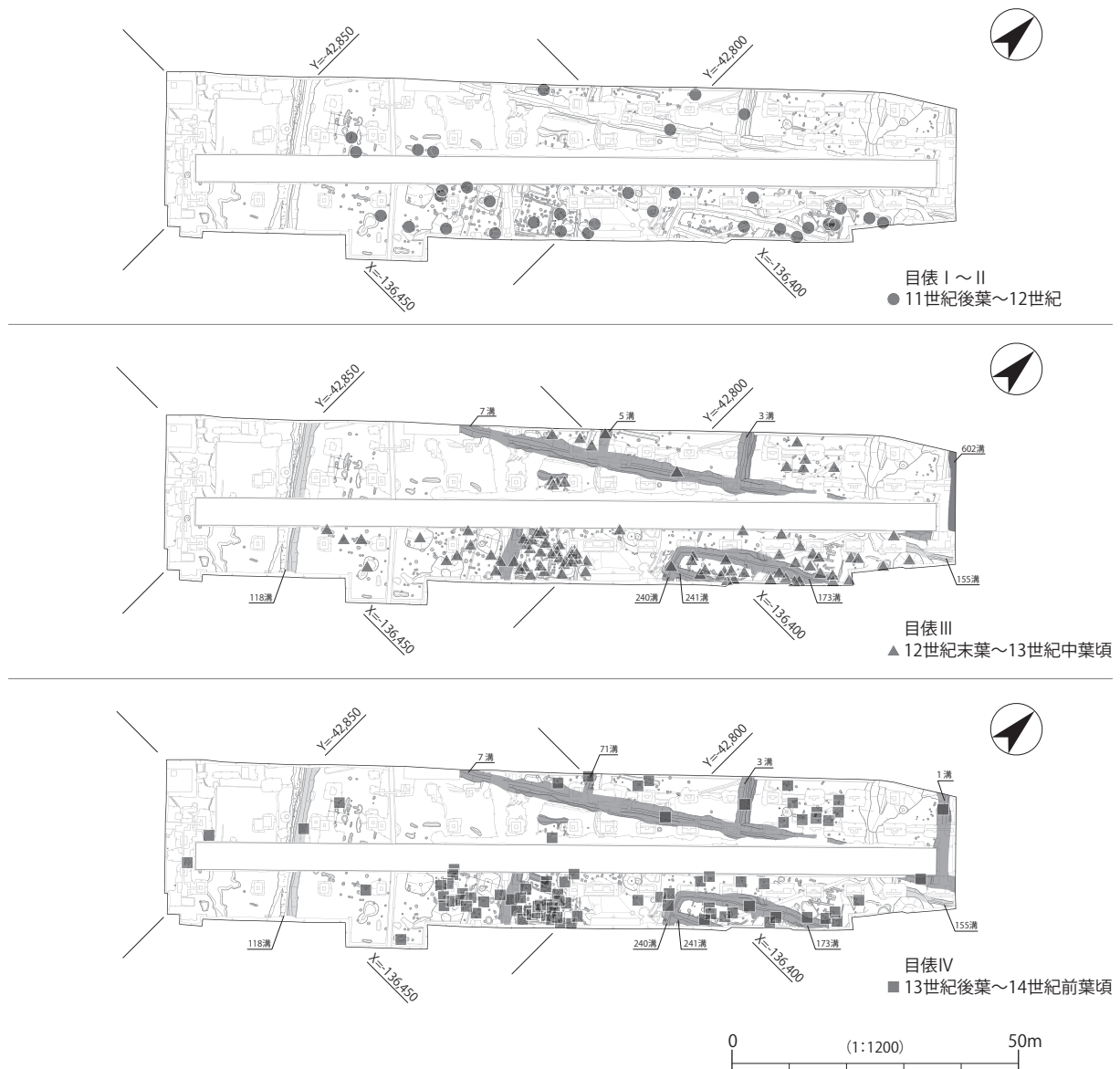


図 52 遺構変遷

(4) 遺構の変遷 (図52・53、表3)

今回の発掘調査で検出した主要遺構と出土遺物を時期別に分けて表3にまとめた。また、主として土坑、柱穴、ピットについて出土遺物の時期を判断して図52に示した。屋敷地の溝は中世と近世の溝を重ね合わせて、模式的に図53で示した。

溝は各溝から11～12世紀中葉までの遺物が出土しているが、確実に機能していたと考えられる時期は、12世紀末葉から13世紀前葉以降を想定している。173溝でV字形に溝が開削される時期は出土遺物が無いため特定しえなかったが、他の遺構との切り合い関係等から12世紀中葉以前に遡ることは現状で想定していない。溝の掘り直しは1・602溝、5・71溝、7溝で行われているが、掘り直しの時期はそれぞれ異なる時期になる可能性が高いと考えている。

また、溝が廃絶される時期は出土遺物から13世紀末葉から14世紀前葉を想定している。14世紀中葉以降の遺物は中世後半以降の作土や近世の溝等から微量出土しており、溝の廃絶が14世紀中葉まで下ることはないと考えている。

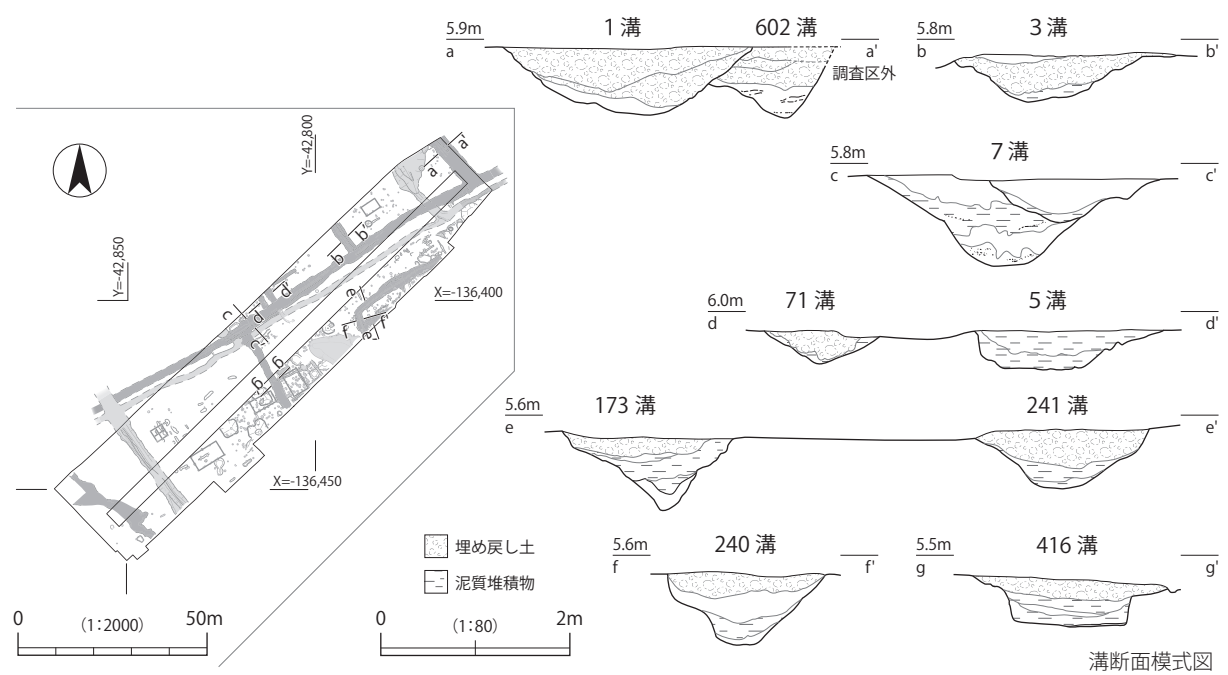
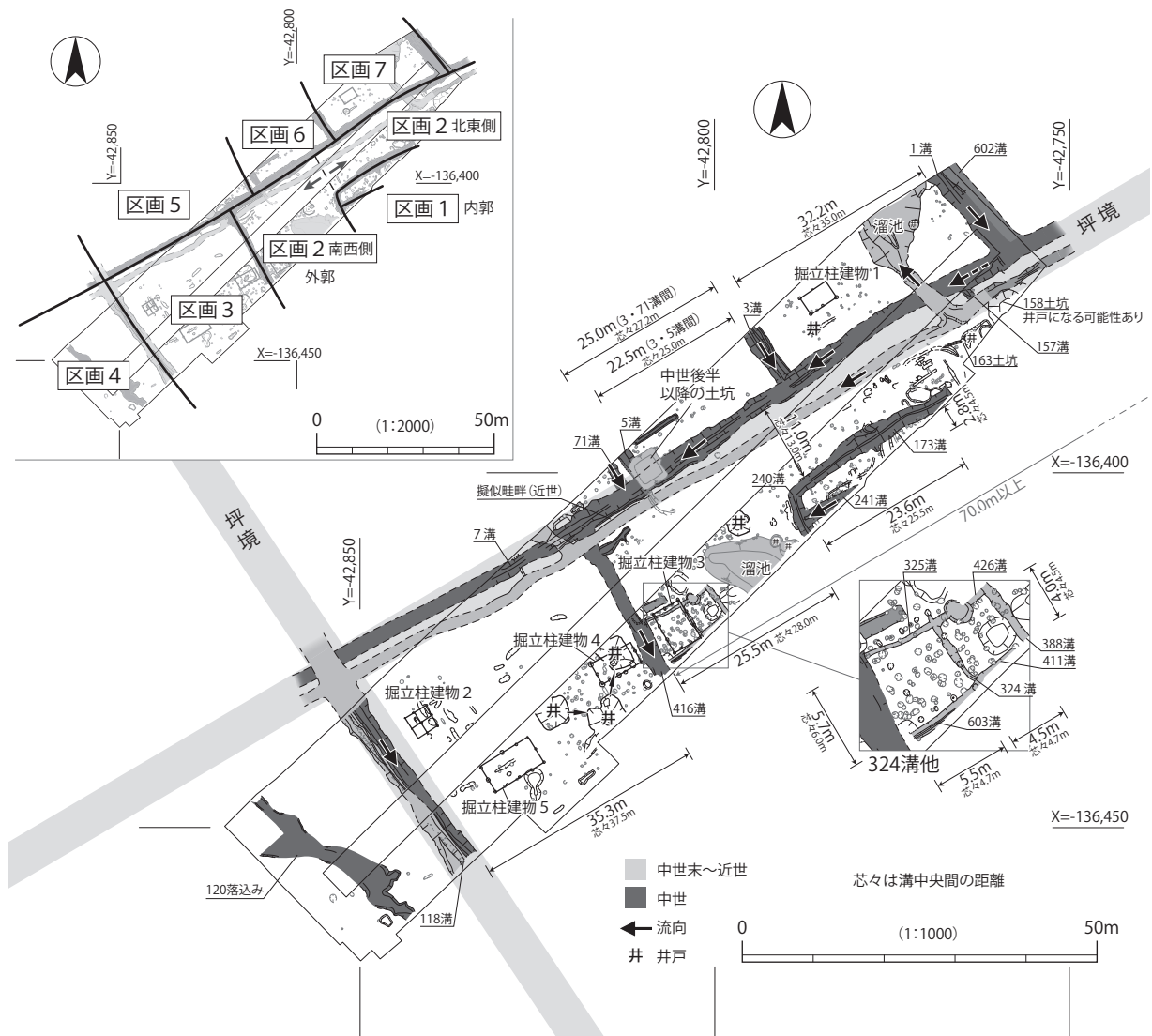


図 53 屋敷地の溝

井戸は12世紀から13世紀中葉を中心としており、12井戸のみ中世後半以降に下る可能性を有するが、14世紀代に機能したと積極的に評価できる井戸は今回の調査範囲では検出されていない。

柱穴・ピットは各時期を通じて分布域は重なる。118溝南西側、120落込み周辺は攪乱が多かったため、他の地点と一概に比較できないが、柱穴・ピットは希薄であった。118溝南西側は土地利用の痕跡が乏しく、生産域に用いられた可能性も想定される。

なお、土塁は今回の調査で確認されなかった。ただし、多くの溝が廃絶時に埋め戻されており、埋め戻し土の供給先として土塁の盛土を一つの候補として考えている。

屋敷地の廃絶については、7溝上位の埋土が泥質に近い堆積物であることや、排水施設の可能性が高い324他溝が屋敷地の廃絶前の14世紀前葉頃に機能していたことから、周辺地形の平坦化に伴って地下水位が上昇し、屋敷地周辺が居住に適さなくなったためではないかと想定している。中世後半以降に今回の調査区周辺が耕作地としての利用が始まる（第2層が形成される）のは、地下水位の上昇がこの地域の水回りや灌漑を容易にさせた結果ではないかと想定している。

(5) 屋敷地の位置付け (図53)

区画1は173・240・241溝に区画される範囲である。北西面には173・241溝があり、区画1を二重に囲んでいる。173溝古段階は断面V字形で、断面U字形に掘削される他の溝と異なる。水の流れを意識した傾斜が無いことや、埋土にも水成層が確認できなかったことから取水や排水を目的として掘削されたものではなく、空堀のように機能したことが想定される。一方、240溝は173溝より掘り込みは浅く、部分的な検出にも関わらず、溝底面の傾斜が明瞭であった。173溝は北東部で鋸形に曲がっている状況を確認しており、北東-南西方向で幅23.6mに復元できる。区画1が正方形に復元できれば、規模は一町の4分の1程度に該当する。

区画2は7溝と416溝に区画される範囲である。416溝の北西側延長部は現代の暗渠設置時に大きく攪乱されていたため検出することはできず、図53では点線で表示した。173溝より北東側では、今回の調査区内で北西-南東方向の溝が検出されなかった（157溝は部分的な検出に留まる）。70m以上の規模が想定され、一町規模になる可能性がある。区画2南西側では掘立柱建物3をはじめとする柱穴・ピットが密集する。324他溝は調査時に工房跡も想定して調査を進めたが、現状では排水を主目的として掘削された溝という以上の評価はできていない。区画1と合せて評価した場合、区画1が内郭、区画2が外郭に当たると考えている。

区画3は7・118・416溝に区画される範囲である。今回の調査では118溝は中世後半まで遡ることしか検証しえなかったが、118溝が坪境の溝と考えられることや、直交する7溝が12世紀末葉から13世紀前葉には機能していたことが想定されることから、118溝も7溝と同時期に機能していた可能性が高いと考えている。区画3では、掘立柱建物4・5をはじめとする柱穴・ピットが密集する。

区画5～7は部分的な検出に留まっており全容は不明だが、区画内では柱穴・ピットが検出されている。区画7の遺構密度は7溝南東側より少ないが、3・5溝から遺物がまとまって出土しており、7溝北西側にも屋敷地の広がり確認できる。区画の規模が7溝南東側より北西側のものの方が小さく、坪境の7溝を挟んで屋敷地の規模が異なる可能性がある。

今回検出した区画の内、区画1は一町の4分の1程度の可能性が高く、同時期に他遺跡で確認されている一町規模の屋敷地より規模が小さい。ただし、区画1を内郭、区画2を外郭とした場合、他遺跡と一律に評価できず、この地域では屋敷地の規模が大きいクラスに属する可能性が高いと考えている。

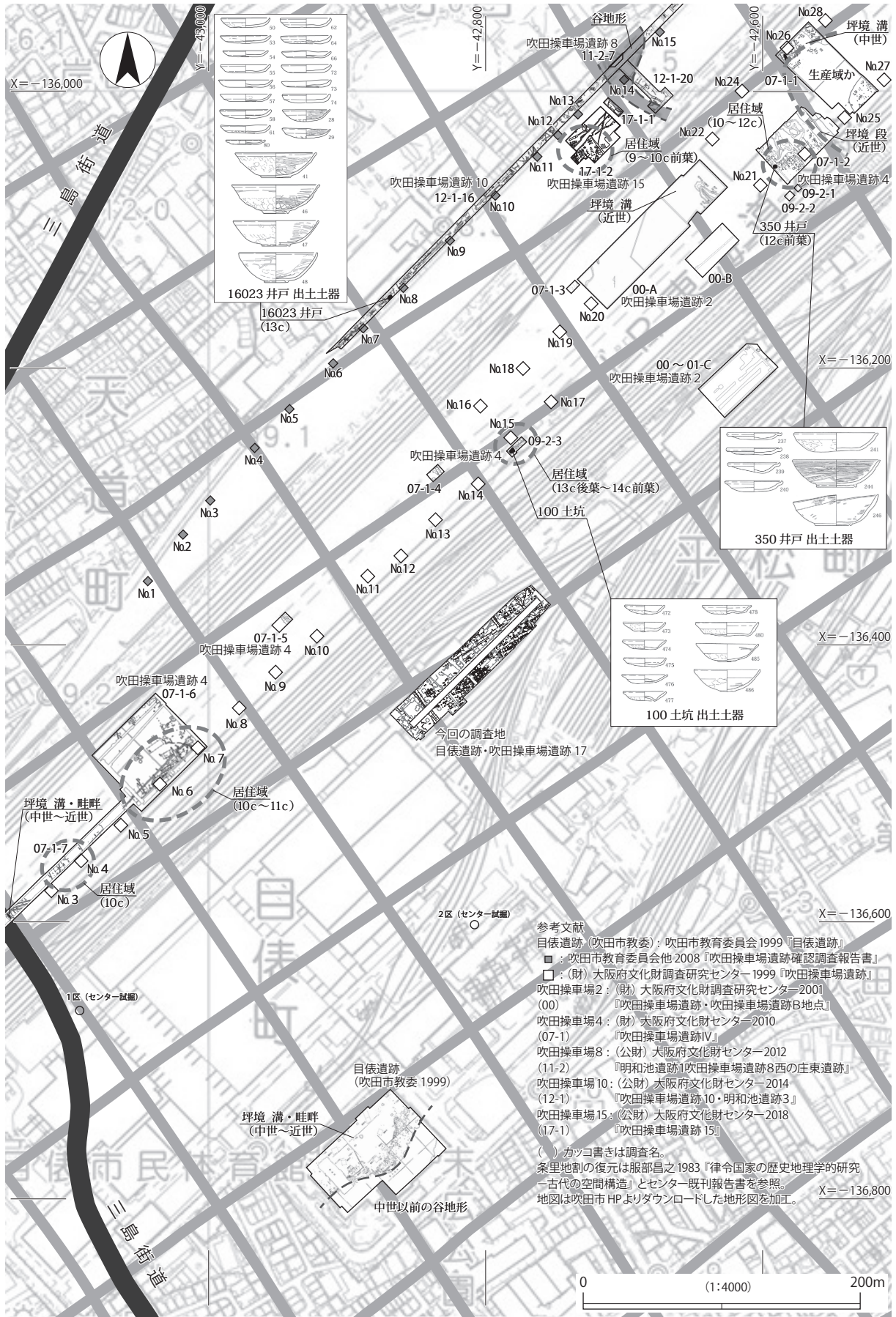


図 54 周辺の既往調査区合成

出土遺物でみた場合には、白色土器が一定量出土していることが注目される。ただし、京域で出土する白色土器と比較すると粗雑な形状で色調がやや暗色味を帯びたものが多く含まれている。同様に、磁器は白磁四耳壺も出土しているが、磁器の出土量は少なく、品質も京域のものに見劣りするものが多い。屋敷地を所有した人物像は在地有力者が想定されるが、屋敷地の規模や出土遺物から見る限り、中央における高位の人物とは想定しにくい。ただし、既往調査と比較した遺物量等を考慮すれば、北摂の在地有力者を屋敷地の所有者と考えている。

(6) 周辺の調査成果

今回の調査区周辺では、中世の遺構と、中世以降の条里地割に関係する遺構が検出されている(図54)。12世紀代の居住域は、07-1-1より北東側で行われた調査を含めて広範囲で確認されている。13世紀代の居住域は、09-2-3で13世紀後葉から14世紀前葉の掘立柱建物・土坑等が検出された。09-2-3は今回の調査区と距離が離れており、異なる単位の屋敷地になる可能性がある。吹田操車場遺跡の既往調査では谷地形が複数確認されており、居住域が点在する原因の一つと考えられるが、12世紀末葉から13世紀以降は今回の調査区周辺に遺構・遺物が集中する。既往調査で検出された居住域は時期が限定されるのに対し、今回の調査で検出した居住域は11世紀後葉から14世紀前葉にかけて継続しており、中世前半、当地域の重要な拠点の一つであったと考えられる。また、目俵遺跡(吹田市教委1999)では中世から近世の水田が検出された。今回の調査では118溝南西側は遺構が少なく、居住域の周辺に生産域が広がっていた可能性がある。

2. その他の調査成果

・縄文時代から弥生時代の遺物は、サヌカイト製石鏃333と弥生土器壺45が出土した。弥生土器壺は弥生時代中期中葉から後葉に位置付けられる。摩滅が顕著で、現地性は無い。

・古墳時代の遺物は、須恵器192・259、窯体、陶棺257・297・308・309が出土した。須恵器には溶着資料191・258が含まれる。今回の調査区北西側の千里丘陵には吹田須恵器窯跡群があり、須恵器溶着資料や窯体は同窯跡群に由来する資料と考えられる。また、陶棺は須恵器工人の埋葬に際し使用された可能性が高く、須恵器溶着資料や窯体とともに吹田須恵器窯跡群の須恵器生産に関係する遺物が今回の調査では多数出土した。

・奈良時代から平安時代の遺物は、瓦が出土した。平瓦には七尾瓦窯で生産されたと考えられる斜格子タタキの瓦8・256と、吉志部瓦窯で生産された可能性がある縄タタキの瓦321が出土している。

註

(註1) 条里地割は服部氏による復元とセンター既刊報告書を参照した。当地における条里地割は地形に合わせて施工され、N-33°-W振るとされる。吹田操車場遺跡の過去の調査において少なくとも中世まで遡ることが検証されている。

(註2) (公財)大阪府文化財センター2018『吹田操車場遺跡16』において07-1-1より北東側の谷地形がまとめられている。

参考文献

愛知県史編さん委員会2012『愛知県史別編窯業3中世・近世常滑系』

市本芳三2006「摂河泉の平安時代から鎌倉時代の様相」『財団法人大阪府文化財センター調査研究報告』第4集

シンポジウム「中世集落と灌漑」実行委員会編1999『中世集落と灌漑』

中世瓦研究会2019『中世瓦の考古学』

奈良県教育委員会1979『重要文化財書院修理工事報告書(今西家書院)』

服部昌之1983『律令国家の歴史地理学的研究-古代の空間構造』

目録遺跡・吹田操車場遺跡遺物観察表

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
1		土師器皿	1溝	(8.1)	(1.6)		30%	30%	外：ナデ、ヨコナデ 内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	へそ皿か。
2		古瀬戸御皿	1溝	(15.4)	(3.0)		15%	10%	外：回転ナデ 内：施軸	密	良	N8/ 灰白	御目は先端が鋭い工具を用いて付ける。
3		瓦器羽釜	1溝	(26.1)	(9.1)		15%	—	外：ナデ、ヨコナデ 内：横方向ナデ、ヨコナデ	密	良	N5/ 灰	焼成不良で断面暗色を呈する。
4		平瓦	1溝	長 (8.5)	幅 (12.1)	(1.8~2.0)	—	5%	凹：布目痕、縦方向ナデ 凸：斜格子タタキ	粗	不良	N6/ 灰	端面に蓋座の痕跡あり。瓦質。
5		土師器皿	2溝	14.8	3.2		50%	55%	外：摩滅 内：ナデか	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	底面凹凸顕著。粘土板接合による成形か。
6		瓦器椀	2溝	(14.9)	6.2		70%	60%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	不良	N5/ 灰	桶葉型。全体摩滅顕著。見込み暗文は格子状。
7		唐津焼碗	2溝	底径 3.8	(2.5)		底 85%	25%	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ、施軸 内：施軸	密	良	10YR6/3 に近い黄橙	高台内の墨書は「卅」か。外面底部にも墨ならしのような墨痕あり。
8		平瓦	2溝	長 (12.0)	幅 (8.1)	2.0	—	5%以下	凹面：横骨痕、布目痕、縦方向ナデ 凸：斜格子タタキ、ナデ	密	良	N5/ 灰	須恵質。
9		瓦器椀	155溝	(15.2)	(4.8)		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	桶葉型。外面は摩滅顕著。外面下部に粘土板接合痕の凹凸残る。細片図化。
10		カマド	158土坑	(13.5)	(7.4)		—	5%以下	外：ハケ、指押え、ヨコナデ 内：ハケ	粗	良	10YR5/2 灰黄褐	掛口正面。土師質。
11		砥石	158土坑	長 (7.6)	幅 4.2	3.5	—	—	—	—	—	—	流紋岩かアブライト。
12		土師器皿	3溝	9.3	1.7		60%	70%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	胎土は白色を呈す。
13		須恵器鉢	3溝	(26.6)	(6.0)		20%	10%以下	外：内：回転ナデ 内：指押え後ナデ、横方向ナデ 内：ナデ	密	良	N6/ 灰	東幡系。
14		白色土器皿	7溝	(7.6)	1.2		30%	30%	外：指押え後ナデ、横方向ナデ 内：ナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	コースター皿。形状に歪みあり。
15		土師器皿	7溝	8.4	1.3		90%	90%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/2 灰白	外底面は底部中央に近い位置に指押えあり。外周にも指押えとナデ。口縁部と外底面の屈曲は明瞭な部分と不明瞭な部分がある。
16		土師器皿	7溝	8.5	1.5		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/2 に近い黄橙	口縁部と内底面の屈曲は明瞭な部分と不明瞭な部分がある。
17		白色土器皿	7溝	8.6	1.6		75%	75%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	2.5Y8/2 灰白	外底面にナデ前に5~8mmの粘土塊付着。
18		土師器皿	7溝	8.6	1.6		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面中央にナデ前に粘土塊付着し足しの可能性がある凸状のふくらみあり。
19		土師器皿	7溝	8.6	1.6		70%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部は外面のヨコナデにより内側上方へ先細り。外底面外周までヨコナデ。
20		土師器皿	7溝	8.6	1.3		70%	75%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/2 に近い黄橙	内外面の口縁部と底部の屈曲明瞭。外底面の指頭圧痕明瞭。
21		白色土器皿	7溝	8.8	1.4		70%	80%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	口縁部外面の沈線様の凹みは外周せず。平滑に仕上げられている部分あり。外底面は上げ底、内底面は平坦。
22		土師器皿	7溝	8.8	1.5		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	粘土板接合による成形。外底面中央に強い指押えあり。外周にも強い指押え。
23		土師器皿	7溝	8.8	1.6		50%	70%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	灯明皿。胎土は白色を呈す。口縁部は外面のヨコナデにより内側上方へ先細りする部分と肥厚する部分あり。
24		白色土器皿	7溝	8.8	1.7		60%	60%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1 灰白	上げ底気味、内面は平坦。口縁部は外面のヨコナデによって内側上方へ先細り。底面外周までヨコナデが及ぶ。
25		白色土器皿	7溝	8.9	1.6		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	上げ底気味、内面はわずかに突出。口縁部は外面のヨコナデによって内側上方へ先細り。
26		土師器皿	7溝	(9.0)	1.1		40%	40%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	胎土は白色を呈す。外底面のナデの痕跡は明瞭。
27		白色土器皿	7溝	9.0	1.7		60%	75%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/1 灰白	粘土板接合は上下に2条あり。粘土紐巻き上げによって成形した可能性がある。胎土は白色を呈す。
28		土師器皿	7溝	9.0	1.6		60%	75%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	粘土板接合による成形。外底面は上げ底気味、内底面は平坦。外底面に5mm以下の粘土塊が少量付着。
29		白色土器皿	7溝	(9.3)	1.4		50%	80%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/1 灰白	口縁部は外面のヨコナデにより、内側に向かって丸くおさめる。
30		土師器皿	7溝	9.2	1.4		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面中央に強い指頭圧痕あり。底面外周に指押えを行う。口縁部のヨコナデは最後に上方に上げており、上方にあげた部分の周囲が変形する。
31	6	土師器皿	7溝	9.3	1.8		50%	70%	外：回転ナデ、糸切痕 内：回転ナデ	粗	良	2.5Y7/1 灰白	回転台による成形。非常に粗い胎土。
32		土師器皿	7溝	(9.6)	(1.7)		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1 灰白	外底面に放射状に圧痕あり（爪痕か）。
33		土師器皿	7溝	(10.0)	1.4		20%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	ての字形皿。胎土は白色味を帯びる。胎土が粗いため、側面に亀裂状の凹みが入る。
34		白色土器皿	7溝	13.1	2.5		70%	70%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/2 灰白	口縁部中位は、当初外反する形状に成形した後、粘土を貼り足して丸味を帯びた形状に成形する。
35		土師器皿	7溝	13.2	2.3		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面は右回りに指押え気味のナデを行い、ナデの痕跡が筋状に盛り上がっている。口縁部のヨコナデは最後に上方に上げており、上方にあげた部分の周囲が変形する。胎土は白色を呈す。
36		土師器皿	7溝	13.0~13.7	2.4		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ハケ、ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	灯明皿。口縁部のヨコナデは最後に上方に上げており、上方にあげた部分の周囲が変形する。
37		土師器皿	7溝	(14.6)	3.1		30%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面に微細な皺状の粘土板接合痕あり。口縁部ヨコナデの上方へあげた痕跡明瞭。
38		白色土器皿	7溝	13.7	2.4		50%	70%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	不良	10YR8/2 灰白	外底面にはナデ前に微細な粘土板接合痕の凹みあり。
39		白色土器壺か	7溝	底径 7.6	(2.2)		底 100%	—	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	白色土器か。上部を打ち欠いて灯明皿に転用したと考えられる。回転台による成形。底部は糸切痕をナデ消す。
40		白色土器台付皿	7溝	底径 5.8	(3.5)		底 40%	5%	外：ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	台の端部は先細り。
41		土師器鍋	7溝	(24.6)	(12.0)		40%	20%	外：内：ハケ、ナデ	粗	不良	2.5Y3/1 黒褐	溝埋土上位と下位から出土したものが接合。
42		土師器鍋	7溝	(33.2)	(13.9)		25%	5%	外：ハケ、ナデ 内：ナデ	粗	良	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部はヨコナデ時の面をもち、ヨコナデの際に生じた粘土は下側にナデつける（口縁部直下の粘土板接合痕が該当）。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
43		土師器鍋	7溝	(32.8)	(7.9)		25%	10%以下	外：ナデ、ハケ 内：ハケ	粗	不良	N1.5/黒	外面煤付着。
44		土師器羽釜 か	7溝	(24.2)	(9.0)		20%	5%	外：ハケ、ナデ、ヨコナデ 内：板ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR7/2にぶい黄橙	摂津型。
45		弥生土器壺	7溝	—	(5.5)		—	5%以下	外：内：摩擦、剥離	密	不良	2.5Y7/1灰白	内外面摩擦と剥離顕著。頸部に櫛 描別点文を施した痕跡あり。
46		瓦器椀	7溝	14.6	5.1		90%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。 口縁端部にミガキあり。
47		瓦器椀	7溝	14.6	5.5		50%	70%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は内面体部の ミガキと連続し、放射状。外面の ミガキは細密に施す。内面見込みに 重ね焼きの痕跡あり（見込み暗文 から位置する）。高台内側に「X」 印の線刻。
48		瓦器椀	7溝	14.8	4.9		50%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。 口縁端部にミガキあり。
49		瓦器椀	7溝	15.0	4.9		60%	70%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は平行線状。 体部外面のミガキはヨコナデとナ デでできた凸部中心に施す。口縁 端部にミガキあり。
50		瓦器椀	7溝	15.0	4.7		90%	95%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。 口縁端部にミガキあり。
51		瓦器椀	7溝	15.0	4.8		90%	95%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は平行線状。 口縁端部にミガキあり。
52		瓦器椀	7溝	15.2	5.0		90%	95%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は平行線状。 口縁端部にミガキあり。
53		瓦器椀	7溝	15.2	4.7		60%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は平行線状。口 縁部のヨコナデは二段、ヨコナ デでできた凸部にミガキを施す。 口縁端部にミガキあり。
54		瓦器椀	7溝	15.4	4.8		90%	95%	外：指押え、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は曲線状のミ ガキを粗雑に施文。口縁端部にミ ガキあり。
55		瓦器椀	7溝	15.7	5.5		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N3/暗灰	和泉型。見込み暗文は体部内面の ミガキと連続し、不規則なもの。 体部外面のミガキはヨコナデとナ デでできた凸部中心に施す。口縁 端部内面に3～5mmの円形の剥離 痕あり。口縁端部にミガキあり。
56		瓦器椀	7溝	16.3	5.5		90%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ヨコナデ後ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は体部内面の ミガキと連続し、粗雑なジグザグ 状。体部外面のミガキはヨコナデ とナデでできた凸部中心に施す。 口縁端部は一部面をもち、端部に ミガキあり。
57		瓦器椀	7溝	底径5.6	(1.4)		底90%	10%以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/灰	和泉型。見込み暗文はジグザグ状。
58		瓦器椀	7溝	底径4.4	(2.5)		底60%	15%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N4/灰	見込み暗文は斜格子状。
59		須恵器皿	7溝	8.2	1.6		100%	100%	外：ナデ、糸切痕 内：ナデ	密	良	N5/灰	東播系。重ね焼きの痕跡あり。
60		須恵器鉢	7溝	(19.0)	(5.2)		20%	10%以下	外：回転ナデ、糸切痕 内：回転ナデ	密	良	N5/灰	瀬戸内東部系。外面と内底面煤付 着。
61		須恵器鉢	7溝	(30.0)	(10.1)		40%	40%	外：回転ナデ、糸切痕 内：ナデ、回転ナデ	密	良	N5/灰	東播系。内底面は使用時の摩耗に より平滑、光沢あり。
62	6	常滑焼壺	7溝	—	(11.3)		5%以下	—	外：回転ナデ、板ナデ 内：回転ナデ、指押え	密	良	10YR7/3にぶい黄橙	三筋壺。外面の二段3条流線と下 段2～3条流線の間に「泉」の墨 書がある。低い可能性の、他の解 読候補に「泉」「品」がある。
63		青磁皿	7溝	底径(3.6)	(1.1)		底50%	10%以下	外：施釉、回転ヘラケズリ 内：施釉	密	良	7.5Y5/2灰オリーブ	D期I類。
64		白磁碗	7溝	(16.4)	(7.2)		10%	35%	外：内：施釉	密	良	5Y7/2灰白	D期Ⅷ類。内面に櫛描による施文 あり。
65	7	下駄	7溝	13.4	8.4	4	—	80%	表面：平滑 裏面：先端にケズリ痕の可能性があ る稜あり	—	—	—	前穴・後穴の直径は1.0cm。前歯 は欠損、後歯は横断面形はハの字 形、高さ2.3cm。表面に直線的な 線状痕あり。表面は平滑な部分が あり、ケズリで表面を整えた可能 性がある。
66		白色土器皿	7溝	(8.8)	1.5		30%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1灰白	口縁端部外面に面を持つ部分と丸 く仕上げられる部分あり。
67		土師器皿	7溝	(9.2)	(1.8)		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/3浅黄橙	形状に歪みあり。外底面の外周に 指頭圧痕あり。
68		土師器皿	7溝	14.7	3.5		60%	80%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/1灰白	灯明皿。底面に筋状の圧痕あり(置 台の痕跡か)。
69		土師器鍋	7溝	(29.7～ 32.8)	(8.7)		15%	10%以下	外：ヨコナデ、ハケ残る 内：板ナデ、ヨコナデ	粗	不良	2.5Y8/1灰白	内外面は摩擦顕著。細片図化。
70		土師器鍋	7溝	(36.0)	(8.4)		20%	10%以下	外：ハケ、ヨコナデ 内：ハケ、ナデ	粗	良	2.5Y2/1黒	内外面に煤付着。
71		瓦器椀	7溝	15.2	5.2		70%	85%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N2/黒	和泉型。見込み暗文は曲線状のミ ガキを密に施す。体部外面のミガ キはヨコナデとナデでできた凸部 中心に施す。
72		瓦器椀	7溝	(15.6)	(5.2)		40%	40%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	N5/灰	和泉型。見込み暗文は直線状のミ ガキを密に施文。体部外面のミガ キはヨコナデとナデでできた凸部 中心に施す。口縁端部は面取り気 味のヨコナデ、端部にミガキあり。
73		白磁碗	7溝	(16.8)	(2.5)		10%以下	10%以下	外：内：施釉	密	良	7.5Y8/1灰白	C期Ⅳ類。
74		青磁碗	7溝	—	2.7		—	5%以下	外：内：施釉	密	良	10GY6/1緑灰	E期I～II類
75		カマド	7溝	—	3.9		—	5%以下	外：内：ナデ	粗	良	7.5YR5/1褐灰	土師質。
76		丸瓦	7溝	長(16.7)	幅(5.4)	1.3	—	10%	凸面：縦・横方向ナデ 凹面：糸切痕、布目痕	密	良	N5/灰	玉縁式。瓦質。
77		土師器皿	5溝	8.4	1.6		75%	90%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	5YR7/6橙	灯明皿。外底面は上げ底、内面は 平坦。
78		土師器皿	5溝	8.6	1.5		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2灰白	外底面ナデの痕跡明瞭。
79		土師器皿	5溝	8.6	0.7		70%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	5YR7/4にぶい橙	粘土板接合による成形。器形歪み 顕著。
80		土師器皿	5溝	8.6	1.4		50%	60%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1灰白	粘土板接合による成形。胎土は白 色を呈す。
81		土師器皿	5溝	(8.6)	(1.6)		50%	40%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2灰白	口縁部外反気味の部分あり。
82		土師器皿	5溝	8.7	1.7		70%	80%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/2灰白	底面丸底気味。
83		白色土器皿	5溝	(8.8)	1.1		30%	20%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2灰白	底部から口縁部外面は丁寧成形 し、緩やかに屈曲する。
84		白色土器皿	5溝	8.8	1.3		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y8/2灰白	口縁部と底部境界の屈曲明瞭。
85		土師器皿	5溝	8.9	1.5		95%	95%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/2灰白	粘土板接合により成形。
86		土師器皿	5溝	9.0	1.6		75%	75%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/1灰白	底部は粘土板接合による成形。 口縁部は粘土紐を貼り足して成形。
87		土師器皿	5溝	9.2	1.4		100%	100%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/4浅黄橙	粘土板接合により成形。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
88		土師器皿	5溝	9.2	1.6		70%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/2 灰白	外底面の外周は横方向にナデ。
89		土師器皿	5溝	(9.3)	(1.4)		50%	60%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	灯明皿。楕円形状。
90		土師器皿	5溝	9.3	1.3		60%	60%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部と底部外面の屈曲明瞭。
91		白色土器皿	5溝	(9.6)	1.6		40%	60%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	2.5Y8/1 灰白	口縁部外面のヨコナデにより、端部は先細り。
92		白色土器皿	5溝	9.6	1.9		70%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底部は上げ底で、持ち上がりは低い。
93		土師器皿	5溝	9.6	1.5		80%	90%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部直立気味に立ち上がるところあり。外底面中央に明瞭な指頭圧痕、外周のナデの単位も明瞭である。胎土は白色を呈す。
94		土師器皿	5溝	9.0	1.8		90%	90%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部で粘土を接合した部分の成形が粗雑であるために段が生じて、口縁部に上下のズレあり。胎土は白色を呈す。
95		土師器皿	5溝	13.2	3.0		30%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	口縁部内面にヨコナデ前の線状痕あり、成形時のナデの痕跡か。
96		土師器皿	5溝	(13.8)	2.5		50%	30%	外：ナデか、ヨコナデ 内：ヨコナデ、摩滅	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部外面は二段ナデ。
97		土師器皿	5溝	(14.2)	(2.7)		15%	10%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部外面は二段ナデ。口縁部外面のヨコナデにより端部は先細り。細片図化。
98		土師器皿	5溝	(14.2)	2.9		40%	40%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：指押え後ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底面の指頭圧痕（1.0 cm以下で他と比較して小さい）明瞭。
99		土師器皿	5溝	14.6	2.8		80%	85%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	部分的に口縁部と外底面の屈曲部に粘土接合痕あり。
100		土師器皿	5溝	(14.8)	(2.2)		20%	25%	外：ナデ、回転ナデ、糸切痕 内：ナデ、回転ナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	回転台使用。
101		土師器皿	5溝	(14.8)	2.3		30%	40%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部下段に全周しない二段ナデ。
102		白色土器皿	5溝	(15.6)	(2.8)		25%	30%	外：指押え、ナデ 内：ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底面に線状圧痕あり（置台の痕跡か）。
103		白色土器皿	5溝	(9.6)	1.1		10%	10%以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：摩滅	密	良	2.5Y8/1 灰白	コースター皿。細片図化。
104		白色土器台付皿	5溝	—	(1.9)		—	5%	外：ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1 灰白	内外面は摩滅顕著。
105		土師器鍋	5溝	(32.4)	(7.3)		10%	10%以下	外：ナデ、横方向ナデ 内：ハケ	粗	良	10YR7/2 にぶい黄橙	頸部外面はヨコナデ。
106		瓦器皿	5溝	9.2	(1.8)		65%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は「L」字状。
107		瓦器椀	5溝	(14.8)	4.6		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は紡錘形状にミガキを往復させた曲線で表現。口縁部にミガキあり。
108		軒平瓦	71溝	瓦当幅(8.0)	瓦当高(2.9)	(2.4)	—	6%	瓦当面：連珠文 凸面：摩滅 凹面：欠損	密	良	N4/ 灰	上縁に面取りあり。外区間に粘土塊の貼り足しあり（目痕か）。右端珠文に范傷の可能性のある凸状の膨らみあり。瓦質。
109		土師器皿	173溝	8.3	1.7		70%	70%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	へそ皿。底部の持ち上がりの位置は中心からずれる。内外面は白色を呈す。
110		瓦器皿	173溝	9.4	2.1		100%	100%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文はジグザグ状。
111		瓦器椀	173溝	(15.4)	5.1		30%	45%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N5/ 灰	和泉型。外面はヨコナデとナデの境界部に2条ミガキを施す。口縁部内面にミガキを施す。
112		藍滓	173溝	長4.0	幅3.6	1.0	—	—	—	—	—	—	重量20.8 g。磁着度無し。滓質は緻密。気泡多数あり。輪郭先端部に付着した藍滓か。
113		土師器鍋	173溝	(35.5)	(8.1)		20%	20%	外：ナデ後ハケ、ヨコナデ 内：ハケ	粗	不良	10YR8/1 灰白	口縁部は両側から挟み込んでヨコナデ。外面に煤付着。
114		石鍋	240溝	(18.2)	(6.6)		15%	—	外・内：ケズリ	—	—	—	滑石製。罫は欠損。
115		土師器皿	241溝	8.5	1.4		60%	75%	外・内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	内底面に粘土塊付着。胎土は白色を呈す。
116	8	埴埴	241溝	長(6.8)	幅(8.1)	1.7	5%	5%	外：ナデ 内：藍滓・褐色粘土付着	粗	良	7.5YR7/4 にぶい橙	内面被熱により黒変。内面に付着する藍滓は滓質緻密。
117	7	部戸部材	173溝	(159.2)	3.1	2.6	—	—	表面：平滑、棧を固定した釘孔は14カ所、釘は残存せず、釘孔の間隔10.5 cm前後、棧左右が風化して表面が痩せているため、棧を固定した釘孔周囲は方形に幅3.2～3.5 cm盛り上がる 裏面：平滑	—	—	—	部戸の榫（堅榫）。榫種ヒノキ。左端部は欠損、右端部は柄杓の加工あり。戸板を嵌め込むための溝あり。微量であるため明確ではないが、赤色の付着物あり。奈良県今西家寺院の部戸（15世紀以降）の榫と形状が一致する。棧材左右の風化も一致しており、柄の加工があることから縦方向の榫と考えられる。
118		瓦器椀	11井戸	(15.2)	4.8		15%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は、体部内面のミガキと連続し、ミガキを交差させて表現。口縁部ミガキ無し。
119		土師器皿	162井戸	(9.3)	(1.3)		25%	25%	外：指押え、ナデ 内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	手捏ねによる粗雑な成形。口縁部を内側に折り返している部分あり。細片図化。
120		白色土器皿	162井戸	9.4	2.0		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	灯明皿。口縁部ヨコナデ時にできた粘土の盛り上がりナデをナデ付ける。
121		土師器皿	162井戸	(12.7)	2.1		25%	40%	外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	10YR5/1 褐灰	口縁部のヨコナデは部分的に二段、ヨコナデが二段になる部分は口縁部の外面に面が形成される。細片図化。
122		土師器皿	162井戸	(14.0)	2.7		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	内底面に近い口縁部のヨコナデは断続的に行われており、痕跡が明瞭に残る。細片図化。
123		土師器皿	162井戸	(14.6)	2.3		20%	20%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	灯明皿。口縁部は二段ナデ。外底面はナデによって平滑に仕上げられる。
124		土師器皿	162井戸	(14.7)	2.7		45%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面には成形時に粘土の接合が不十分な部分が凹みとして残る。
125		土師器台付皿	162井戸	(17.3)	(3.2)		20%	20%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	胎土は白色味を帯びる。細片図化。
126		土師器台付皿	162井戸	(18.2)	(2.2)		20%	15%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	器形に歪みあり。
127		瓦器椀	162井戸	15.8	5.1		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は体部内面に輪状に施したミガキを交差させ（∞字状のものも中央で交差）。直線状に表現。口縁部にミガキあり。
128	7	球状木製品(椀)	162井戸	5.5	5.3	3.3	—	98%	上面・下面：ケズリ、側面：未調整	—	—	—	樹木の節部分を選んで加工。樹皮残る。上下端はケズリ、側面の加工は節と樹皮（一部）の除去のみ。
129	7	球状木製品(椀)	162井戸	5.6	6.6	6.3	—	98%	上面・下面・側面：ケズリ、未調整の部分あり	—	—	—	樹木の節部分を選んで加工。樹皮残る。
130	7	球状木製品(椀)	162井戸	6.4	7	5.6	—	98%	上面・下面・側面：ケズリ、未調整の部分あり	—	—	—	樹木の節部分を選んで加工。樹皮残る。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
131	7	球状木製品 (椀)	162 井戸	4.9	5.5	4.6	—	98%	上面・下面：ケズリ、側面：未調整	—	—	—	樹木の節部分を選んで加工。樹皮残る。上・下端はケズリ。側面の加工は節と樹皮（一部）の除去のみ。
132		白色土器皿	163 土坑	(9.2)	(1.6)		40%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	外底面に線状の圧痕があり、圧痕部分の隙間に内面から粘土塊を貼り足す。
133		白色土器皿	163 土坑	9.6	1.5		50%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	底面はナデにより平滑に仕上げられる。
134		土師器皿	163 土坑	9.6	1.6		70%	85%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	器形に歪みあり。粘土板接合による成形。
135		白色土器皿	163 土坑	9.8	1.6		55%	55%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	器形に歪みあり。外底面外周に間隙を空けて爪痕が付く。
136		土師器皿	163 土坑	(10.0)	1.8		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y8/2 灰白	灯明皿。底面はナデにより平滑に仕上げられる。
137		土師器皿	163 土坑	(13.8)	2.3		50%	55%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	器形に歪みあり。口縁部外面はヨコナデによる明瞭な凹みあり。
138		土師器皿	163 土坑	14.0	2.4		75%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部外面は強いヨコナデによる凹みあり。
139		土師器皿	163 土坑	14.1	2.5		80%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	口縁部と底面の境界は明瞭。口縁部外面はヨコナデによる明瞭な凹みあり。口縁部に焼成時の収縮によるものと考えられる割れあり。
140		白色土器皿	163 土坑	(14.2)	2.5		45%	45%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面外周はナデにより平滑、外底面中央はナデが不十分なため微細な凹みあり。
141		土師器皿	163 土坑	(14.4)	2.5		30%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部と底面の境界は明瞭。底面は丁寧なナデで仕上げられ、平滑。
142		土師器皿	163 土坑	(15.0)	2.6		35%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部外面は強いヨコナデによる凹みあり。
143	6	白色土器 台付皿	163 土坑	(16.0)	5.2		30%	35%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ハケか、ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	胎土は褐色を帯びる。内面にハケ状の工具で調整した痕跡が残る。
144		土師器 台付皿	163 土坑	(9.8)	(2.2)		50%	35%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	口縁部外面は強いヨコナデによる凹みをもつ部分あり。
145		土師器 台付皿	163 土坑	(18.0)	(4.5)		35%	20%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部と台部の接合は図上復元。口縁部外面はヨコナデによる明瞭な凹みをもつ部分あり。
146		土師器皿	159 落込み	(8.0)	1.4		40%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：摩滅、ナデか	密	良	10YR8/2 灰白	胎土は白色を帯びる。
147		土師器皿	159 落込み	9.0	1.7		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR7/3 に近い黄橙	外底面の指押えの痕跡明瞭。
148		土師器皿	159 落込み	14.4	2.4		55%	55%	外：ナデか、ヨコナデ 内：ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部は二段ナデ、上端のヨコナデで口縁部外側に面を持つ部分あり。外底面に直線状の圧痕あり（高台の痕跡あり）。
149		土師器皿	159 落込み	(14.5)	2.5		40%	35%	外：ヨコナデ、ナデか 内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部は二段ナデ。上段のヨコナデの後、口縁部内面にヨコナデを施す。
150		土師器皿	159 落込み	(14.7)	2.5		40%	45%	外：内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/2 灰白	口縁部は二段ナデ。胎土は白色を帯びる。
151		土師器皿	160 土坑	14.5	2.8		75%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部内面にヨコナデ前に付いた筋状の痕跡あり、成形時のナデの痕跡あり。
152		白色土器皿	291 土坑	(9.0)	1.8		30%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部は二段ナデ。
153		土師器皿	291 土坑	9.4	1.8		60%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	胎土は白色味を帯びる。粘土板接合による成形。
154		土師器皿	291 土坑	(11.6～ 13.6)	2.9		10%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	丸底に近い形状を呈する可能性あり。細片図化。
155		土師器皿	291 土坑	(14.0)	2.4		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	外底面指押えの痕跡明瞭。
156		白色土器皿	291 土坑	(16.0～ 16.5)	2.7		10%	10%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	細片図化。
157		瓦器椀	291 土坑	(14.4)	(5.1)		20%	20%	外：指押え、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は斜格子状か、外面ミガキは指押え、ナデ、ヨコナデによって生じた凸部中心に施される。口縁部にミガキあり。細片図化。
158		土師器皿	311 井戸	8.4	1.4		80%	90%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/2 灰白	灯明皿の可能性あり。外底面は放射状に指押え気味のナデ。
159		土師器皿	311 井戸	(14.8)	(2.4)		30%	20%	外：内：指押え後ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	細片図化。
160		瓦器椀	311 井戸	(14.7)	(4.3)		10%	10%	外：内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	桶型。外面のミガキは分割性あり。細片図化。
161		白磁碗	311 井戸	(17.6)	(2.7)		5%	5%	外：施軸 内：施軸	密	良	10Y8/1 灰白	IV類。
162		白色土器皿	416 溝	8.1	1.5		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5Y8/2 灰白	器形に歪みあり。内面口縁部のヨコナデは斜上方に引き上げて終わる。
163		土師器皿	416 溝	8.2	1.5		60%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10Y7/1 灰白	器形に歪みあり。口縁部の外面ヨコナデは上下にズレあり。胎土は白色味を帯びる。
164		白色土器皿	416 溝	8.5	1.3		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1 灰白	器形に歪みあり。口縁部外面のヨコナデの終わりは斜上方に引き上げるが、引き上げ方は水平に近い。引き上げた周囲の器高は低くなっている。口縁部のヨコナデは器表面に明瞭な条線を残す。
165		土師器皿	416 溝	12.5	2.0		98%	99%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	灯明皿。口縁部全体に煤付着。口縁部ヨコナデの斜上方へ引き上げ痕跡あり。
166		瓦器椀	416 溝	11.2	3.0		95%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N7/ 灰白	和泉型。見込み暗文は渦巻状。高台は無し。
167		土師器皿	307 土坑	8.5	1.4		50%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y8/2 灰白	全体に鉄分沈着。胎土は白色味を帯びる。
168		黒色土器椀	307 土坑	(13.6)	(3.5)		8%	5%	外：ヨコナデ、ミガキか 内：ミガキ	密	良	2.5Y3/1 黒褐	阿黒（B類）。口縁部沈線あり。細片図化。
169		瓦器椀	307 土坑	14.8	4.6		50%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。外面体部に3～5mm程度の粘土塊が複数付着。見込み暗文は平行線状。口縁部にミガキ無し。
170		丸瓦	321 土坑	長 (16.1)	幅 (11.4)	1.6	—	20%	凸面：ナデ、縦方向のナデ 凹面：糸切痕、布目痕後板ナデ、吊紐痕、ナデ	密	良	N4/ 灰	玉縁式。瓦質。
171		平瓦	321 土坑	長 (12.6)	幅 (13.1)	2.5	—	20%	凹面：糸切痕、ナデか、離砂付着 凸面：ハケ、ナデか、離砂付着	密	良	2.5Y4/1 黄灰	離砂は1mm以下。土師質。
172		平瓦	321 土坑	長 (18.4)	幅 (16.1)	1.8	—	25%	凹面：糸切痕、布目痕、ナデ 凸面：縄タタキ後ナデか、離砂付着	密	良	2.5Y3/1 黒褐	側面に凸型整形痕あり、ナデで凹面になじませている。瓦質。
173		常滑焼甕	329 土坑	—	(11.0)	—	—	10%以下	外：ナデ、肩部押印文あり 内：ナデ	密	良	N6/ 灰	内面に粘土接合痕残る。
174		須恵器鉢	329 土坑	24.6	10.4	—	65%	65%	外：回転ナデ、ナデ、糸切痕 内：回転ナデ、指押え、ナデ	密	良	5Y7/1 灰白	東轆系。内面下位に使用時の摩耗あり。
175	8	軒平瓦	329 土坑	瓦当幅(7.2)	瓦当高5.1	瓦当厚4.7	—	5%以下	瓦当面：均整唐草文 凹面：布目痕、板ナデ、横方向ケズリ 凸面：横方向ナデ	密	良	N7/ 灰白	直線型か。平瓦部凹面の瓦当面上部はヘラズリを施し、緩やかな傾斜の面をもちながら瓦当面上部に接する。瓦質。
176		不明鉄製品	329 土坑	長6.8	幅2.6	0.7	—	—	—	—	—	—	金具か。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
177		平瓦	329 土坑	長 (13.6)	幅 (16.5)	2.2	—	20%	凹面：糸切痕、布目痕 凸面：縄タタキ	密	良	N2/ 黒	凹面多量の煤付着。土師質。
178		平瓦	329 土坑	長 (19.4)	幅 (14.7)	1.6	—	20%	凹・凸面：縦方向ナデ、籬砂付着	密	良	N6/ 灰	凸面端部は横方向ナデ。瓦質。
179		瓦器椀	393 土坑	13.0	3.4		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は歪みのある平行線状。体部内面のミガキは溝巻状に近い。高台は一周しない。
180		瓦器椀	393 土坑	13.2	3.7		95%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。体部内面のミガキは溝巻状に近い。高台は一周せず、途切れた部分に粘土を貼り足す。
181		瓦器椀	393 土坑	14.1	3.8		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。外面の指押えとナデの痕跡は口縁部近くまであり、ヨコナデ後にも残る。高台は一周しない。
182		瓦器椀	393 土坑	14.2	4.1		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ後ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。内面に 1.0 cm 大の礫が剥落した痕跡がある。
183		白色土器皿	270 柱穴	7.9	1.5		60%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	器形に歪みあり。外底面には成形後、2～3mm程度の粘土塊が付着し、粘土塊はナデによって薄く延ばされている。
184		土師器皿	270 柱穴	7.9	1.6		50%	55%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	器形に歪みあり。口縁部のヨコナデは斜上方へ引き上げて終わる。
185		白色土器皿	270 柱穴	8.0	1.7		75%	70%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	灯明皿。へそ皿。底部の持ち上がりは低い。成形時に底部に粘土を貼り足す。
186		白色土器皿	270 柱穴	8.2	1.7		60%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	灯明皿か、外面にわずかに煤が付着。へそ皿の古いタイプ。底面の持ち上がりは低い。270 柱穴からは同じ胎土、同じ製作技法のへそ皿が他に 1 点あり。
187		土師器皿	270 柱穴	(8.6)	1.4		35%	45%	外・内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	内底面に摩擦によるものと考えられる凹みあり。
188		土師器皿	270 柱穴	(8.0)	0.9		20%	15%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデか、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	細片図化。
189		瓦器椀	270 柱穴	(12.2)	(3.0)		15%	10%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ後ミガキ	密	良	N5/ 灰	細片図化。
190	6	埴	269・375 柱穴	長 31.0	幅 24.1	3.7～4.0	—	85%	外・内：ナデ	粗	良	N7/ 灰白	須恵質。尺寸では縦 1 尺、横 8 寸。240 溝から出土した埴(破片)と製作技法・胎土類似する。
191	8	須恵器溶着資料	301 ヒット	長 (17.0)	幅 (19.6)	(9.2)	—	—	杯蓋外：回転ヘラケズリ、ヨコナデ 裏外：格子タタキ、内：同心円文当具痕	密	良	N5/ 灰	須恵器杯身・杯蓋・甕の溶着資料。須恵器には窯体と礫が付着する。変形顕著。TK47～MT15 型式。
192		須恵器器台	118 溝	—	(3.9)		—	2% 以下	外：波状文 内：回転ナデ	密	不良	N6/ 灰	長方形の透孔あり。
193		瓦器火鉢	118 溝	—	(5.9)		—	5% 以下	外・内：摩擦	粗	不良	2.5Y7/1 灰白	内外面は摩擦顕著。
194		瓦器風炉ないし火鉢	118 溝	—	(4.9)		—	2% 以下	外：突帯間にスタンプ文か浮文(剥離のため不明)、下位進弁文 内：横方向ナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	突帯間にはスタンプ文か浮文の痕跡あり(外周は凹形の沈線がめぐり、内側は摩擦と剥離)。突帯下側は進弁文。
195	8	軒丸瓦	118 溝	瓦当径 (5.0)	—	瓦当厚 2.0	—	5%	瓦当面：蓮華文 瓦当裏：ナデ	粗	良	5B5/1 青灰	進弁は輪線部を伴う。外区の珠文の大きさは揃い、外縁との間に范傷が 1 か所あり。周縁には粗粒の籬砂が多量に付着する。瓦当周縁と裏面はナデ。須恵質。
196		土師器皿	469 井戸	(8.2)	1.3		45%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	全体に鉄分が沈着。口縁端部のヨコナデにより、端部は先細り。
197		土師器皿	469 井戸	7.6	1.3		100%	95%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	へそ皿の古いタイプ。外底面はわずかに持ち上がる。粘土紐を巻き上げて成形か。
198		土師器皿	469 井戸	8.1	1.7		85%	85%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底面に粘土の貼り足しあり。元々上げ底気味に成形していた可能性あり。
199		土師器皿	469 井戸	8.2	0.9～1.9		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	器形に歪みあり。口縁部に粘土接合痕あり。粘土接合痕の周囲は強いヨコナデが施され、口縁部の立ち上がりは直立気味になっている。外底面中央は凹形に凹む。
200		土師器皿	469 井戸	8.4	1.3		80%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/2 灰白	口縁端部は外面ヨコナデにより内側上方へ先細り、ヨコナデによって生じた内側への屈曲が明瞭な部分がある。
201		土師器皿	469 井戸	(8.4)	1.3		50%	55%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	器形に歪みあり。
202		土師器皿	469 井戸	(13.0)	(2.7)		13%	10%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗	良	2.5Y7/2 灰黄	口縁端部は上方からヨコナデによって仕上げられ、外反する。細片図化。
203		土師器皿	469 井戸	(13.6)	2.1		20%	20%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	器形に歪みあり。口縁端部外面のヨコナデにより、端部は内側上方へ先細り。鉄分沈着が顕著だが、胎土は白色味を帯びる。細片図化。
204		須恵器鉢	469 井戸	(27.6)	10.7		25%	25%	外：回転ナデ、指押え、ナデ、糸切痕 内：回転ナデ	密	良	N6/ 灰	東輪系。内底面は摩擦により平滑。口縁部外面に重ね焼きの痕跡あり。
205		瓦器椀	469 井戸	12.4	3.1		ほぼ完形	98%	外：指押え、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N5/ 灰	和泉型。見込み暗文は溝巻状。高台の剥離痕が明瞭で、一部残存。高台は一周しない。
206		瓦器鍋	469 井戸	(24.2)	(4.2)		10% 以下	10% 以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：ハケ後板ナデ、ヨコナデ	密	良	N4/ 灰	細片図化。
207		瓦器火鉢	469 井戸	—	(5.6)		—	5% 以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ミガキ	粗	良	N3/ 暗灰	奈良火鉢。
208		土師器皿	469 井戸	8.4	1.3		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/6 橙	口縁部の粘土接合痕の周囲は強いヨコナデが施され、口縁部は直立気味。
209		土師器皿	469 井戸	(8.6)	(1.7)		17%	17%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	ての字形皿。細片図化。
210		土師器皿	469 井戸	9.2	1.8		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/3 に近い黄橙	口縁部内面にヨコナデ前に付いた斜方向の線状痕あり。外底面外周は放射状にナデ。粘土板接合による成形。
211		土師器皿	469 井戸	(9.4)	(1.4)		20%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	灯明皿か、内底面に煤付着。口縁端部内面に面あり。口縁部内面にヨコナデ前に付いた線状痕あり。
212		土師器皿	469 井戸	(9.4)	(1.2)		25%	20%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	細片図化。
213	6	土師器皿	469 井戸	9.4	1.9		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR6/2 灰黄褐	灯明皿。内外面全体に煤付着。
214		土師器皿	469 井戸	9.4	1.5		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁端部の内側上面にナデを施している部分があり、端部上面に面をもつ。粘土板接合による成形で、外底面中央から口縁端部まで粘土接合痕が残る。口縁部内面に毛髪痕あり。胎土は白色味を帯びる。
215		土師器皿	469 井戸	(9.8)	1.7		40%	35%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	ての字形皿。表面は白色を呈す。外底面に粘土接合痕あり。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
216		土師器皿	469 井戸	10.1	1.7		80%	90%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	灯明皿。粘土板接合により成形か。
217		白色土器皿	469 井戸	(9.3)	(1.2)		20%	10%	外：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	コースター皿。細片図化。
218		土師器皿	469 井戸	(15.0)	2.6		15%	15%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR7/3 にぶい橙	口縁部二段ナデ。細片図化。
219		土師器皿	469 井戸	(14.5)	3.0			30%	外・内：指押え後ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部二段ナデ。口縁部内面にナデを行った際に付いた線状痕あり。外底面にナデによって生じた微細な粘土接合痕あり。
220	6	土師器皿	469 井戸	14.6	2.9		90%	95%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部内面にヨコナデ前に付いた線状痕あり。口縁部のヨコナデは斜上方へ引き上げて終わる。外底面は粗雑なナデで、微細な凹みあり。胎土白色味を帯びる。
221	6	土師器鍋	469 井戸	(28.5)	(12.5)		20%	10%	外：ハケ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	2.5Y6/1 黄灰	内外面に煤付着。
222		土師器鍋	469 井戸	(32.5)	(10.2)		20%	10%	外：ナデ、板ナデか 内：ナデ、ヨコナデ	粗	不良	N5/ 灰	内外面に煤付着。
223	6	土師器鍋か	469 井戸	—	(3.1)		—	—	外：板ナデか 内：ナデか	密	良	5YR6/2 灰褐	外面に墨書あり。判読不明。
224		瓦器皿	469 井戸	9.5	1.9		70%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ後ミガキ	密	良	2.5Y3/1 黒褐	和泉型。見込み暗文はジグザグ状。口縁部と外底面の屈曲明瞭。
225	6	瓦器碗	469 井戸	14.5	5.6			99%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	桶葉型。見込み暗文は格子状。外面ミガキは5分割。口縁部内面に線状痕あり。内外面に2～5mmのクレーター状の痕跡がある。クレーター状の痕跡は胎土に混ざる砂礫の表面で剥離しており、剥離面は器壁に向かって截頭円錐形を呈す。
226		瓦器碗	469 井戸	14.9	5.6		90%	95%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	2.5Y3/1 黒褐	和泉型。見込み暗文は、曲線気味のミガキを交差させて表現。外面ミガキは分割性は無く、指押え、ナデ、ヨコナデで生じた凸部中心に施される。内面に重ね焼きの痕跡あり。口縁部にミガキあり。
227		瓦器碗	469 井戸	(16.4)	(4.5)		15%	12%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	粗	良	2.5Y3/1 黒褐	和泉型。外面は、調整時にできた凸状の部分を中心にミガキが施される。口縁部にミガキあり。細片図化。
228		瓦器碗	469 井戸	(16.4)	(4.6)		10%	10%	外：ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。細片のため、外面ミガキの分割性は不明。細片図化。
229		瓦器碗	469 井戸	底径 5.2	(1.6)		底 60%	15%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文はミガキを交差させて表現。
230		瓦器碗	469 井戸	底径 5.8	(1.3)		底 100%	10%以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N8/ 灰白	桶葉型。見込み暗文は横方向のミガキを施した後、平行線状に施文。
231		白磁碗	469 井戸	底径 6.0	(2.7)		底 60%	10%	外：施釉、回転ヘラケズリ、ケズリ 内：施釉	密	良	7.5Y8/1 灰白	C期Ⅱ類。
232	8	短刀	469 井戸	長 26.2	幅 3.4	刃部 0.9	—	100%	表面・裏面：錆付着。	—	—	—	鉄製品。莖部長 2.7 cm、幅 1.8 cm、厚 0.4 cm。刃渡り 23.4 cm ≠ 7 尺。切先は先端が峰側へ折れ曲がる。
233		台石	469 井戸	縦 (12.6)	横 15.9	8.4	—	—	—	—	—	N2/ 黒	全体に煤付着。
234	7	下駄	469 井戸	18.7	10.6	2.8	—	90%	表面・裏面：腐朽顕著	—	—	—	前穴・後穴は正方形に近い形状を呈し、一辺 1.1～1.5 cm。形歯は欠損する。前歯は高さ 0.8 cm、使用により摩耗していると考えられる。
235	7	下駄	469 井戸	21.5	12.7	2	—	80%	表面：前穴の周辺に凹みあり 裏面：欠損と腐朽顕著	—	—	—	前穴・後穴は円形を呈し、直径 1.0～1.2 cm。歯は前後とも欠損。
236	7	板状木製品 (扇子骨か)	469 井戸	(6.9)	(1.6)	0.2	—	—	表面・裏面：平滑	—	—	—	下端に凹みがあり、直径 0.3 cm。側縁に切り欠きあり。
237	7	底板	469 井戸	(39.0)	(17.4)	(1.0)	—	50%	表面・裏面：平滑	—	—	—	表面に線状痕あり。側縁には釘孔あり。
238		土師器皿	472 井戸	(8.0)	1.65		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	底面凹みあり。
239		土師器皿	472 井戸	8.1	1.5		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	5YR7/4 にぶい橙	器形に歪みあり。底面の持ち上がりは高い。口縁部外面に2カ所粘土接合痕があり、成形時に口縁部に紐状の粘土を貼り足している可能性がある。
240		白色土器皿	472 井戸	(8.4)	1.6		25%	40%	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底部はわずかに持ち上がる。
241		白色土器皿	472 井戸	9.6	1.75		50%	70%	外：指押え、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	内底面の持ち上がりは低い。口縁部外面のヨコナデにより、端部は先細り。
242		白色土器皿	472 井戸	(14.1)	2.4		20%	40%	外：ナデ、板ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	内面に胎土に含まれた砂礫周辺で生じた2～3mmの剥離痕あり。剥離痕は割れかけのものあり。口縁部外面のヨコナデは斜上方に引き上げて終わる。内底面に表面の粘土を掻き取るようなナデあり。外底面板ナデの痕跡明瞭。
243		須恵器甕	472 井戸	(21.7)	(7.8)		15%	10%以下	外：平行タタキ、ヨコナデ 内：同心円文当具痕、ナデ	粗	良	N4/ 灰	瀬戸内東部系。口縁部との接地面に浅い凹みあり。頸部にあった平行タタキはヨコナデによって消される。
244		須恵器壺	472 井戸	12.0	(4.2)		100%	10%	外：回転ナデ 内：回転ナデ、同心円文当具痕	密	良	N6/ 灰	口縁部は面をもつ。
245		白磁碗	472 井戸	底径 6.4	(3.4)		底 100%	10%	外：ケズリ 内：施釉	密	良	5Y7/1 灰白	F期Ⅰ類か。高台外面に縮輪状の皺あり。外面に煤付着。
246		瓦器碗	472 井戸	14.0	4.7		80%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N2/ 黒	和泉型。見込み暗文は平行線状。口縁部外面にミガキあり。外面被熱し、煤付着。
247		瓦器碗	472 井戸	14.5	5.0		80%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。口縁部内面のミガキは、ミガキに用いた工具の当りが不十分なため断続的。体部内・外面に5mm程度の粘土塊付着。高台は体部への接合が甘く、一部剥離する。口縁部ミガキ無し。
248		瓦器碗	472 井戸	14.8	4.6		98%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。暗文のミガキは口縁部直下で終わる。口縁部外面にミガキあり。
249		瓦器碗	472 井戸	15.0	4.7		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は粗雑な平行線状。高台は紐状の粘土を2単位貼り付けて一周させており、接合面の片側は分離しようになっている。口縁部外面にミガキあり。
250	6	瓦器碗	472 井戸	15.0	5.0		90%	97%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。口縁部外面にミガキあり。
251		瓦器碗	472 井戸	15.1	4.9		98%	99%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。ミガキに用いた工具の当りが不十分なため、断続的。口縁部外面にミガキあり。
252		カマド	472 井戸	(15.0)	(13.7)		—	5%以下	外：ハケ、ナデ 内：ハケ、指押え、ナデ	粗	不良	5Y8/1 灰白	土師質。掛口から下がった位置に粘土塊付着による突起があり、ナデによって成形する。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
253	6	土師器羽釜	472 井戸	28.0	(25.1)		100%	80%	外：ハケ、ヨコナデ 内：ハケ	密	良	10YR7/4 に近い黄橙	外面コゲ分厚く付着。
254		砥石	472 井戸	長 (7.3)	幅 5.5	(3.8)	—	—	—	—	—	—	底面は3面残存する。上端は欠損するが、散打痕状の凹凸あり。表面の線状の摩耗は断面V字形。表面は細かいケズリ。木材の一部欠損。
255	7	木栓	472 井戸	(4.7)	2.3	(1.5)	—	30%	全体に微細なケズリ	—	—	—	表面は細かいケズリ。木材の一部欠損。
256	8	平瓦	472 井戸	長 (16.2)	幅 (13.2)	1.7	—	10%	凹面：布目痕、縦方向ナデ 凸面：斜格子タタキ、ナデ	密	不良	N4/ 灰	凹面は模骨痕を縦方向のナデによって消す。凹面に凹型整形台痕あり。須恵質。
257	8	陶棺	472 井戸	長 (24.6)	幅 (14.4)		—	5%以下	外：ナデ 内：同心円文当具痕、ナデ	密	良	N8/ 灰白	土師質。脚部は折損。
258	8	須恵器溶着資料	472 井戸	長 (22.4)	幅 (15.9)	(10.7)	—	—	杯蓋外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 外：自然釉付着、内：同心円文当具痕	密	良	2.5GY3/1 暗オリーブ灰	須恵器杯身・杯蓋・覆の溶着資料。窯体と隣付着。変形顕著。TK47～MT15 型式。
259		須恵器甕	472 井戸	(58.5)	(19.4)		10%以下	10%以下	外：回転ナデ、波状文 内：同心円文当具痕、回転ナデ	密	良	5Y4/1 灰	器形に歪みあり。
260		瓦器椀	474 井戸	底径 (5.6)	(1.5)		底 12.5%	5%以下	外：ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N5/ 灰	見込み暗文は平行線状。高台に歪みあり。細片図化。
261	8	鞆羽口	474 井戸	長 (3.4)	幅 (5.6)		—	5%以下	内：ナデか	密	良	N2/ 黒	鞆羽口先端の上端ないし側端か。外面はガラス状物が付着。調整は不明。孔復元径2.8cm、重量49g。
262		土師器皿	524 土坑	8.4	1.4		55%	65%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	底面と口縁部内面の境界に直線的な凹み（工具痕か）あり。外底面に粘土塊付着。成形時に粘土を接合した部分で歪み顕著。粘土接合痕は外底面中央から口縁部まであり。
263		土師器皿	524 土坑	8.5	1.8		55%	55%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10Y8/2 灰白	器形の歪み顕著。口縁端部のヨコナデが内面上方に及ぶため、外反気味。
264		白色土器皿	524 土坑	(8.6)	1.2		40%	45%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	底面はわずかに持ち上がるが、変形した可能性がある。口縁端部は上方へ先細り。
265		土師器皿	524 土坑	8.6	1.4		75%	95%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	内外面は摩滅顕著。
266		白色土器皿	524 土坑	8.6	1.5		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	器形に歪みあり。口縁端部は外面のヨコナデにより丸味をもつ。口縁部のヨコナデは斜上方へ引き上げて終わる。
267		白色土器皿	524 土坑	(8.8)	1.7		45%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	底面はわずかに持ち上がる。へそ皿の可能性あり。口縁端部外面のヨコナデによって、端部が肥厚する部分あり。全体鉄分沈着。
268		土師器皿	524 土坑	(8.8)	(1.2)		25%	12%	外・内：ヨコナデか	密	良	2.5Y7/1 灰白	コースター皿。外底面に粘土塊付着。
269		白色土器皿	524 土坑	(13.2)	(2.6)		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	2.5Y8/2 灰白	灯明皿。丸底に近い形状か。口縁端部は内側上方へ先細り。
270		土師器皿	524 土坑	(13.7)	(2.4)		40%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	灯明皿。底面は部分的に粘土塊の貼り足しを行った後ナデ。
271		白色土器皿	524 土坑	13.8	2.3		60%	60%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	不良	10YR8/2 灰白	口縁端部は上方へ先細り。
272		白色土器皿	524 土坑	(13.8)	(2.4)		10%	20%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	不良	2.5Y8/2 灰白	口縁端部は上方へ先細り。
273		白色土器皿	524 土坑	(14.0)	(2.9)		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR5/2 灰黄褐	灯明皿。内面全体に煤付着。口縁端部は上方へ先細り。
274		土師器皿	524 土坑	(16.2)	2.0		30%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR7/2 に近い黄橙	灯明皿。器壁分厚い。口縁部にヨコナデを強く施しており、外底面は下方に突出する。
275		瓦器皿	524 土坑	9.0	1.6		100%	100%	外：指押え、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込みの暗文は体部内面のミガキと連続し、ミガキを交差させて表現。内面に使用痕の可能性ある擦痕あり。粘土板接合による成形。
276		瓦器椀	524 土坑	14.8	4.6		60%	75%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N3/ 暗灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。外面の指面正痕はナデによって凹凸が不明瞭である。口縁端部にミガキあり。
277		瓦器椀	524 土坑	14.7	4.5		75%	75%	外：指押え、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込みの暗文はミガキをジグザグ状に施文した後、体部内面に円周状のミガキが施されるため、視覚的には平行線状に見える。口縁端部にミガキあり。
278	6	カマド	524 土坑	(15.2)	(13.4)		—	5%	外：ナデ後ハケ、ナデ 内：ハケ	粗	不良	10YR7/2 に近い黄橙	土師質。掛口から下がった位置に粘土塊貼付による突起があり、ナデによって成形する。外面ナデの痕跡明瞭。
279		土師器皿	471 土坑	(8.2)	1.3		33%	40%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	内底面は摩滅顕著。外底面には3mm大の粘土塊状の疵あり。
280		土師器皿	471 土坑	8.4	1.1		60%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	器形に歪みあり。
281	6	瓦器羽釜	471 土坑	15.8～17.7	(13.1)		100%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	N7/ 灰白	三足が付く羽釜。足は欠損。器形は樽形。
282		土師器皿	488 土坑	(9.2)	1.4		25%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/2 に近い黄橙	灯明皿か。全体に煤付着。粘土板接合により成形か。細片図化。
283		土師器皿	488 土坑	9.6	1.8		60%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/2 に近い黄橙	灯明皿。
284		土師器皿	488 土坑	10.0	1.6		80%	90%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR7/2 明褐灰	灯明皿。
285		土師器皿	488 土坑	15.5	(3.7)		60%	50%	外：指押え後ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/2 に近い黄橙	形状は椀に近く、丸底気味。
286		土師器皿	488 土坑	(17.4)	(3.1)		10%	20%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	細片図化。
287		瓦器椀	488 土坑	(15.0)	(4.4)		20%	15%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	10YR8/1 灰白	和泉型。炭素吸着せず。外面はナデ、ヨコナデを行った際にできた凸状の部分にミガキを施す。細片図化。
288		瓦器椀	488 土坑	底径 (6.0)	(4.2)		底 30%	20%	外：ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	不良	5YR7/6 橙	焼成不良で、外面は赤褐色を呈する。炭素吸着は内面の一部のみ。見込み暗文は平行線状のものが残るが、摩滅により詳細不明。
289		土師器鍋	488 土坑	(31.0)	(12.4)		25%	5%	外：ハケ、ヨコナデ 内：ハケ、ナデ	粗	良	10YR6/2 灰黄褐	外面全体に煤付着。
290		土師器鍋	488 土坑	(31.0)	(13.7)		30%	10%	外・内：ハケ、ナデ	粗	良	10YR7/3 に近い黄橙	口縁端部外面のハケはヨコナデによって消されるが部分的に残る。
291		瓦器椀	161 溝	(15.2)	3.8		25%	35%	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。高台は歪みのある円形。口縁端部ミガキ無し。
292		瓦器椀	68 土坑	15.7	5.4		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ナデ、ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は粗雑なジグザグ状。摩滅により明確ではないが、外面ミガキの分割性は失われているものと考えられる。口縁端部にミガキあり。

番号	図版	種類・器形	出土遺構・地層	口径・長 cm	器高・幅 cm	厚 cm	残存率 (口径・底径)	残存率 (全体)	調整	胎土	焼成	外色調	備考
293		土師器皿	236 土坑	9.4	1.6		95%	98%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	口縁部ヨコナデは斜上方へ引き上げて終わっており、痕跡が明瞭。外底面にナデの際に付いた爪痕の痕跡あり。
294		土師器皿	236 土坑	(16.0)	2.9		25%	25%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部内面に線状痕あり、ヨコナデ前に行われたナデの痕跡あり。
295		白色土器 台付皿	236 土坑	底径 (8.8)	(3.6)		底 98%	50%	外：ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/1 灰白	口縁部は、同じ遺構から出土し、同一個体と考えられるものを復元的に図化。台部の成形は部分的に右下方へのナデによって行う。
296		土師器羽釜	236 土坑	(25.0～ 27.4)	(7.9)		20%	10%以下	外：ナデ、ハケ、ヨコナデ 内：板ナデ、ヨコナデ	粗	良	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部外面にヨコナデ時に生じた粘土をナデ付ける。
297		陶棺	236 土坑	—	(7.5)		—	5%以下	外：剥離 内：横方向ナデ	粗	良	10YR8/1 灰白	脚部。土師質。中位に円形の透孔あり。直径 1.0 cm。棺身とは、粘土紐を内外面に巻き付けて接合する。
298		須恵器甕	448 土坑	—	(20.7)		—	5%以下	外：平行タタキ、回転ナデ 内：同心円文当具痕	密	良	N5/ 灰	瀬戸内東部系。
299		土師器皿	268 柱穴	(9.0)	1.8		25%	30%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	細片図化。
300		瓦器椀	268 柱穴	底径 6.2	(1.8)		底 95%	20%	外：ナデ、ヨコナデ 内：ミガキ	密	良	N5/ 灰	桶型。高台はシャープな形状。見込み暗文はミガキを一定方向に密に施して表現。
301		土師器鍋	268 柱穴	(30.6)	(8.4)		20%	7%	外：ハケ、指押え、ナデ 内：ハケ、ナデ	粗	良	10YR4/1 褐灰	内面にハケないし板ナデの当たりが線状痕として部分的に残るが、全体的にナデで平滑に仕上げられる。外面窯付着。
302	7	礎板	348 柱穴	15.8	11.5	3.4	—	—	表面・裏面：平滑、側縁はケズリ	—	—	—	部材の転用か。柄穴の加工あり。453 柱穴の礎板に同じように柄穴上の加工がある。
303		埴	449 柱穴	長 (16.8)	幅 (10.3)	(4.0)	—	20%	外・内：縦方向ナデ	密	良	N5/ 灰	須恵質。表面側縁近くに縦方向に強いナデを施してできた、溝状の凹みあり。
304		平瓦	449 柱穴	長 (15.5)	幅 (8.1)	2.0	—	25%	凹面：布目痕 凸面：斜格子タタキ	粗	不良	10YR6/2 灰黄褐	布目は細密。土師質。
305		土師器皿	466 柱穴	8.8	1.5		80%	85%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	形状に歪みあり。口縁部のヨコナデは斜上方へ引き上げており、その部分の変形顕著。
306		土師器皿	59 ビット	8.2	1.6		60%	70%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	へそ皿。口縁部外面の指押えの痕跡(爪痕あり)明瞭。器形に歪みあり。
307		白色土器皿	59 ビット	(7.0)	(1.5)		30%	30%	外・内：指押え、ナデ、ヨコナデ	密	不良	2.5Y8/2 灰白	へそ皿。外底面に黒色物質付着。断面は赤褐色。
308		陶棺	43 ビット	幅 (20.9)	(15.1)		5%以下	5%以下	外：ハケ、ナデ、縦方向ナデ 内：同心円文当具痕、縦方向ナデ	粗	良	2.5Y7/1 灰白	棺蓋。須恵質。棒状の工具により外側から開けられた孔あり。孔は破断面にあり、形状は不明。焼成前の穿孔。
309		陶棺	153 ビット	—	残存 13.2		5%以下	5%以下	外：ナデ後同心円文当具痕 内：同心円文当具痕後ナデ	粗	不良	2.5Y8/1 灰白	棺身。土師質。
310		瓦器椀	247 ビット	(15.2)	5.0		10%以下	20%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N4/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。
311		土師器皿	257 ビット	8.6	1.5		95%	98%	外・内：ナデ、ヨコナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	全体に摩滅顕著。粘土板接合による成形。
312		土師器 台付皿	272 ビット	(10.2)	3.9		13%	50%	外・内：ナデ、ヨコナデ	粗	良	10YR8/4 浅黄橙	口縁部内面に斜方向の線状痕あり。
313		釘	272 ビット	長 6.4	幅 0.8	0.5	—	90%	—	—	—	—	鉄製品。折釘。
314		平瓦	317 ビット	長 (10.8)	幅 (7.0)	3.1	—	10%	凹面：布目痕 凸面：斜格子タタキ、横方向ナデ	粗	良	5Y6/1 灰	凸面被熱か。瓦質に近い。
315		土師器皿	358 ビット	9.0	1.6		100%	100%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	10YR8/2 灰白	粘土板接合により成形。粘土接合痕は外底面中央から口縁部まであり。
316		土師器皿	413 ビット	8.5	1.7		60%	50%	外：摩滅、指押えとナデか 内：摩滅、ナデか	密	良	10YR8/2 灰白	内外面に摩滅顕著。胎土は白色味を帯びる。
317		土師器皿	491 土坑	(9.8)	1.4		50%	50%	外：回転ナデ、糸切痕 内：回転ナデ	粗	良	10YR8/2 灰白	内面に摩滅顕著。底部は円板状に近い形状で外面下位にヨコナデ時の凹みあり。
318		青磁碗	378 ビット	(16.0)	(3.6)		8%	5%	外・内：施釉	密	良	5Y6/3 オリーブ黄	D 期 I 類。蓮弁文の花弁は楕円を用いて表現。内面は片影りの草花文。
319		土師器皿	458 ビット	(11.0)	(1.5)		10%	6%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	不良	10YR8/3 浅黄橙	ての字形皿。細片図化。
320		瓦器椀	494 ビット	14.8	4.7		75%	75%	外：指押え、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ミガキ	密	良	10YR3/1 黒褐	和泉型。見込み暗文は直線状のミガキを交差させて表現する。
321		平瓦	451 ビット	長 (16.5)	幅 (12.0)	2.6	—	30%	凹面：糸切痕、布目痕、ナデ 凸面：縄タタキ、ナデ	密	良	N5/ 灰	須恵質。細目の襷りは細かい。布目痕ははつれが認められる。
322	7	下駄	505 ビット	(17.1)	(10.4)	(3.7)	—	—	表面：凹みあり 裏面：腐朽顕著	—	—	—	全体に摩滅顕著。表面に拇趾の圧痕と考えられる凹みあり。前穴・後穴は円形を呈し、前穴は直径 1.3 cm 大、後穴は 1.5 cm 以上。下駄の歯は前後ともに遺存状況が悪い。前歯は高さ 2.2 cm 以上。
323		平瓦	576 ビット	長 (20.1)	幅 (15.3)	1.6	—	50%	凹・凸面：縦方向ナデ	密	良	7.5Y5/1 灰	凹凸面はナデで平滑に仕上げる。凹面に直線状の凹みあり。隅切瓦の加工を意図した分割線か、瓦質。
324	8	軒丸瓦	288 溜池	—	—	瓦当厚 1.7	—	5%以下	瓦当面：巴文 瓦当裏：摩滅	密	良	10Y7/1 灰白	全体の摩滅顕著。巴文頭部は欠損しており、形状は不明。尾部は細長く圏線には接しない。瓦質。
325	8	軒平瓦	288 溜池	瓦当幅 (13.2)	瓦当高 (3.7)	瓦当厚 (2.8)	—	5%以下	瓦当面：連珠文 平瓦部凹面：縦方向ナデか 平瓦部凸面：ナデ一部認められるが未調整	粗	良	10Y5/1 灰	段頸。瓦当面は大きく欠損する。上縁に面あり。外区間に粘土塊の貼り足しあり(目痕)。瓦当部と平瓦部の接合面にかきやぶり状の弱い条線(3条)あり。瓦質。
326	6	瓦器椀	側溝	15.3	5.1		70%	80%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	密	良	N6/ 灰	和泉型。見込み暗文は平行線状。口縁部内面ミガキあり。高台内側に墨書あり。墨書は判読不明、記号の可能性あり。
327		瓦器皿	側溝	9.1	2.2		100%	100%	外：ヨコナデ、指押え、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	密	良	N6/ 灰	和泉型。見込み暗文は体部内面のミガキに連続し、直線状のものを交差させて表現。
328		瓦器椀	第 1 層	13.2	2.8～3.2		50%	50%	外：指押え、ナデ、ヨコナデ、ミガキ 内：ナデ後ミガキ	密	良	N8/ 灰白	和泉型。見込み暗文は平行線状。体部内面のミガキは渦巻状か。高台は一周せず、途切れる。
329		須恵器甕	第 1 層	(23.8)	(6.8)		20%	10%以下	外：格子タタキ、回転ナデ 内：ナデ、回転ナデ	密	良	N6/ 灰	亀山焼か。
330		灰釉碗	側溝	底径 (6.4)	(1.9)		底 25%	10%	外：回転ナデ、糸切痕 内：回転ナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	内底面に椀付着。内底面は使用時の摩耗により平滑。
331		山茶碗皿	第 1 層	(6.6)	1.8		10%	10%	外：回転ナデ、糸切痕、内：施釉	密	量	10Y7/2 灰白	細片図化。
332		棟端飾瓦	第 1 層	高 (8.8)	幅 (8.1)	(2.8)	—	—	表：ナデ 裏：雜砂付着	密	不良	N5/ 灰	7 溝直上から出土。下端は丸瓦と組むよう円形に加工。文様はヘラ描き沈線と表現。裏面に 1 mm 以下の雜砂付着。18 世紀以前を想定。
333		石鏝	第 1 層	長 2.7	幅 1.8	0.3	—	90%	—	—	—	—	サヌカイト製。重量 1.8 g。

写真図版



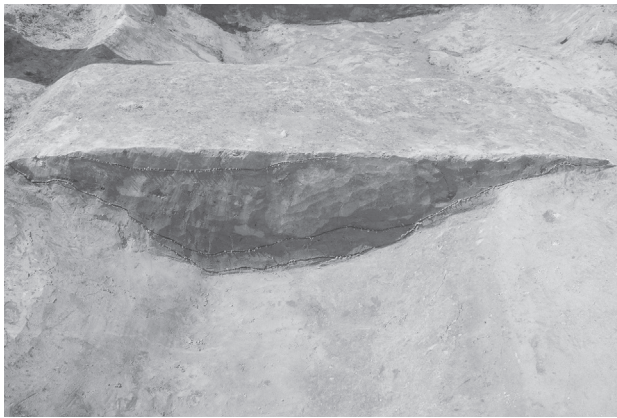
第3面（北東部）全景（南西から）



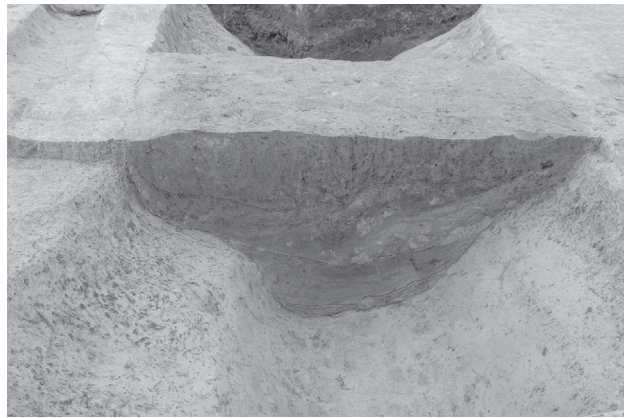
1. 1・602 溝断面 (南東から)



5. 173 溝断面 (南西から)



2. 3 溝断面 (南東から)



6. 240 溝断面 (南東から)



3. 7 溝断面 (南西から)



7. 241 溝断面 (南西から)



4. 118 溝断面 (北西から)



8. 416 溝断面 (北西から)



1. 11 井戸曲物検出状況（南東から）



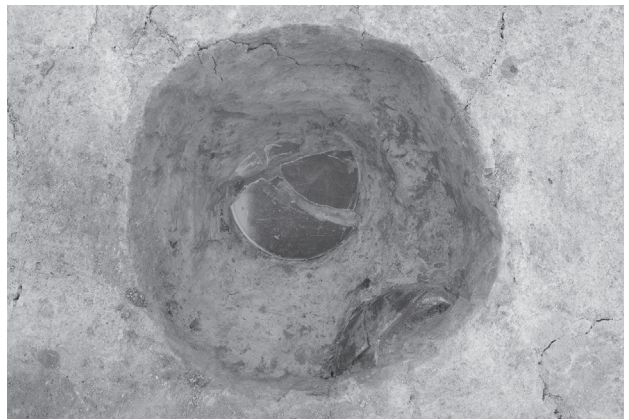
2. 162 井戸曲物検出状況（北西から）



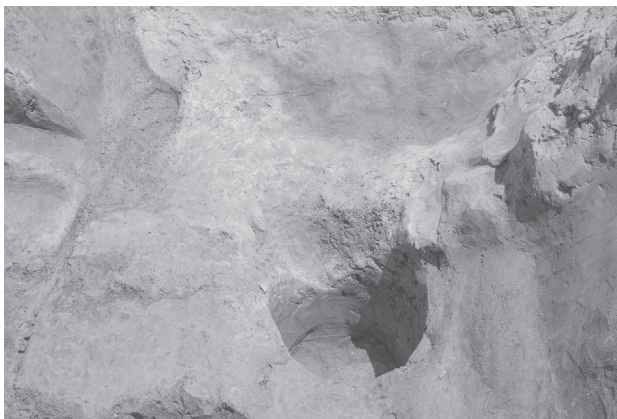
1. 469・472・474 井戸検出状況（北から）



2. 469 井戸遺物出土状況（南東から）



4. 393 土坑遺物出土状況（南西から）



3. 469 井戸完掘状況（南西から）



5. 488 土坑遺物出土状況（南東から）



1. 472 井戸遺物出土状況（南から）



2. 472 井戸曲物検出状況（南東から）



1. 掘立柱建物1 検出状況（南西から）



5. 掘立柱建物5 検出状況（南西から）



2. 掘立柱建物2 検出状況（北東から）



6. 77 柱穴検出状況（南西から）



3. 掘立柱建物3 検出状況（南東から）



7. 79 柱穴検出状況（南東から）

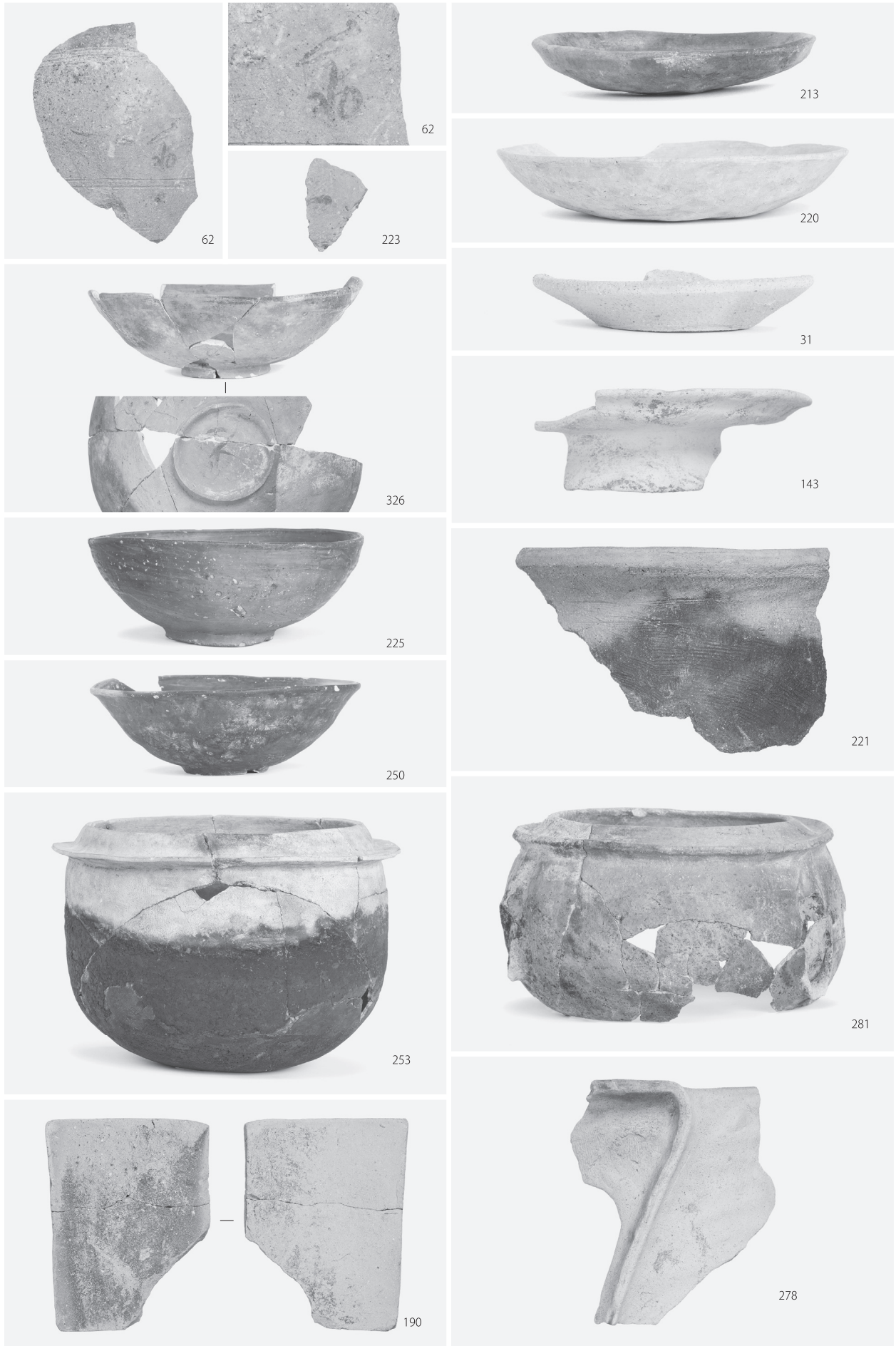


4. 掘立柱建物4 検出状況（南西から）



8. 269 柱穴検出状況（南西から）

図版6 遺物

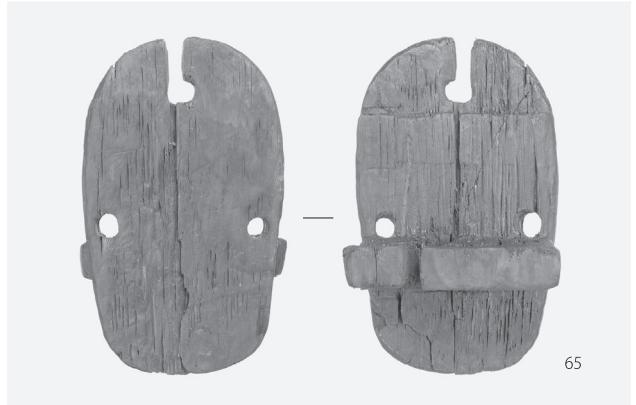




117



237



65



302



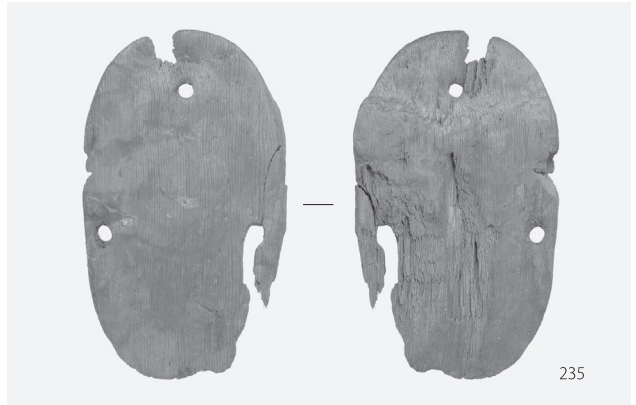
236



234



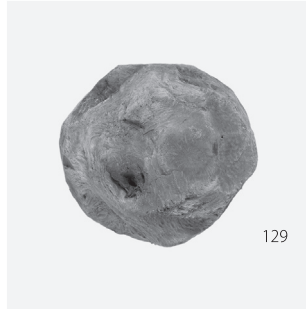
255



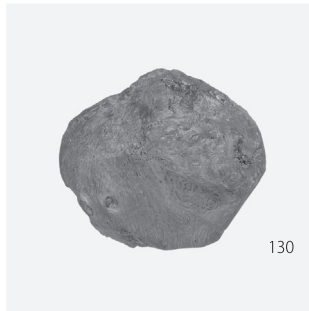
235



128



129



130

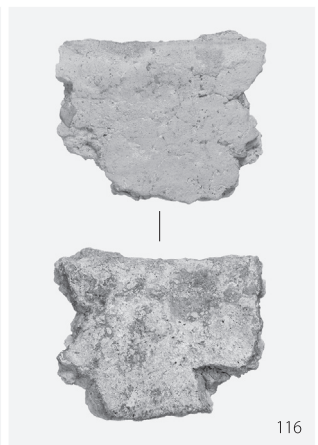
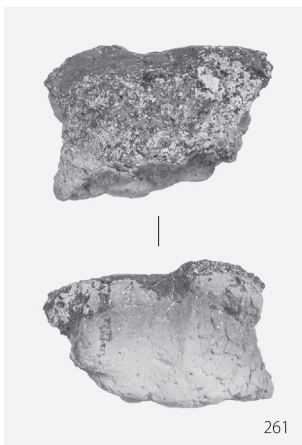
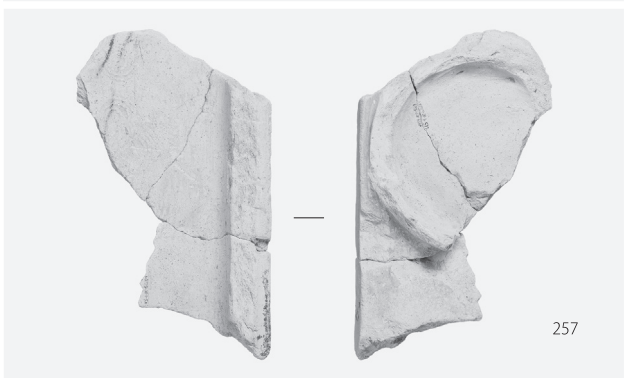
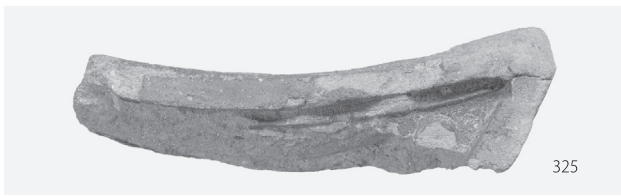
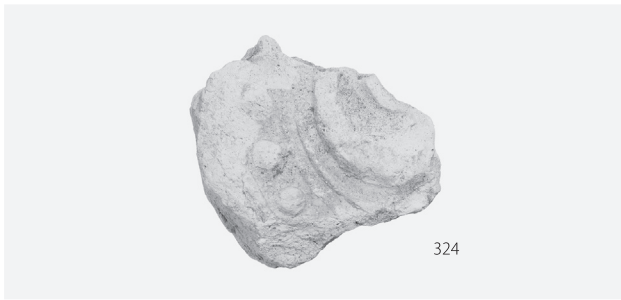
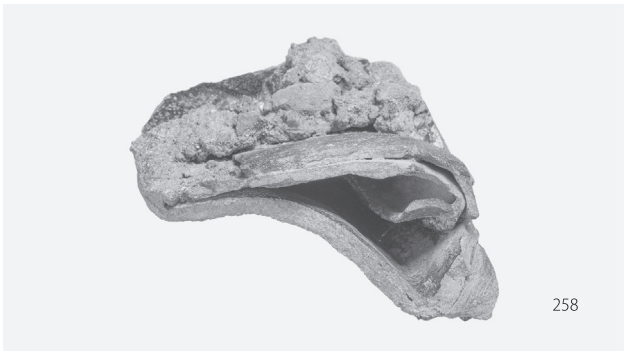
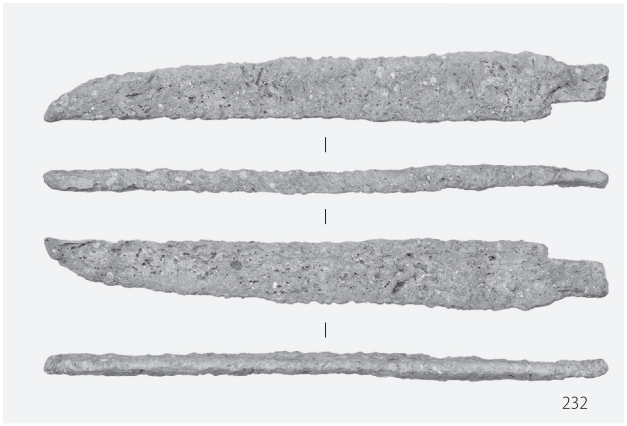
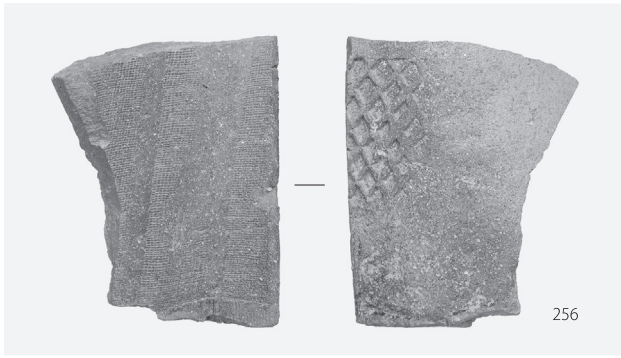


131



322

図版8 遺物



報告書抄録

ふりがな	めだわらいせき・すいたそうしゃじょういせき						
書名	目俵遺跡・吹田操車場遺跡 17						
副書名	吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 324 集						
編著者名	後川恵太郎（編）						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL072 - 299 - 8791						
発行年月日	2023 年（令和 5 年）3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
めだわらいせき 目俵遺跡・ すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡	すいたしめだわらちよう 吹田市目俵町 1 - 1	27205	109・73	北緯 34° 46' 10" 東経 135° 31' 56"	2022.03.01 ～ 2022.07.31	3715 m ²	吹田総合車両所近代化 改良他工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
目俵遺跡・ 吹田操車場遺跡	集落	縄文時代～弥生時代		石鏃、弥生土器			
		古墳時代		須恵器、窯体、陶棺		須恵器溶着資料が出土した。	
	集落	奈良時代～平安時代		黒色土器、灰釉陶器、瓦			
	集落・ 生産	中世	井戸・土坑・掘立柱 建物・柱穴・ピット	土師器、白色土器、須恵器、瓦器、陶磁器、 瓦、石製品、金属製品、土製品		木製品は部材が出土した。鉄製品は短刀が出土した。	
要約	中世前半の屋敷地を検出した。屋敷地では溝、井戸、掘立柱建物が検出された。溝や井戸からは土師器皿、白色土器皿、瓦器碗、須恵器皿・鉢・甕、瓦等の多量の遺物が出土した。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 324 集

目俵遺跡・吹田操車場遺跡 17

吹田総合車両所近代化改良他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2023 年 3 月 31 日

編 集 公益財団法人 大阪府文化財センター

発 行 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 株式会社 明 新 社
奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地